
放浪王子と異端の聖女

花香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放浪王子と異端の聖女

【Nコード】

N6170G

【作者名】

花香

【あらすじ】

精霊の恩恵による《精霊術》と、《魔術》が存在する世界グリオル。旅する渡りの薬師と災禍の取替えっ子と呼ばれた少女は出会い、明日へと踏み出した。それは、様々なことから逃げ回っていた青年と少女の運命を変える長い旅。

プロローグ

3年前

「つまじ、やってらんねー」

夜明け前の薄闇の中、足音を殺して颯爽と駆け抜ける影があった。

「おいおい、いいのか。勝手に出てきちまって。」

走り抜ける影に、呆れたように声をかけたものがいたが、その姿は見えない……

いや、見えないのではなく、声を発したのは人ではなかった。

影の上を飛翔している鳥から、声が漏れていた。

鳥の羽ばたきは軽やかだが、その翼はあまりに広い。

大鷲よりも一回りも、二回りも大きいのではないだろうか。

「いいんだよ。」

どうせ、人形にはなれないんだから。。。」

影の口調は軽いが、鬱とした陰りも見られた。

……が、

「そんな、殊勝なこといつて。。。」

お前、…ただ遊びたいだけだろう!」

心のうちを精通しているのか、その大鳥はますます呆れた口調だ。

「へへへ。わかってんなら、聞くなよ！」

俺が、神殿なんかに行けると思うか？ それとも、騎士に？ 政治家に？」

つんなの無理だろうと、影はへらへらと笑った。

「このつつ、ガキンチョが!!」

ぐわつと怒鳴る大鳥にも、影はどこ吹く風と受け流す。

こうして、とある帝都から姿を消した人物がいた。

そして、、、

その日から幾日もせず、とある帝都から秘密裏に動く者達が帝国中に散って行った。

彼らの任務は、とある人物の捜索。

……ではなく。

とある精霊を説き伏せ、御帰還願うことだった。

1話、空腹は最大の幻覚剤

「…腹減った。。。」

ふう、と浅く息を吐いたのは、行李を背負った行商人風の青年だ。背を丸め、いかにも、疲労困憊ですつ！もう、歩くの辛いですつ、と言わんばかりに、とほとほと街道を進んでいた。

眼前に広がる長閑な風景。すぐそこには、暢気に欠伸をする家畜。平和な風景が見渡す限り続いている。

ふいに、
「……ゴクツ！」
と青年の喉が鳴った。

右を見れば、

牛？

左を見れば、

羊？

それ、即ち、
ステーキに~~~~~！

マト~~~~ン！！

あんなに旨そうな食い物が、すぐそこにつ……！！

つてか、んんん？

見てるのが誰もいない？

ってことは…

「……ハッツ！」

これぞ、天からのお恵み？

ってか、そう！

絶対、そうだから！！！！

ニヤリと怪しげに笑い、青年はギラついた目つきで獲物を見定める。肉付きがよく、いかにも脂がのつていそうな獲物！

それは……。

あれだ！

「いざ、行かん！！！！ 天の恵みに！」

青年が狂ったように柵を乗り越えよう

「この、大馬鹿者！！！！」

とした瞬間、ガツンツと勢いよく何か顔面をぶつ叩き、その拍子にズベンツと盛大に尻餅をついていた。

「痛つて〜！！！」

顔面を押さえて痛みに呻いていると、背負っている行李に静かに何か降りてきた。

「バカだ、バカだとは思っていたが、ここまでとは…
恥を知れ、恥を！」

青年の頭上近くまである行李の上には、大鷲より一回り大きな鳥が乗っかっていた。

そして、容赦なくゲシゲシと青年の頭頂部を踏みつけている。

「腹減ってたんだから、しょうがないだろ。」

「んで、もう蹴るなって。ハゲたらどうする。」

しゃべる大鳥に驚くこともなく、へろへろと力無く大鳥を頭頂部から払いのける青年に。

「っふん！」

と鼻で笑って大鳥は青年の眼前に移動した。

「さつさと、立って歩け！」

あと、ちよともしないうちに民家があったぞ。」

くいくいつと翼で先を示す。

そこで何かしら食べ物を食べればいい、ということだろう。

はあ。と嘆息を付いて青年は立ち上がった。

集落までは確かに、あと少し。

どんなにかかっても、ものの数分で着く距離だ。

だが、青年が目指す食事までの道のりは、果てしなく遠いと感じていた。

実感をこめて。

「……金。」

青年の懐の財布から、小銭が当たる音は……

カチ

……悲しくなるほど小さな音しか、しなかった。

2話、好奇心は狂気に出会う。

放牧地帯が終りに差し掛かり、集落はもうすぐそこにまで迫っている。

もうだめ。

もうだめ。

もう、腹減りすぎてだめ〜！

と心の中で絶叫していた青年は、言い争っている声を聞きつけた。

うん？

何だか、いや〜な雰囲気？

青年は近寄らないことが賢明であると思ったが、少しばかりの好奇心が自然と声の方へと体を引っばっていく。

どうやら、家畜小屋の付近で話しているようだ。

家畜小屋に近づくとつれ、耳にキンキンとくる甲高い声と、くぐもった低い声が聞こえてきた。

耳を澄ますまでもなく、会話は只漏れた。

「この子も買ってくれてもいいだろう？」

甲高い女の声が不服そうに声を荒げ、

「おいおい…よしとくれよ。うちは、牛馬しか買わないって言うてるだろう。」

迷惑気に男は素っ気なく返していた。

問答を繰り返している様子が気になり、青年はひょいっと、相手の姿が見えるぎりぎりの所まで近づいた。

さして、何かを思ったわけではない。ただ、

この子って、さっき見た羊か？

牛馬以外は買わないという男の声に、青年は確認のために顔を近づけただけだった。

「銅貨1枚でもいいってんだから、いいじゃないか！」

怒鳴りつけるように女は続ける。

銅貨1枚なんて、タダ同然じゃないか！！

小さいパンすら買えん。

パンは1番小さなものでも、銅貨10枚というのが一般的だ。かなり安くても、7枚。

大人が昼食として食べるなら少なくとも2つ以上は購入するため、最低でも銅貨20枚払うことになる。

しかし、パン2つの食事なんて、とても満足するようなものではない。せいぜい、小腹を鎮めるぐらいが関の山だ。

普通に腹が満たされるモノを、と思えば食堂で銅貨50枚以上は払う。

羊をそんな少額でやりとりするのか？変じゃないか??

青年は首をかしげながら、もしそうだったら、速攻買っちゃうかも

と懐具合をちらりと確認する。

そこには、銅貨5枚しか入っていない。

つまり、青年は小さなパンすら、現在買うことができないわけである。

そんなことをつらつら考えていた青年の益体もない思考は、男の怒号で遮られた。

「うちは奴隷商じゃないんだ！

子供なんか受け取れるわけないだろう！それに、あれは……」

男は始めは激昂して唾を飛ばしていたが、最後の方はもごもごと口を噤んで視線を彷徨わせた。

子ども……！！

ちらりちらりと男が彷徨わせる先には、離れたところで周りを牛に囲まれた子どもが立っていた。

一見ただけでは、男か女かわからない。

ひどく、痩せた子どもだ。

男が落ち着かないところに、女がゆっくりと口を開いた。

「……家畜を看る番にでも役に立つよ。

この前、番を探していると言ってたじゃないか！

……もちろん、あんたが次の町で売ったっていいんだよ。」

女は子どもをちらりとも見ることなく、話している。

その声はひどく冷たく投げやりとさえ思えるが、罪を被せる人間を見つけた愉悦を隠しているようにも聞こえた。

「 そんなことは、無理だ。」

そんな女に、男が声を落して言ったことに、

うんうん。あんなに小さな子を家から追い出すことに加担なんてね。

と胸を撫で下ろしかけたが、次の言葉でそれは裏切られた。

「あんな化け物、無理に決まってる。」

次の町に行くまでに、俺が燃やされる!!

俺はっつ……」

男は、恐怖で顔を引きつらせた。その様子は尋常ではない。

そんな男に、女はくくつと薄く笑う。その目には狂気が透けている。

「…大丈夫さ。」

神官様に“口封じの法”をしてもらっている。

あれは、今は何もできやしないのさ!」

その女は、こんな長閑な集落にはあまりにも似つかわしくなかった。

その女の言葉は、青年は凍りつかせるには十分だった。

“口封じの法”というのは、罪人への刑罰の1つともなっているものだ。

もしくは、敵対するものに法術・精霊術を使わせないためだとか、

魔獣に対して使うものであって、普通の生活をしている者に施すようなものではない。

青年が見つめる先にいる子どもは、10才になるか、ならないかぐらいの子だ。

こんなに小さな子に…

呆然としていた青年を置いてけぼりにして、なおも2人の会話は続いていた。

「口を封じたところで、何になる！！

あれは、災禍の取替えっ子！親殺しの化け物じゃないか。

大事な家畜の番を任せることなんかできやしない！！

そんなこと、わかりきったことだろ…みんな知ってることじゃないか。

たとえ、売ろうたって、あんな化け物売れないどころか、

罰金として俺のかわいい仔たちが奪われちまうじゃないか！！！」

男が興奮した口調でまくし立てるが、女は狂気を帯びた目つきで男を見ているだけだった。

その視線は薄ら寒いものを感じさせる。

その目を見た瞬間、青年はダメだと思った。

何が、ダメなのかも分からなかったが、とにかくダメだと思ってしまった。

そして、青年は我知らず2人に向かって歩いていった。

3話、自己紹介は紳士的に

「あゝ、どうしたもんかな。」

行李を背負った青年は街道でぼんやりとしていた。

青年の手には、小さな手が握られている。

その手は小さく、骨が浮いている。

薄汚れたボロを纏い、着ているボロ以上に汚れている表情は虚ろで、パサパサの白髪は複雑に絡まっている。

誰が見ても孤児か、物乞いと思ってしまう子の手を。

しかし、この辺の住人なら誰もが知っている子を。

そう、青年は勢いに任せて、さっきの牧場から“災禍の子”と呼ばれていた子どもを、連れ出してしまったのだ。

「いやいや、お前にも義侠心があったのか？」

面白そうに口を開いたのは、行李にとまっている、あの大鳥だ。

「いや、」

そんなものは無かったはずなんだけどな。」

どうして、あの2人に割って入ってしまったのか？

強引に交渉を進めて、有無を言わず連れ出してしまったのか？

今、考えれば普段の青年からは想像することもできないことだった。

大鳥は、そんな青年の困惑気な顔を「ふふっ」と嬉しそうに見ていたが、

じつと虚ろに固まっている子どもの様子に、

「まずは、自己紹介でもしたらどうだ？」

と、くいくいつと青年の赤銅色の髪を引っ張って促した。

「んっ？」と引っ張られたままに横を見れば、体を強張らせている子ども。

見ず知らずの人間にいきなり手を取られ、何の説明もされずに歩かされ、

おまけに街道の真ん中で唐突に立ち止まったと思ったら、鳥がしゃべりだして……

明らかに、俺、ちょく不審者なんじゃね？

ってか、確実にやばい人だって思われるに決まってるじゃん！！

自分のかなりの不味さに思い至り、ヤバイ、ヤバイとあわあわしている、

「レディを待たせるなぞ、失礼だぞ！」

と大鳥から叱責を受けた。

青年は、大鳥の口から出た予想外の言葉に「はあ？」と目を点にした。

レディ???

こいつ、男じゃなくて、おんな、の、こゝ???

パサリと軽やかに少女？の傍に大鳥は降り立つ。

「私は、空を司る精霊であり“天空を駆ける孤高なる者”。

人は“猛き天空”とも呼びますが、貴女は、リゼ、と私をお呼びください。」

子どもの眼を見つめて、リゼと名乗った精霊は、混乱中の青年を置き去りに自らを明らかにした。

それは、普段、人に対するアタリが、非つつ常々〜に厳しいリゼからは、全くと言っていい程考えられない態度だった。

しかも、

つつつ！ 精霊としての「名」を告げるなんて！！！！

精霊は自然界を司る様々な力を備えている。

内在する力はそれぞれだが、精霊は全体的に自由を尊び、勝手気ままで、プライドが高い。

内在する力が低い人間という種族に対して、高飛車な態度を取り、見下しているモノが多いのが常だ。特に、人間にも姿を見せることが可能な程、力を持っている精霊は、その傾向が強い。

リゼのように、質量を持って顕現できる精霊なら、山よりも高いプライドを持ち、海よりも深く人間を見下すというスタイルが当たり前というものだ。

それなのに、リゼは自分から進んで精霊としての名前、

「天空を駆ける孤高なる者」

という名を告げた。これは、まずありえないことだった。

「精霊としての名は、精霊同士でも、自分より下位の精霊には名乗らないぐらい大切なものだ」とか言ってたくせに……………

なんでも。とあまりのことに目を白黒させていると、

「お前も、さっさと名前ぐらい言えっ！」

と、口をあんぐりをあけた間抜け面に、バチコンツとリゼの張り手ならぬ、張り翼？がクリーンヒットし、青年を5メートル程吹っ飛ばす。

「つつつ！！！」

あまりの痛さに声も出ない青年に更に、

「早くしろっ！！！」

威嚇するよにバサツと翼を広げるリゼ。

青年はあまりの理不尽さに、反射的に反論したい衝動に駆られたが、クワツと更なる威嚇行動に移行するリゼに、握り締めた拳をふるふるさせながら、

「ここは、ぐつと、ぐつつつと我慢だ俺！！！」

と小声でなんとか押しとどめる。

その姿は、なんだか物凄く哀れな雰囲気醸し出していた。

そして、怒りを鎮めるように小さく深呼吸をして、柔らかい笑顔で子どもに向きなおった。

「俺は、キールという。渡りの薬師だ。」

これから、君の保護者になったから、よろしく頼む。」

と、ハキハキと良く通る声で名乗った。

その態度は、一介の薬師としてはあまりに堂々とし過ぎていた。

それは、まるで……

人を従えることに慣れた者の態度だった。

4話、少女の困惑

何だろう？

何なんだろう？

この目の前の人たちは。

一体何がしたいのだろう？

何で、この人はわたしの手を取ったのだろう？

何で、この人はわたしの手を握ってくれたのだろう？

何で、この人はわたしをまっすぐと見るのだろう？

何で、この人はわたしに名乗るのだろう？

……何で、この人はわたしに微笑んでくれるのだろう？

少女の混乱した頭に、ぐるぐるとしているのは、たくさんの「何で？」という疑問だけだった。

少女が知っている“人”は、少女の手を取ったり、握ったり、まっすぐに見つめたり、名乗ったり、まして微笑みを向けるなど……
…そのような愚かしいことをした者を見たことがなかった。

物心ついてからずっと。

今までの自分に対する、最も好意的な“人”の態度は、「無視」であつたし、嫌悪、憎悪は当たり前。少女に一瞬でも触れれば穢れが

移り、目を合わせれば呪われる。誰もが恐れ、畏怖し、いないものとして扱う。

一瞬でも憐れんだ目をする者などは、それこそを恥じる。これこそが、“人”が少女に向ける適切な態度であった。

一番長く接していた“人”、少女がいた牧場の女主である、マアムがそうした態度を取る筆頭であり、恐れ、畏怖し、嫌悪し、憎悪していた。

それは何も知らぬ者が見れば、何でそこまでの感情を抱く必要があるのか？

と首を傾げるほどの畏怖と嫌悪、憎悪を。

しかし、この村では……

いや、この村だけではなく、この村から遠く離れた3つ向こうの村の者でさえ、その感情を訝しむものはいない。

それだけ、少女は畏怖と嫌悪、憎悪の対象とされる悪名高い子どもであり、そんな悪名高い少女を家の一画に住まわせているマアムは、3つ向こうの村からも尊敬される大人物と目されていた。

たとえ、マアムが立場上、否応なく少女を引き受けねばならない身であったため、仕方がないことだったとしても。

そして、受け入れた瞬間から、マアムはその悪名高い子どもを、畏れ、嫌悪しながらも追い出すことができず、忸怩たる思いを抱え、常に緊張を強いられていた。

そのマアムの感情を、少女はいつも感じていた。

だからこそ、【その感情】が少女と、“人”との間にあるべき正しい思いで、適切な態度を生みだしているのだと理解していた。

少女の生活場所は、放牧地の一画にある、使われていない家畜小屋

で、申し訳程度の屋根はあるが、風を防ぐ壁は役割を果たせないほど隙間だらけだった。

何もかもをさらう大風が吹こうが、雷を伴う豪雨になろうが、身が凍えるほどの吹雪になろうが、少女の生活場所は変わらなかつた。少女がしていることはほとんどなく、禁止事項は山ほどあつた。特に口を開くことは嚴重に禁止されていた。

生きることが許されるのは、足と小屋の柱を繋いでいる麻ひもがピントと張り詰める範囲までであつたし、物心ついてからずっと【そう】だつたから、少女はそれが異常だとは思わなかつた。そして、道行く者たちが向ける悪感情も。

ある日、マアムと共に神官が現れ、少女に口封じの法を行使した後、足からは麻ひもが断ち切られたが、少女の生活範囲は全く変わらなかつた。

どこかに行きたいとか、何かをしたいといった思いは湧いてこなかつたし、何かを【思う】ということすらもしなかつた。というより、そんな感情はなかつた。

より正確に言つのなら、少女の心には何もなかつた。あらゆる願い、あらゆる感情が。

少女は息をしているだけで、“生きていなかつた”のだ。

だから、、、

この“人”は、何なんだろう？

“人”が向けるべきものを、キールと名乗つた、この“人”は向けていない。

なら、キールというのは“人”ではないのだろうか？

目の前で翼を広げている大きな鳥は、精霊だと言っていた。

なら、キールというのも精霊なのかもしれない？

だから、手を取り、手を握り、目を見てくれて、名乗ってくれて…
…そして、優しく笑ってくれるのではないか？

“人”は、決してそんなことは、しないのだから。。。

少女はキールに対して、そう思った。

そうとしか、理解しようがなかった。

目の前にいるキールを、“人”と思うことが怖かったから。

5話、勘違いと混乱の先

少女が思考に没していると、目の前の“精霊”の腹から盛大にぐうぐうと音がした。

“精霊”もお腹が空くのかと、少女はぼんやりと思つ。

「ああ、もうだめ、ほんとにヤバイ！

食わないと死ぬ」

少女に思いつきり変なことを思われているとも知らずに、キールはへろへろと倒れた。

「まったく、なつとらん！これだから、お前は…」

とりぜは、ガミガミとキールへダメだし口撃を始めたが、いつものことなのでキールは右から左で全く聞いてはいない。

「そんなことより……りぜ、探してきて。」

りぜのダメだしにかぶせて、キールは倒れたまま言つ。

「く~~~~、いつもいつもお前は……！」

バサバサバサツと翼をはためかせて抗議をするりぜに、キールはワザとらしく、つつつと視線をりぜから子ども（りぜ曰く少女？キールには今だ女の子とは思えないが……）へと移動させる。

その視線の動きだけで、りぜはピタリと動きを止め、くるりと頭を動かす。

「頼むな」

そこに、すかさず弱々しくキールが声をかける。…ニヤつきながらリゼは、「チツ…」と舌打をして軽やかに上空へと舞い、そのまま街道を外れて森へと消えた。

それを見送り、キールは徐おもむくに立ち上がる。

「…つんなこと、言われるまでもない……」

立ち去り際に、キールにだけ聞こえるように、

『あの子の術を解いておけよ』

と風に乗せて囁いていた言葉を実行するために。

目の前の子どもにかけられた術、“口封じの法”の解除方法は大別して2通りある。

1つは効果が切れるまで待つこと。

これは、安全確実な方法だ。

魔術である限り、例外を除けばいつかは効果は切れるものだ。

ただし、行使した者の実力にもより、いつ効果が切れるかが判らないというのが問題だ。

もう1つは術をもつて解くこと。

“口封じの法”には、“無効化の法”を使うことが多く、解除方法を知っている者も多い。

ただし、この術式は非常に難易度が高い。

これは“無効化の法”の術式が複雑で、術を補助する大規模な魔方阵を描いたり、魔石を対象の四方に散りばめたり、人数を集めて役割分担をしたりと手間がかかるからだ。

しかし、

「いま、それから開放してやるからな。」

キールはというと言うこともないことのように、気楽に構え、

「『我、この者の解放を願う』」

一瞬で広がる淡い緑色の魔方陣。

ぐるりと子どもを囲み、“口封じの法”の要となっていた魔方陣が、子どもの細い首を中心に赤く浮き上がったかと思ったら、緑色の魔方陣に飲み込まれ、

パリッ

と薄氷が砕けるような、儂い音がか細く鳴った。

ただそれだけで。

たった一文の詠唱だけで、本来複雑な工程を踏むべき術式が成っていた。

「もう大丈夫。」

キールはしゃがんで子どもの視線と自分の視線を合わせ、頭をよしよしと撫でながら柔らかく笑う。

「もう、苦しまなくて大丈夫なんだよ。」

しゃべても、笑っても、泣いても…何をしてもいいんだ。

もう、声を出しても大丈夫だよ。」

ゆっくりと、ただゆっくりとキールは語りかけた。

複雑怪奇に絡まった白髪を撫でながら、まだ虚ろな表情の子どもの銀色の目を見つめて。

それじゃは、まずはお名前を聞きたいな〜なんて言いながら。

「……」

一方、少女はキールなる“精霊”の行動にかなり、戸惑っていた。

牧場の女主人マムが「神官様」と呼んでいた“人”が、

「これならば、一生声は出ないでしょう。“災禍”に通常の封じよりも強固な術式を行使しましたので、ご安心ください。如何なる術を持ってしても解けはしませんまい。」

などと言って、なじみ深い嘲笑を漏らしていたというのに…

少女の眼前に、優しい緑の光が舞ったかと思つたら、“精霊”が「大丈夫」だと唐突に言った。

何が大丈夫なのかと思えば、「声を出してもいい」なんて言ってきた。

今まで、声を出すことをずっと禁止されていたから、声を出すことに対して、どう感じているのか分からなくなっていた。

声を出したいのか、出したくないのか。

大丈夫と言われて嬉しいのか、何とも思っていないのか。ぐるぐると頭が回って答えが出なかった。

更に追い打ちをかけるように、“精霊”のキールがさつきからずつと黄金色の瞳で見つめ、くしゃくしゃと頭を撫でと、少女にとって初めてのことばかりするから、余計に混乱してしまう。そして、“精霊”のキールが「名前を聞きたい」と言ってきたので、ますます戸惑った。

なまえ？

わたしの、なまえ？

……………なまえってどれ？

少女が覚えている限り、幾つも呼ばれている名前が、少女にはある。災禍。取り換えっこ。化け物。忌御。親殺し。大火の魔女。厄災の悪魔…………

まだまだあったが、どれを言えばいいのか、一番言われていたものを言った方がいいのか、、、少女にはわからなかった。

分からないから、一度開いた口を閉ざしてしまった。

そして、ハタと思う。

“精霊”のキールに全部言えばいいのかもしれないと。選んでもらえば良いのではないかと。

だから、随分と声を出していない喉を震わせ、ケホケホと咳きこみながら、

「災禍、取り換えっこ、化け物、親殺し、大火の魔女、厄災の悪魔

…………

どれがなまえ？

“精霊”のキール、どれ？」

と口にしていた。

5話、勘違いと混乱の先（後書き）

今回、キールが魔術を行使したので、その解説を下記でしております。興味がある方はご覧ください。

これからも、新しい魔術などが登場した場合は、解説していきたく思います。

（なにぶん、本文では流してしまっている部分がありますので……わかり難い点等ございましたら、よくしくお願いします。）

〳〵ちよこつと魔術の解説 そのき〳〵

“口封じの法”とは…

声帯の動きを阻害して、喉から音を発さないようにする中位の魔術。話すことは勿論、嗚咽なども発することができないので、かなりストレスが溜まる。なので、犯罪者の刑罰の一種としても使用されている。

主に、敵対する魔術師や、魔獣、犯罪者に使用する。

“無効化の法”とは…

そのまんま。あらゆる魔術を無効化する魔術。

効果は絶大！ただし、とつても面倒で高等魔術の1つとされている。使用するには大規模な魔方陣を地面に描いておくか、魔力が詰まっている魔石を5つ以上使うか、3人以上で術式を補助する必要がある。

（通常、キールみたいに詠唱1つで可能になるような魔術ではない。）

〳〵 終 〳〵

6話、キールの深まる困惑

目の前の子どもがケホケホと咳きこむ。

随分長い間、“口封じの法”を施ほどこされていたのかもしれない。キールの胸の奥がキリツと痛む。

何とか話そうとしている子どものために、

「『癒しの息吹を』」

とそつと治癒の術をかけた。

これで、喉の痛みは取れるだろう。

術の効果のおかげか、ケホケホと咳こんでいた子どもが、つつかえつつかえ喉を震わせ、か細い吐息に乗せてしゃべりだした。

「災禍、取り換えっこ、化け物、親殺し、大火の魔女、厄災の悪魔

……

どれがなまえ？

“精霊”のキール、どれ？」

と相変わらず無表情のまま、キールに問いかけた。

その問いかけに、

つえ〜〜と……この子は何を言っているのかな？

突っ込みどころ満載のセリフに何を言えればいいのか。

キールには、全く持ってわからなかった。

…この子が発した言葉の意味をキールは理解しなくなかった。

まず……は、、、、

そう、まずは冷静になろう。

冷静になつて考えてみようじゃないか。

まず、この子はリゼの言う通り、女の子らしい。

近くで見てもよくわからんが、長い間使つてなかつたからかな？
しゃがれてるけど、声は高いし、きつと治れば鈴のようなきれいな声をしているんだろう。。。

つって違う！！！！！

言ったことから逃げてどうする。

一人脳内ポケ突っ込みをしながら、キールは思考する。

冷静になるんだ。冷静に…

まず、

「災禍、取り換えっこ、化け物、親殺し、大火の魔女、厄災の悪魔
……どれがなまえ？」ここ！！

この発言、全面的に間違つてるから！

どれも名前じゃないし！

こんなの冗談じゃない！！

唾棄すべき最低最悪な呼び方だ。

この子は……こんな風にずっと呼ばれていたのか？

キールは、やりきれない苦しさに齒噛みする。

少女の空虚な目が、複雑怪奇な白髪が、ボロボロの格好が、汚れき

った体が、細過ぎる体躯が。そのすべてが悲しく、辛かった。だから、気付けばぐっと少女を抱きしめていた。

これまでの少女の人生を労わるように。
これからこの子に多くの幸があるようにと。

そこで、忘れてしまいそうになっていたもう一つのトンチンカンな自分に対する言葉を思い出した。
それ即ち、「精霊」のキール。

こりやくなんだ??

明らかに、「精霊」じゃないだろう。この子よりもっと小さい子でもわかるだろ??

それや、精霊は色々な姿形の奴がいるが…

誓約を破つてまで、人の形態にはならないだろう?

“精霊”と“人”の間には、『誓約の調べ』というものがあり、精霊が人の形態を取ることを禁止するというものがある。
これを破ると、精霊は精霊から逸脱した、他の“何か”になるといわれている。

それは、精霊にとっては耐え難い苦痛と、自我の崩壊を招く。
それ故に誓約を破るものはいないのだと。昔から言い伝えられている。

しかし、そんな誓約がなくても、精霊はプライドが高く、人間を見下している。

そんな精霊が、見下している人間の形態をとることはない。
精霊が質量を持って顕現するとしたら、人間以外の形態をとってい

る。

そして、自分の好みに合わせてカスタマイズしたり、本来の自分の姿を顕現している。

たとえばリゼは、基本は大鷲のフォームをとっているが、体軀は一回り大きくしているし、羽は空に溶け込むような白と青のコントラストにしたり、夕焼けの茜色にしたりと気分によって変えていたりする。

なぜに、俺が精霊？

この子に、何からどう言えばいいやら……

キールは困惑の中、勘違いも甚だしい発言にしばし悩むのだった。

6話、キールの深まる困惑（後書き）

7話、閉じた心

悩めるキールを助けたのは、リゼの“風の声”だった。

一陣の風に乗せて、声と共に目的地までの道のりを伝える、空を司る精霊であるリゼが、呼吸をするように行使する伝達手段の1つだ。

助かった。。。

キールは安堵の息を吐いた。

少女へ何と応えたらいいのか。正直手詰まりのところ、リゼの声。これほど嬉しいことはない。

一先ず、少女の発言への返答を先伸ばしにしてしまうことになるが、

仕方ないよな〜

とキールは問題を、ひょいっと棚に上げた。

少女が名前だと言って告げた過去の呼ばれ方に関して、キールは自分が何か上手く言ったり、聞き出したりすることはできないと思ったからだ。

しかし、、、

これだけは、これだけは言っとかないと……

少女が何を思って言ったのかは不明だが、少女がリゼにさっきみたいにキールのことを“精霊”と呼んだりしたら……

その後に荒れまくるリゼの姿が、キールの脳裏にサツと浮かぶ。

何て、恐ろしい…

ゾワワツと背中に寒気が走る。

だから、キールは否定した。

自分は精霊ではないと。

何ということもない、普通のこととして。キールは、

「俺は、君と同じ人だよ」

と頭を撫でながら、優しく少女に笑いかけて。

「……………!!」

その言葉と笑顔に、少女の頭は真っ白になった。

何を???

何を言っているのだろうか？

“人”？

わたしと同じ???

そんな！

そんなの、あるはずない！

頭の芯まで煮えたぎる灼熱と、体の芯までも凍らせる極寒が天津波

となつて少女を翻弄した。

人が少女に向けるべきものは、侮蔑と嫌悪、憎悪、ありとあらゆる怨嗟のほずで…

“人”はいつだって、冷酷で残酷な心で少女を見ていた。

それが、当たり前のことなのだから。

キールが向けてくれるこんな温かなものを、“人”が向けてくれるはずがない！

少女の動揺は大きすぎた。

一度、人ではないと、精霊だからなんだと思つたから平気だった。

温かな眼差しも、ふわりと優しい抱擁も、心がぼかぼかする微笑も、

キールが少女を労わる全て。

偏に“人”ではない存在だと思つたから。

だからこそ、すんなりと受け入れていた。

全てを無抵抗に受け入れようとしていた。

なのに、「同じ人だよ」とキールは言う。

少女は灼熱と、極寒で心が裂ける痛みに泣き叫びそうだった。

こんな人がいるはずはない。

キールが“人”なら、マアムは？神官様は？村人は？

あれは何？

みんなと一緒だと？

そして、「同じ」？

同じ人って何？

「君と同じ人」ってどういうこと？

わたしは“人”なの？

化け物は、“人”じゃないんでしょう？

開きかけた心を閉ざした。

8話、少女から人形への変貌

キールは黙々と山道を外れた獣道を進んでいた。

その歩みは、決して早くはない。

むしろ遅い。鈍重と言ってもいい。

何しろ、キールは歩く道々で立ち止まり、草を掻き分けては屈み、木の実を見つければ観察し、様々な植物を手に取りながら進んでいたからだ。

手に取った植物を捨てたり、腰に下げている布袋に入れたりとせつせと動いている。

いつになく熱心に。真剣な表情で。

3メートルほど離れた場所からそんなキール見ていたりゼは、細く溜息を吐いた。

あのバカは……

あれや、明らかに現実逃避だな。

心の中でそんな風に毒づいて。

そう、只今キールは現実逃避街道まっしぐら。

リゼの隣りにいる少女の無言、無表情、無感動と向き合っことを全力で逃げているところだった。

動揺、困惑、不安、心配……様々な感情をもてあまし、少女のことをいろいろ考え。

しかし、その確たる対処法がわからずに、一人で勝手に無限迷路にはまって、苦しんで……

リゼには、キールのその心の内がひしひしと伝わってきていた。

全く、大バカモノだな。

悩み、苦しみ、だけどどうすることもできない、キールに苦笑しか浮かべられなかった。

そして、リゼは横を向く。

そこには、先程からキールをじっと観察しながら、一定の距離を保ち続ける少女がいた。

そこに浮かぶ感情は何もない。

少女と出会った3日前も無表情だったが、ここまで無機質ではなかった。

無表情の中にも、困惑や戸惑いといった感情が伝わってきた。

ただ、感情表現の仕方がわからないから、無表情なのだろうと感じさせた。

しかし、今は人形のようにだった。

心もなく、感情も揺らがず、ただそこにいるだけの人形。

どうして、こうなったんだ？

何かがあるはずなんだが、と少女の人形のような表情を見つめながら、リゼは人形へと変化した瞬間を思い出していた。

××××××××××××

「リゼ」

街道沿いの森。

獣道を抜けた、ちょっと開けた場所にリゼは翼をたたんでキールを

待っていた。

キールの呼び声にリゼは、

「……(せっせっ せっせっ)」

返答しなくても、キールが場所を特定できないわけではないし、いちいち声を出す程でもない。

何より、待っている時間に始めた、この翼の身づくろいを優先させたい！

とくつくつとび。

「リゼ〜〜」

「……(せっせっ せっせっ)」

「リゼ〜〜〜〜」

「……(おっ、こっちもしないと)」

何度呼ばれよう。

「……」

無言。

「……おう！ とか、ここだ！ とかぐらい言ったらどうよ。」

リゼの前にキールが現れるまで、身づくろいに熱中しているのだった。

「うんっ。 もう少し、遅くなると思ったんが……
寝たのか??」

何の気もなしに、キールを見たりゼは、横抱きになっている少女にだけ注目する。

キールの文句などは完全無視。

そんな、態度にキールは慣れたもので、溜息一つ零さずに「ああとだけ答えた。

その返事の中に含まれた困惑に、リゼは首を傾げる。

「何かあったのか?」

少女を見つめたまま聞けば、

「いや。よくわからん。いきなり倒れた?」

と、何とも言い難い表情でキールは頭を振る。

「病か?」

「いや。違う と思う。診たところはな……」

「疲れか。」

「たぶん……」。

とりあえず、目を覚ますまで寝かせるから、場所作って。」

キールの為にというなら断りもするが……

少女の為になら「さつさと作ってやるか」、とりぜは小さく吹き、バサツバサツと二度羽ばたいた。

ただそれだけで小さな風の渦が木の葉を集め、少女が横たわるには十分な柔らかな葉っぱの寝床が完成した。

「おっ、さすがりぜ。」

ヒュ〜と口笛を吹きながらキールは、そっと少女を寝かせた。

身動きもせず木の子の葉の寝床に納まった少女の顔は、心なしか青ざめているように見える。

「それで…」

少女の顔をぼんやりと見ているキールに、りぜは何かあったのか？と疑問をぶつけるが、

キールは肩を竦めて、

「わからん。なんか突然、倒れたんだ。」

言葉少なに返すことしかできなかった。

「まあ、わからないものは仕方がないか。」

そもそも、少女とはさつき寄った村で初めて出会ったわけで、りぜもキールも何一つ知っているわけではない。

りぜにいたっては、“口封じの法”のせいで少女の声すら聞いてない。

「それで？」

「この子の名前は？」

「うん……」

そのことで、リゼに聞いて欲しいことがあるんだけど……

この子さ 「

キールが語った内容は、とても短かった。

だが、その内容はとても重い。

思わず、「うん」とリゼは翼を組み、

「……人とはやはり非道なものなんだな」

憤りと悲しみに、ついキールにまで冷淡に返していた。

キールも精霊のリゼが思うことはわかるが、だからといって

「そう、睨むなよ。」

「うん？」

悪い悪い。お前が悪いわけではないんだが、お前も人だから、ついな。」

悪いと少しも思っていないさそうな口調でリゼは返したが、言葉が返ってきただけましかとキールは思う。

そして、それよりも今寝ている少女に関する話を話し合いたいと考えていたので、さっさと進めてしまおうと口を開いた。

「それでさ、この子の名前は結局わかんなかったんだけど……」

リゼ、わかるか？」

キールは期待を込めてリゼを見た。

高位の精霊は、時に信じられないぐらいの力を見せつける。

災害なんてのは朝飯前。人の過去を勝手に覗いたり、心を読んだりするのも軽々してしまう。だから、リゼに聞いたらくと思ったのだが、「ああん？」と不機嫌そうに凄まれてしまった。

「さつき、言ったよな。」

“この子の名前は？”って、言ったよな」

鋭く睨まれ、ゲシゲシと脛を蹴られた。

ゲシゲシ蹴られているところが、地味に痛い。

「申し訳ありませんでした。」

とりあえず、ペコペコと頭を下げるキールだった。

そして、今後について、さあどうしようかと話し始めた瞬間、カサツと小さく葉が音をたてた。

二人が振り向けば、少女の手が微かに動いていた。

「お目覚めのようだな」

一足お先にとばかりに少女に向かったキールに続いて、リゼも飛ばずにトテトテと歩いて向かう。羽ばたきで少女に風があたり、考慮してのことだ。

「おはよう。」

先に少女の側に行ったキールが、少女をやりわりと撫でながら言った。

まだ寝ぼけているのか、微動だにしない少女の近くにリゼが近づこうとした瞬間、それは起こった。

バシッ!!!

勢いよく少女の手が、キールの手を払いのけた。

そして、青ざめた表情でキールから逃れようと動き、寝床の葉っぱに足を取られて滑らせ、立ち上がるのももどかしいと言わんばかりに、這って距離を取っていた。

そんな少女の様子に、キールは啞然とした。

「なん、で……?」

そう口から出てしまうのも、自然なことだった。

少女が倒れる直前まで、こんな態度は取られなかった。

身体に触れることを許してくれるぐらいの親密さはあったはずだ。

なのに、今少女は完全にキールを拒絶している。

それも、キールに恐怖を感じている故の拒絶だ。

「……」

呆然と少女を見つめるキールと、無言でキールを見つめる少女の目がぶつかる。

そして、ぶつかると同時に、恐怖を浮かべていた瞳から、色がなくなっ

た。一瞬にして、恐怖の色は沈み、瞳から光がなくなる。

そこに映るのは、ただの風景だけ。

少女の瞳は鏡のように映すだけのモノになり下がっていた。

その変化を側で見えていたリゼは、「ああ」と深く唸った。

たった今、この子は人から“人形”になったのだと解ってしまった。そして、この事實はキールを深く傷つけるだろうと。

その日から3日経った今、少女は変わらず人形のまま歩いている。一言も話すことはなく。

不幸中の幸いと言えるのは、人形になってしまうほどキールを拒絶したのに、一定の距離を常に空けてはいるが、ちゃんと付いてきているというところだ。

それというのも、なぜカリゼの言いつけには従ってくれるのだ。

キールの言葉は全て聞こえていないのではないかと思っぐらい無視するのに、リゼの声には即座に反応し、守ろうとする。

そのことが、キールを余計傷つけていたりするが、

森で動こうとしないよりはいい……

と無理やりキールは納得するのだった。

9話、笑いの先の第一歩

少女が人形に変貌してから、3日経った日の夜。

キールは焚火をじっと見つめ続けていた。

少女は、キールから3メートル離れたところで既に寝ている。

リゼが眠るように促したからだ。

リゼがそつと少女を覗き込む。

その寝顔もどことなく硬いが、起きている時より人であることを感じさせる。

「お姫は寝たぞ。」

リゼは完全に寝入った少女の側を離れ、キールの横へと移動した。

キールは「うん」と頷きはするが、火を見つめたまま動こうとはしなかった。

寝ているときなら、近づいても平気だろうにとリゼは思ったが、声に出すことはやめた。

キールがこの事態に、だいぶ参っていることは分かり切っていたからだ。

だが、だからといってキールを甘えさせることはできない。

だから、

「あの子のこと、どうする気だ？」

解決策を放り投げようとしているキールに意地の悪い質問を投げかけた。

「どうするって……」

「どつする気もないか？」

リゼの単調な声。

「……」

それに、キールは答えることができなかった。

「このままあの子を連れまわすことで、お前が傷つくなら…

あの子を見捨てるのも俺は一向に構わないぞ。」

「つつっ！」

淡々と続けるリゼに、キールが弾かれたように焚き火から隣へと視線を転じた。

そこには、冷めた視線をキールに注ぐリゼの眼差しがあった。

「あの子は、俺の言うことなら聞く。」

このまま、この森で置き去りにすることも容易いぞ。

それとも、一層後腐れがないように獣に食わせてもいいな。」

さあ、どつする。とりぜは視線で問う。

お前の答え次第でどうとでもできるんだぞ。といつになく真剣な様子に……

キールはふっと強張っていた肩から力を抜いた。

「ばーか。そんなの、する気もないくせに言うなよ。」

「冗談ならもつとましなの言えよ。」

小さく口元に笑みを浮かべて、キールは横に座る優しい精霊を小突いた。

「冗談なんかじゃないんだがな。」

真面目腐った声で言うが、

「俺がそうしようとかしたら、絶対ブチ切れるだろうが。」

これだから、人間はくくくとか言って、長い説教するんだろ。」

お前のことは解ってたんだからと、キールは3日ぶりに笑った。

その笑みに、リゼはほっとした。

やはり、相棒には笑顔が似合うのだ。

そして、笑っていないとリゼの調子も狂う。

「ふんっ、当たり前だ!!」

やっと笑顔を見せた相棒に、リゼもいつものように尊大に胸を張る。

「そもそも、3日やそこらで、しょんぼり落ち込んでいる方がどうかしているんだ!

さらってきたも同然の子に、すぐに気に入られるとでも思っていたのか?」

「うつつ!確かに……」

「お前ときたら、考えなしに連れ出して、あの子に説明すらしない。名乗りも状況説明も、俺様がいなきゃ、いつまでもしないままだったんじゃないのか?」

「……それはっっ」

「うん？ そんなはずはないと言い切れないだろうか？

最初に名乗ったのは俺だしな。お前は、ぼーとしてただけだろうか？」

そう言われると、キールは確かにと頷かざるをえない。

勢いで連れ出したのは、少女からすれば、さらわれたようなものだし。

リゼが言うようにそれで気に入ってくれというのも調子が良すぎる。しかも、しばらく歩いてリゼが名乗ったから、キールも名乗ることができたわけで…

そして、そのときになってやっと“口封じの法”を解いたわけだが、もつと早く、それこそ村から出てすぐにでも解いてあげることでもきたわけで。

リゼからもつともなことを言われるほどに、キールは何も言い返せなくなる。

だが、それと同時に自分の落ち込み方が可笑しくなってきた。

「ははは。ホント、そうだよな。」

俺、リゼに任せっきりだし。

自分からまだ何もしてないでやんの。」

少女から拒絶されて、落ち込んで、空回って、勝手に混乱して…自分のカツコ悪さに笑えてくる。

まなじり
眦に涙を浮かべるほど、キールは笑った。

自分を励ましてくれたリゼには、馬鹿笑いする様を呆れた顔で見られたが、それすらも可笑しく思えてどうしようもなかった。

「まったく……」

それで、どうする?」

笑いの衝動が治まってきたとき、リゼが人の悪い笑みでキールに一番最初の質問を繰り返した。

それに、キールは

「まずは、俺を知ってもらおう!」

そこから始めないとなっ!と。満面の笑みで答えた。

リゼは、無限迷路に勝手に嵌っていたキールが、抜け出せたことに優しい眼差しを向ける。

その眼差しに、ちつともキールは気付かず、3メートル離れた場所で寝る少女に視線を向けていた。

そして、「あゝ」と呻いた。

「そんで、あの子の格好をちゃんとしてあげないとな……」

視線の先にいる少女の恰好は、出会ったときのまんまだ。

つまりは、襷褌を纏った状態ということ……

ほんと、俺って……

自分のことばっかで、全然少女のことが目に入っていなかったんだと、改めて自覚した。

これじゃ、気に入らなれたいとか以前の問題だ。と自分の不甲斐無さに嘆息するしかなかった。

10話 おいしい朝から始めよう！(前書き)

作中に出てくる名称等は、創作したものですのでお気になさらずにお読みください。

10話、おいしい朝から始めよう！

少女と出会って4日目の朝。

キールはスツキリとした気分で目が覚めた。

リゼが叱咤激励してくれたおかげかな？

キールは気分よく鼻歌を歌いながら、昨夜のことを思う。

世話好きなりゼのおかげで、気分は軽くなつたし、今後の方針も見えてきた。

後は、前進あるのみだ！

とキールは張り切って朝食の準備を始めるのだった。

旅の朝食は乾燥物ばかりの侘しいもの。というのが通常だが、キールが準備し始めたものは違った。

そもそも、今のキールは無一文に近く、食糧が底について餓えていたぐらいだったので、旅人の必需品の乾物すら無かった。

だからこそ、今は街道横の森の中をゆつくりと進んでいる。これも偏^{ひん}に餓えないだめだ。

何せ、森の恵みは豊かで、誰にも文句を言われないのだから。

そんなこんなで、森に入ってから食糧に困ることはほとんどない。ただ、これまでは少女のことで落ち込み過ぎて、食事が簡素になり過ぎていたとキールは反省していた。

これまで、一人旅のようなもので、食事を作るということも気分がついている時にしかしなかったから、すっかり温かいモノや美味しいモノを食べさせてあげるといふ考えに至らなかつたのだ。それに気づくと、つくづく自分が情けないとキールは思わずにはいられなかつた。

だから、今日からは少女の為に、まずは美味しいモノを食べてもらおう！

ということを決意したのだった。そんな決意は、リゼから言わせれば、少女への点数稼ぎのようなものとしか映らなかつたが：

新たな方針の一つ、「美味しい食事計画」を実行すべく、キールはいつも背負っている行李から幾つかの品を取り出す。

手にしたのは真っ赤に熟れたリリの実という甘酸っぱい果実に、木の実を砕いた粉と、木のボウル。

どうするかと思えば、ボウルに粉を入れて、その中にリリの実を入れて捏ねていた。

こうすると、リリの実の果汁が粉と混ざって、一つの塊になるのだ。それを6つぐらいの塊に分けて、そこらにある木の棒に巻きつけて、まだ火を保っている焚き火の近くに差す。

その間に、水筒の水を鍋にかけ、腰に下げている革袋から乾燥した葉を取り出した。

仄かに葉から香るのは、柔らかく香ばしい匂いだ。

それを躊躇いなく鍋に放る。

そして、鍋から木の茶碗に葉が入らないように入れると、腰に下げているさつきとは別の革袋をゆっくりと傾けた。そこから茶碗にトロリとした蜜が注がれる。

そうこうして出来上がったのは、キール特製の朝食。

果実の薄焼きパンに、香葉の茶だ。

食事としてみると、パンとお茶ではなんとも少なく感じてしまうが、普通の旅だったなら十分贅沢に過ぎるものだ。

朝から火を使った料理であるだけでなく、パンには新鮮な果実が使われているし、薫り高い香葉のお茶は体を温める作用があり、滋養

の高い蜜まで注がれているのだ。
もし、通りがかりの旅人がいれば、垂涎の的となってに違いない食事だった。

「おはよう！」

どうぞ召し上がれ。」

朝食の準備中に起きだし、今まで微動だにせず立ち尽くしていた少女に、キールは笑って言った。

「うん。いい匂いだな。今日は美味そうだ。

ほら、しっかりと食べるといい。」

少女が起きる前から少女の側に控えていたリゼが促すと、少女は声に従って一歩動こうとする。
が、そこで動きが止まった。

リゼの言うことには従おうとするが、従えないといった風に。
その不自然さにリゼは「ああ」と納得の声を発した。
そして、

「おい、ちょっと離れてろ。」

とキールに翼で、しっしと後ろに下がっているように指示する。
キールも昨日までのように落ち込まずに、さっさと下がった。
それで、やっと少女は焚火のそばまで歩いてくることできた。

「その木の棒に巻きついてるのも、お椀に入っているのも熱いから気をつけてお食べ。」

リゼが優しく語りかけると、少女は慎重に手を動かして朝食を手に

取った。

その食べ方は、とてもぎこちなかったが、キールは満足だった。

食べてくれた。

今は、少女が無表情ながら、キールが作ったものを残さず食べてくれたことが何より嬉しかった。
そして思うのだ。

これから、どんどん美味しいモノを食べさせて、健康にしてあげよう！

そして、いつかはまた声を聞かせるようになるまで、頑張るより他にない！と心に刻みつけていた。

10話、おいしい朝から始めよう！（後書き）

~~~~~ ちよつこと解説 雑字編 ~~~~~

リリの実……

真っ赤に熟れると食べごろになる甘みが強い果実。リリの木は背が高く、実が木の頂上付近に生なるため取りにくい。

薄焼きのパン……

これに関しては、キールの匠の技ということであ…（ご理解頂けると助かります。。。）

香茶……

いわゆる紅茶。

ただし、この作中ではより薫り高く、薬草としても使える香草を乾燥させて飲みやすくさせたモノ。

体温調節や体調を整えるための飲み物であり、一種の嗜好品。

~~~~~ 終 ~~~~~

今回は作中に出てきた、勝手に創作モノを紹介させていただきました。

ご意見・ご感想等ございましたら、よろしく願います。。。

11話、微睡みの闇に沈む

「これは、アオノハっていつて腹痛に効くし、これの花は煮つめるとすつごく旨いぞ！」

そんで、こつちはコウギヨクの花っていつて、花の蜜が喉の痛みを取ってくれる。

そして……」

キールは獣道をゆつくりと歩きながら、後ろにいる少女に楽しげに語りかけていた。

手にしているのは、道々に鬱蒼と繁る草花の中にひっそりと混じっている、効能があるもの。所謂薬草いわゆるの類たぐいだ。

後ろにいる少女の反応などお構いなしに、薬草を見つける度に現物を示しながら話す。

そして、手にした薬草をどんどん行李に入れたり、腰の革袋に入れたりしながら、少女が歩きやすいように地面を慣らしていた。

そんな風に明るく話しながら忙せわしく動くキールを、少女は銀色の瞳に映していた。

少し前にはガラスが詰めこんであるかの如く、焦点を結んでいなかった少女の瞳に、今は意志ある光がぼんやりと灯っていた。

けれど、何かを理解したいと思う欲求は浮かばない。ただ、一つ「この人は何？」という疑問だけがゆらゆらと浮かんだ。

少女の思考が浮上してきたのは、口の中に暖かいモノが触れたときだった。

それまでは、自分が何をしてるのか、何を見ているのか、何を聞いて

ているのか、といった一切合切を彼方に放り投げていたので、何も思い出せない。

普通なら意識がなかった間を怖れるようなものだが、少女はこれといった恐怖心や不安を抱いてはいなかった。

むしろ自分がどこにいるか分かった瞬間の方が、恐ろしかった。

現実いまよりも、こんな、どうなっているのか理解できない現実せかいよりも、さっきまで微睡んでいた場所の方が、遥かに楽だったから。

そこは、闇くらい場所だったが、暖かく、守るように抱きしめてくれる何かがあって、絶えず甘く囁く声が少女をその場所に囚とらえていた。

そこにいると何も考えなくてよかった。

これまでのことも、これからのことも。

“人”についても考えなくてよかった。

それは抱きしめてくれる何者かがくれた救いであり、慈悲だった。

微睡みの中で過ごすだけでよかったそこには、時も光もなく、ただ暗闇だけが広がっていた。

ただ、時折そこにはないはずの涼風が吹き、その風から低く響く音には体が勝手に動いていた……

しかし、思考が浮上し、現実せかいに戻るとそのことが夢幻となり、手で掬った水のように零れてしまつて分からなくなっていた。

だから、街道にいたはずなのに、気づいたら森の中にいて、自分が何かを口に使っていた時は驚いたし、口にしたものの得も言われぬ美味しさには更にビックリした。

否、ビックリしたなんてものではなく、仰天したと言つた方が正しいかもしれない。

とにかく、この世のモノとは思えないほどのおいしさに、驚愕した。

一口食^はんだ瞬間のふんわりとした食感に、舌の上に広がるほろほろとした甘さ。嗅覚を刺激してやまない香ばしくも甘い果物の香り。リゼに勧められるままに飲んだモノも、口いっぱいには柔らかい香りと甘さが広がり、喉の奥にすつきりと心地よい余韻を響かせ、何より体をぽかぽかと温めてくれる。

何これ？

戻ってきたばかりの思考には、これしか浮かばなかった。

こんなに美味しいモノが食べ物だということが信じられなかったし、こんなにも温かいモノが食べられることも信じられなかった。そして、食べていることを咎められないことも…

何より、初めて食べるモノなのに、躊躇いもなく食べている自分も信じられなかった。

何もかもに驚きすぎて……

気づけば、今度は森の中を歩いてた。

少し先にはキールと名乗った青年がいた。

赤銅色の髪を揺らし、手をガサガサと草の中に突っ込み、時折振り向いては何かを語る。

その声は、風に遮られているように所々しか耳には入らないから、キールが言うことは分からなかった。

だけど、キールの楽しげで明るい雰囲気だけは、何となく伝わってくる。

それが伝わってくると、何とはなしに心の中に温かい風が吹いてきた。

その風は、怖くて仕方がないはずの現実^{せかい}を、ほんの少しだけ怖さから遠ざける。

その不思議な風が吹く度に、浮かぶのは

この人は何？

という疑問。そして、

この人は何？このヒトは？

このヒト…

そう考え始めると、暗い闇が目の前を覆う。

闇は甘い声で、

考えなくていい。考えるより眠ってしまえ。心地良い世界が待っているよ。

と囁きかけ、微睡みの中に誘うのだ。

深く深く、目覚めることを嫌がるように。

そうして少女はまた闇の中へと沈んでいく。

何の抵抗もすることもなく、するりと堕ちて、また人形へと戻るのだ。

その暗闇で、少女の手を取り何者かが嗤っていた。

ゆらゆらと微睡みに揺られる少女を、壊れモノを扱うように優しく抱きしめ、また戻ってきたことを喜び、誰にも奪われることのない場所に囚えたことに嗤っていた。

『あと、もう少しだね。』

嗤いながら、沈む少女に甘く囁く。

『あと少しで、我が…』

本体が、迎えに行ける。』

囁く声はどこまでも耳に心地よい。

『愛しい人、待っておいで。』

優しく優しく嗤いながら、少女に狂気を降らせる。

『こんなに怖い世界から、永遠に我が奪ってあげるよ。』

すでに、その言うことが理解できないまでに意識を失った少女に、それは延々と語りかけた。

忌まわしい精霊ものからの風を遮るように、それ以外の声が聞こえないように。

延々と。

12話、精霊の疑念（前書き）

今回は、地味に魔術登場です！

12話、精霊の疑念

「おかしい……」

リゼは頻りに首を捻っては、少女の寝顔を見ていた。

「何が？」

焚火の前で本日の収穫を並べながら、気のない風にキールは尋ねた。

「ん〜。お姫なんだが……」

リゼにしては珍しく、吐き出した声に張りがない。

いつもなら、そんな調子のリゼを前にしたら、からかうところだが今夜は先を促すべく、

「だから？」

と返した。

ことが件の少女の話なら聞かない訳にはいかないからだ。しかし、視線は焚火の前からは離さない。

揺れる炎は、光源としては然程明るくはなく、眼前にある様々なモノを峻別するのは割と手間がかかるし、間違つと台無しになる。だから、自然とそうなってしまう。

決して、リゼをないがしろにしている、というわけではない。

むしろ、少女のことで気になることがあるのなら、さっさと何でも言ってもらいたいとも思う。

「ずっと、様子は窺っていたんだがな……」

リゼは、考えが纏まらないような口調で、言い淀んでいた。何だかもやもやする言い方をする、リゼは気になるが…

キールは取りあえず、リゼの考えが纏まるまではと作業に集中した。並べられている品々は、薬草や果物、木の実に山菜、茸、香木などなど実に様々だ。

果物なんかは行李に痛まないように入れ、山菜や茸も同じように、ただしそれと分かるように行き入れられる。

何種類かある香木は、種類毎に小さめの革袋に入れた。匂いが強い種は二重にしてある革袋に入れ、さらに

「『小さき封じを成せ』」

と“結界の法”を施す。

残っている香木は、魔獣避けの香だけだ。リゼとの2人旅なら必要もないが、今は少女がいる為、歩く道すがら見つけておいたものだ。それを迷いなく踊る火に投じた。一瞬、炎が緑色に変わり、それが元に戻ると魔獣避けの香木特有の匂いが立ち上った。

それが終わると次は木の実に目を向けた。

木の実は、歩きながら食べられるものは、麻袋に入れておき、残りはボールに放りこみ、

「『我が望むままに碎けよ』」

と極小規模な“破碎の法”を唱えて、粉々にした。これで明日も薄焼きパンを作るかな〜などと思いながら、粉々にした粉は吹き飛ばされないように、慎重に革袋に詰めた。

最後に、薬草。これが、存外時間がかかる。
葉や根、茎、花びらのみに分けるのではなく、ものによっては手
触りと炎の灯りに翳かきして、不必要な部分を取り除く。
分け終えたら、今度は適切な処置を施していくのだが…
たとえば、アオノハなら葉は乾燥させた状態が一番効果が高いので、
一気に

「『我、渴きを与えん』」

と“枯渴の法”で乾燥させるが、花びらは煮詰めるために鍋に投入
し、コウギヨクの花は新鮮なもんが一番効くので、

「『我、時を奪う者なり』」

と“静止の法”を施す。

施している魔術は多彩で、中位以上の魔術なのだが、如何いかんせん淡々
と何の気負いもなしにしているので、外から見ればめちゃくちゃ地
味な作業をしているようにしか見えない。

実際、森や山など、方々を歩き回っている時には、日課となってい
るので、キールは大したことはしてないのでは、とここ最近は思っ
てきていたりもした。

そうこうして全ての単純作業が終わり、眼前がさっぱりし、それじ
や次は薬の調査でもするか？それとも他のをするか？と考え出した
時になって、やっとリゼは口を開いた。

「…この子の意識が感じられんのだ。」

リゼはまだ、整理がつかないような不明瞭な声で話はじめたが、口
を閉じ…そして、仕切りなおすように声を紡いだ

「この子は、」

という声に、キールの素っ頓狂な声がかぶった。

「はあ？」

「寝てんだから、当たり前だろ？」

妙に低い声で、言い出した言葉が、意識が感じられんなんで…何言っちゃってんの？大丈夫か？と可哀想な者を見る様に見やりながら、キールは、次いでリゼが話そうとしたのを完全に遮っている自覚は全くなかった。だから、

「口を挟むな！黙って聞け！」

速効で 突風 で弾かれ、焚火の明るさが届かないところまで派手に転がされても、何で俺こんな目に遭ってんの？と目を白黒させた。かなり文句を言いたかったが、突風の強さはかなりのもので、リゼの怒り具合を如実に表していたし、正直転がった先にあった木に強かに背中を打った痛みで声を出すどころでななかった。

そんな不満と痛みと顔に顔を歪めていたキールのことなどお構いなしに、リゼは咳ばらいを一つして気を取り直し、勝手に話し始めるのであった。

その声は、低く、冷たく、超然とした精霊の声で、

「あの子は、こちら側からいなくなるかもしれない。」

と、その言葉を理解することはできなかったが、その言葉に含まれ

る不吉さにキールは急いでリゼの見える場所まで戻り、

「それは、どついつことだ??」

詰問するように睨みつけた。

ゆらゆらと揺れる炎は、張りつめた空気をつくる二人の影を地面に落とし続け、リゼの後ろにいる少女は、すやすやと眠り続けていた。

その眠りは、ただの眠りなのか？それとも、違うのか？

それを知るものは、いない。

少女に巢食う闇以外は。

12話、精霊の疑念（後書き）

今回、キールが地味に魔術を使ったので、その解説を下記にてしております。気になる方はお読みください。

くくちよこつと魔術の解説 その2くく

“結界の法”とは…

魔獣や敵対者の攻撃から味方、主に非戦闘員を守るために使用される術。魔獣の突進などから守るような術なら、低位魔術とされているが、大規模な魔術からも守るものは最高位とされ、“結界の法”の難易度は様々。持続時間も術者に左右され、すぐに効果が切れる場合もある。大抵、低位は短く、高位は長い。

今回キールが使ったのは超低位結界だが、持続時間を極端に伸ばすアレンジをしているので、実際は中位と高位の間ぐらいの術になっていたり…通常この術は香木とかの為に使ったりはしない。

“破碎の法”とは…

中位魔術。とにかく何でも木っ端微塵にする風の術。思いつき考えなしに使う方が簡単な術で、調節するのが難しい。自分の思うままに調節するには十分な訓練が必要。訓練さえすれば、ある程度は自由自在。

“枯渴の法”とは…

高位魔術で、水分を奪う水の術。実はかなり危険な術で、“ミイラの術”とも擲掄やぶされ、生命に必要な水分を奪い死に至らしめるという術。陰險なイメージがあるためか、有識者の間では禁術にすべきと言われている。

キールみたいに、乾燥させたいから使う人は滅多にいないと思われ

る。

“ 静止の法 ” とは…

高位魔術。敵の動きを封じる術。かなり戦闘には効果的な術だが、短い間しか止めることができないので、戦闘以外では使い道がない術。

キールはこの術をアレンジして、保存用の術に変換することで長時間の持続を可能にしている。

〳〳終〳〳

13話、人が知る精霊（前書き）

13話、人が知る精霊

月の明かりも届かない、鬱蒼と繁った森の中。
赤い炎が爆ぜる音が微かに、ぱちぱちと鳴っている。
その炎を挟んで、キールはじっとリゼの次の言葉を待っていた。

こちら側には戻らないかもしれない…

この言葉の意味を、静かに、真剣に。
ただただ、答えを求めて見つめていた。

リゼは、その様子確かめ、口を開き、

「精霊について、お前はどれくらい知っている？」

「……はあ？」

全く突拍子もないことを言い出した。

「どっちなのだ？」

「……」

重ねて聞いてくるリゼに、キールは苛つくというかムカつくという
か…。

こっちは真剣に聞こうとしてるのに、こいつは…！
キールの怒りのボルテージは急上昇し、気づけば刺々（とげとげ）

しい声が飛び出していた。

「はあ？今そんなこと聞くか？

精霊のことなんか、今は関係ないだろうが！

さっさと、話っ」

ヒュンッ！

『ガッツ！！！』

せ、と続く言葉は、頬を掠めた凶器によって遮られた。

後ろを向けば、樹の幹に穿たれた深い穴。

矢なんて目じゃないぐらいの貫通力を発揮している凶器それの正体は、リゼの羽根か？

たかが、羽根。されどこれ程の威力がある凶器それが、もし仮に……

そう、仮にこれが身体の何処かに刺さったら？

「……………」

考えたくもない映像が脳裏を掠め、キールの額からツーンと冷や汗が伝った。

「え〜と、、、

精霊について知ってることを全部言えば良いのでしょうか？」

いつもと全く違う、妙に畏まった調子になるのは仕方ないことだった。

××××××××××

「それで、精霊についてって、結構漠然としてただけど？」

気を取り直して。

というもおかしなものだが、胡坐あぐらをかいて焚火に新しい小枝をくべながらキールは聞いた。

「うん？」

それじゃ、人の間で伝わってる精霊についてでどうだ？」

「…それも、何だかな〜。」

まだ漠然としてただけど…。とキールはぼやきながら腕を組み、しばし口を閉ざした。

「精霊っていうのは……」

この世界の源泉であると言われる『大いなる泉』から生まれ、万物の根源をなすもの”といわれている。

んで、光・闇・地・水・火・風の6柱の“精霊王”が最上位にいて、その次に雷・氷・樹の“3大精霊”が続き、その下に、それぞれの眷属けんぞくである高位精霊、中位精霊、下位精霊が連なってる。

そして、精霊はどんな形態も自在にとることができるが、『誓約の調べ』があるため、人の形態にはなれない。」

このぐらいかな。と言ってキールはリゼを見る。

その目には釈然としないような、自嘲しているような複雑な色が宿

っていた。

それは、改めて口にして、初めて誰もが知っていることしか言えない自分に気づき、精霊であるリゼと一緒に過ごしているのに、これぐらいしかわからないことが情けなかったからかもしれない。

しかし、リゼはそんなキールには一切頓着せず、そんなもんだらうなど、コクコクと首を上下させただけだった。そして、

「それでは、聞く。我は何の精霊だと思っ？」

またしても変なことを聞いてきた。

「空の精霊だらう？」

何を聞いてくるのやら。と胡乱うごろんな目付きで言えば、

「うむ。では、何の眷族だと思っている？」

「何って…それゃ風だらう。」

「何故そう思っ？」

「風の術を使ってるから！」

当たり前だらうと言いつ返すが、

「ふむ。では、お前は風しか使えないか？」

次いで言われたことに、「それは……」と口にしたつきり続けられ

なかった。
そんなキールに、

「お前は、何でも使えるだろう？
風だけじゃなく、火も地も水も…多少使い難いのはあれど、使えない術はないだろう？」

我と契ったときから。」

その通りだ。

リゼと正式に契りを交わした時から面白いように、術が使えるようになった。

その日のことは鮮明に覚えている。

無数の屍と、腕に抱えていた大切な人の命の灯が消えた時。

その時になつて手にした、大きな、果てしなく大き過ぎる力に狂つたように笑い、力尽きるまで八つ当たりした日だから…

「おかしいとは思わなかったか？

精霊と契っただけで、思うがままに使える力に…」

確かに、キールもおかしいとは思った。

精霊と契れば、精霊の力を取り込んで大きな力が奮える。

たとえば、通常なら数人がかりで使用する術を単独で使えるし、術の詠唱も短縮できる。

そのため、各国家が精霊と契った者を囲い込み、競うように精霊部隊を編成してる程だ。

この精霊部隊は、1個小隊でも抱えて入れれば他国を牽制でき、1個中隊にでもなれば脅威の軍として周辺国家は沈黙せざるを得ない。それ程の違いがあるのだ。精霊と契った者と、そうでない者とは。

だが、精霊は万能の存在ではない。確かに精霊と契りを交わした人間は、格段に力が向上する。だが、精霊の属性の連なりから外れた力は、その人間の本来の力しか発揮することができない。

風なら風、水なら水、火なら火と、連なる力しか詠唱短縮魔術は使えない。

これは周知のことなので、キールも当然理解していた。

そのことから考えるなら、キールは【風の術しか使えない】というのが、道理に敵っていることになる。

だが、キールはどんな属性の魔術も使えなかったことはなかった。

これが意味することは……。一体これは？

キールは、今まで考えないようにしていたことを、リゼに眼前に突き出され狼狽した。

「……………こんなことがなければ、言わなくも済んだんだが。」

沈黙しているキールに、リゼは長く息を吐き出した。

リゼの目線の先は眠っている少女へと向けられている。

「我と契りを交わした者が、この子に出会ったのは必然なのかもしれないが……………」

ぼそぼそと独り言を呟き、リゼはキールへと視線を戻す。

その瞳は、静寂の中に世界全ての意志を凝縮したような、不思議な雰囲気彩られていた。

その眼差しに気圧され、キールは緊張のために唾を飲み込んだ。

「まず、お前には故意に黙っていたことを、謝るべきだろう。」

重く、低い声で発すると、リゼは、すまなかった。と深々と頭を下げた。

そして、頭を上げまっすぐにキールと視線をあわせたりゼは、静かに声を紡ぐ。

「今話ろう。我のことを………」

そうして、静かな夜にリゼの朗々たる声が空気を震わせ始めた。

13話、人が知る精霊（後書き）

やっと、精霊について語れる話にこぎつけることができました！！
次回は、もっと詳しく語れたらと思っています。

ご意見、ご感想などありましたら、どうぞよろしく願います。

14話、精霊が告げる真実

「我等精霊は、さつきお前が言っていたように、6柱の精霊王と3柱の三大精霊がいる。

人間も知つての通り、精霊王と三大精霊の眷属は、この世界を巡り、世界を循環させ、恵みをもたらすことを課せられている。」

お前も知っているだろう？と、リゼはさも当然のようにキールに水を向けてきたが…

精霊が果たす役割なぞ、キールは臆ろげにしか覚えていなかった。

昔、目の前にいる奴に教えられた気もするが…。

まあ、あの時は真面目に聞いていなかったからな。と思わず目を明後日の方向に向けてしまった。

その視線の向け方で、クワツとリゼは目を見開き、何かお小言をくらわそうとしたが、ゆるゆると頭を降って気を鎮め、先を続けることにした。

ここから聞いてほしいのだと言って。

「しかし、我等精霊の中に、精霊王と三大精霊、その眷族どもとは全く力の理^{ことわり}すら違う精霊が居るのだ。

神より課せられた使命が異なる精霊がな。」

ここまでは付いてきているな。とリゼが問うので、キールは視線だけで頷いた。

しかし、次いでリゼが話したことに、キールは全くついていけずに目が点になった。

「その精霊が、天空・時空・混沌の3柱だ。

この3柱は、精霊王の力を凌ぎ、“神の次席”といわれている。」

「は？」

何だ、それ???

納得したくないとか、そういうことではなく。本当に意味がわからなかった。

天空？時空？混沌？

そこからして、全く聞き覚えのない精霊だ。

さらに、“神の次席”というのもさっぱりだ。

だいたい、神に次ぐ力を持つ存在なんぞ、いるというのだろうか？
いるとしたら、それは精霊王のことなんじゃないのか？

でも精霊王じゃないんだよね??

精霊王以外にいるなんて話を聞いたことはないし…???

頭にクエツションマークをいっぱい並べて、キールは混乱する頭を抱えた。

そんなキールを見て取って、まあ、そうだろうな。とりゼは呆れるでもなく唸った。

どこがわからない？と聞いたところで、意味もなさそうだと思い、それならどういえば解りやすいかに迷った。

理解しないままに、そういうもんなんだと無理やり認めさせるのは簡単だが、それではこれから先が困るかもしれない。

そこで、もつとも無難なところから説明することに決めた。

できるなら知って欲しくない、長い話にはなるが…

と溜息をつき、頭を抱えたまま沈黙しているキールを見やった。

このまま、話しても意味がないな。

ここは悪いが…

リゼはひっそりと人の悪い笑みを浮かべ、

『爆ぜよ』

小さくつぶやく。

途端にゴオオと焚火が激しい音を立てて、火柱を上げた。

「おうわー！！」と情けない声がキールの口から洩れ、キョトンとした表情をリゼに向けてた。その表情があまりにも子供かおっぽくて、ふふっと思わず笑ってしまう。

「何すんだよ！」

驚かされ、笑われたことで憤然としたキールだが、リゼは泰然としている。

あまつさえ、

「お前が、集中していないのが悪い！」

ピシヤリと言われれば、なんだか悪いことをしたような気になってしまい、納得いかない感じながらキールは黙ってしまった。

そんな素直さに、騙されやすい奴だなと苦笑してしまいそうになるが、リゼはその衝動を噛み殺した。

話を蒸し返す隙を作ったら、一向に先に進まないのは経験上よくわかってるし、ここはキールが黙したままなのにつけ込むしかない。

とシリアスモードでシラツと話し始めた。

「お前は全然わからなかったようだから、もっと小さい子でも解るように言ってみよう。」

「……」

あくまで、からかう言葉を忘れずに。

言いようにリゼに扱われているキールが、ムスツとしたのは言うまでもない。

××××××××××

「幾ら真面目じゃなかったにしても、創世神話はわかるよな？」

それは疑問ではなく、念のための只の確認に過ぎない。
キールも、今度は茶々を入れずに聞く姿勢を保った。

創世神話とは、世界“創世”の神代の話ではなく、文字通り“創世神”の話だ。

“創世神”は創りの神とも呼ばれ、名も無き神の最期の息吹より生まれ、名も無き神の屍より13柱の神を目覚めさせたと言われている。

それら創りの神と13柱の神が成した奇跡を綴っているものが“創世神話”だ。

神代の話は唯“神話”として語り継がれている。

「創りの神が、名も無き神の屍より目覚めさせた13神とともに、

天も地もない世界に秩序をもたらし、全てを創り出していくわけだが……まあ、何を成したのかはここでいう必要もない話だ。

ここで話したいことは、その神々が仲違いした結果、創りの神がこの世界から離れたという件^{くだり}だ。

人の間では……、

13番目の神が悪心を抱き、神々の心を乱した。その乱れは、神々を仲違いさせ、神々の心は悪心に染まろうとした。創りの神はそれに悲歎し、この世界を去った。その後、悪心に染まる愚かさを恥じた神々は、善心を取り戻し、地上の管理を精霊王へと命じ各々はこの世界の安寧を願いつづけている。」

そう伝えられているな。とりぜが水を向けるので、キールはただ

「そうだな。」

と短く応えた。早くその先を言えと促すように。

「しかし、この件は精霊王^{くたう}が神殿と共にでっち上げた創世神話に過ぎん。」

「はあ??？」

「つまり、これは偽りの神話だということだ。」

神殿がでっち上げた創世神話だというなら、分からないでもない。昔から神殿は何かと権威を示すために色々な裏工作をしているからだ。

しかし、精霊王^{せいれいおう}が共にというと……？

疑問ばかりが募って、何かを言おうと口を開けたはいいが、言うべき言葉を見つけれずキールは只呆然としてしまった。

「世界はお前が思うほど、正直者じゃないってことだよ。』……』」

キンッ

耳鳴りがした一瞬後に、夜の静寂以上の無音の空間が出来上がっていた。

リゼの無詠唱による結界。

そう気付いたのは、口元を歪めたリゼから、

「これから先の話は、誰にも聞かれないからな。
念のためさ。」

とニヒルに言い放ったからだった。

15話、真実の創世神話　く朽ちた神と創世神く

これから話すことは、誰にも語ってはならない。
聞くことを拒否することは出来ない。

お前はく天空を駆ける孤高なる者くである、我と契ったのだから

……

そう言い放って語り始めたりゼの話は、精霊すらも知らない神代の
記憶。

偽りの創世神話とは全く違う、真実の創世神話だった。

××××××××××

この世界、【グリオール】に名も無き神が沈んだのは、神々の世界
である楽園、【エンディアナ】から追放され、己の美しい肉体を散
々に翫られ、後は朽ち果てるのみと思われた時だった。

なぜ、私がこのような目に遭わなければならないのだ！

名も無き神は、自身の名を不当に奪い、追放したエンディアナの神
々を呪った。

なぜ、このように翫られなければならないのだ！

なぜ、このような天も地もない、不毛の世に私はいなければなら
ないのだ！

なぜ、私が追放されるのだ！
なぜ、私の名を奪ったのだ！

名も無き神は、奪われた名前を思い出そうと必死になったが、その名を思い出すことは出来なかった。思い出すのは、云われなき罪を負わされ、非難され、屈辱を舐めさせられ、鬨られ、恥辱を味わわされた、忌むべき記憶だけだった。

お前らなぞ、呪われてしまえ！

このような仕打ちをしたお前らなぞ、地獄の底で苦しむがいい！

その呪詛は、あまりにも深かった。

深すぎるあまり、自らが生み出した怨嗟の黒炎が、朽ち果てる自分の肉体をも包み始めていた。

その苦しみは、更なる憎悪を、果てしない地獄を、名も無き神に刻みつけていった。

そのせいなのだろうか、かつて心に宿していた“善良な心”が苦しみの吐息から零れてしまった。

そうして、追放の地グリオールに、創世神と言われることとなる、創りの神が誕生したのだ。

この名も無き神の良心から生まれた、いわば名も無き神の分身である創世神は、苦しみもがき、怨嗟の呪いを黒炎となして吐き出す自分の分身を哀れんだ。

その哀れみに、名も無き神が更なる憎悪を抱いたのは言うべくもない。

憎悪は、生まれたばかりの分身をも燃やし尽そうとしたが、叶わなかった。

そればかりか自分の分身が、あるうことが黒炎に包まれた肉体から、どんどん神力を削いでいったのだ。

削がれた神力は、次々と新たな神として生まれるための繭となってしまうた。

その繭が、1つ、2つ、3つ…と増えていく度に、名も無き神の神力は衰えていった。

己から神力を剥がされる痛み、苦しみ、悲しみ。

名も無き神が、絶望の奈落へと転がり落ちるのはあつという間だった。

しかし、絶望へと堕ちても。

自分がいよいよ神力を失くして死を迎えるまで間がなくなってきた瞬間にも。

名も無き神は呪うことを止めようとはしなかった。

その呪詛は、13番目の繭の中へと沁み込む程に強い憎悪。

そして、全ての憎悪が沁み込んだ瞬間、名も無き神の肉体は塵となつてグリオールで散った。

その場に佇んでいたのは、創世神と13個の繭だけだった。

その後、名も無き神から削いだ神力から生まれた繭は、創世神の呼びかけで次々と孵っていった。

1つ目の繭からは、名も無き神のもつ光の神力を持つ神が。

2つ目からは、闇の神力を。

3つ目からは、地の神力を。

4つ目からは、水の神力を。

5つ目からは、火の神力を。

6つ目からは、風の神力を持つ神が生まれた。

しかし、残りの7つの繭は呼びかけに応えず、孵らなかった。

そこで、創世神は6柱の神々とともに、孵らなかった繭のうち2つを使って、天・地・海、そして全ての生命の源を創り出した。また、

光と闇の神にこの世界の明暗、即ち昼と夜を定めさせ、地水火風の神には、生命が循環できる流れを整えさせた。みちこうして、不毛の世界であったグリオールは静かに胎動を始めたのだ。

困ったのは、残りの5つの繭をどうするかだった。

創造のために変質させることは容易だったが、未だ不安定な世界には過剰な神力でもあった。

過ぎる神力は、胎動を始めたばかりのこのグリオールに破滅を招くおそれ虞もある。

特に13番目の繭は名も無き神の呪詛のため、禍々しい波動を放っていたので尚のこと危険だった。

そこで、5つの繭は創りの神の中に嚴重に封印されることになったのだ。

「こうして、神々はグリオールを不毛の世界から、創りの神を頂点と成す生命の宿る世界へと変えていったとき。

まあ、ここまでではたいした事じゃないがな。」

リゼが肩をすくめて、キールを茶化すように笑って一息吐いた。

さすがにここまで長々と話すとなると、疲れ知らずの精霊といえどもキツイ。

それに、

「結構、大した事だと思っけどね。」

キールは深々と溜息をこぼした。

疲労度でいえば、話していたりゼよりも、向かいで一心に聞いてい

たキールの方が大きかった。
なんせ、始めっから今まで聞いていた話と全く違うのだから。

これまで聞いていた語り始めは、創世神誕生からだった。
名も無き神がなぜ儂くなったのか。などということは、気にしたこともなかった。

実際、創世神話からすぐ退場する名も無き神を、熱心に研究しようと思う者がいないので、疑問をもったところでどうしようもない。そもそも、創世神話は精霊王が人間に語ったとされ、疑いようもない真実だと思われていたのだ。その精霊王の語りを疑うことは、禁忌だった。なんせ、信じなければ鉄鎚が下るとも揶揄されていたのだから。

まさか神の国があつて、そこから追放された神だったなんて。

しかも、不毛の世界だから勝手に朽ち果てればいい。みたいな？

そんなんでいいのかよ。神様。

いやいや、そもそも創世神の誕生もどうなのさ？

などなど。色々考えると、どうしようもなく思考の海に嵌って行く。

下手に話を吟味しようとする余計な混乱を招き、かといって疑いもせずに聞くことも出来ず…

しかし、そんな中でも思うこともあった。

やはり、13番目が“忌むべきものである”ということだけは、変わらないのだという事実。

他の部分は全く違うというのに、何でここだけは同じなんだろうと切なくなる。

そんな思考をぐるぐるとしていた。

結果、頭を使い過ぎてスキズキとこめかみが痛み出し、情けないことこの上ない。

正直、今夜はこれくらいで勘弁してくれよと訴えたくもなる。

だが、今夜がまだまだ終わらないという事は、うんざりするほど分かってる。

言われるまでもなく、リゼが話したいことには未だ少しも触れられていないことぐらいは承知しているし…

そんなことが分からなくても、リゼの瞳を見れば充分伝わる。なんせ、目は口ほどに物を言うという言葉通り、その瞳が雄弁に語っているからだ。

「これで、恙なく歴史が紡がれば何の問題もなかった。」

事実、創世神と6柱の神々は、胎動を始めたグリオールに新しい生命を数限り誕生させ、生命は進化し、文明も隆盛と衰退を繰り返して、随分発達した文明が歴史を紡いだ。

成熟期には、空の先までも自在に行き来できるようになったらしい。」

「空の先まで？」

「ああ。」

その時代はすごかったらしいぞ。

空を翔たり、海に長時間潜ったり、大地を風のように疾走したり、空の先まで昇れるキカイという技術があったらしくてな。

それを使えば、誰でも空も海も大地も、空の先まで自由自在だったらしい。」

「そんなことが…！」

どつという魔術なんだよ！

知っている限りで、空を翔けるどころか、飛ぶことも、浮かぶことも出来るかどうか。

海だって、水の精霊と契っていればいけるだろうが、魔術となると1時間が精々だろう。

それが誰でも可能だって！

悪い冗談、もしくは絵空事だ。

よほど、魔術の発達した世界だったのだろうか？

「しかも、今みたいに魔術も精霊術も使ってなかったんだぜ。

勿論、神々の力でもなかった。

全部、自分たちの力で生み出したんだとき。」

今度こそ絶句した。

魔術も精霊術もなしに、どうしたらそんなことが出来るというのか？キールの頭じゃ、答えなんか出てくるわけがなかった。

ただ、スゴイと度肝を抜かれるだけだ。

しかし、

なんだろう？何か引っかかる。

何が引っかかっているのか。キールは暫し黙考した。

今からは考えられない技術に？

誰もがそのキカイというものが使えたことに？

神々の力ではなく、自分たちの力だったことに？

いいや。どれも違う。

何だろうか？

ああ、そうか。魔術も精霊術も使わなかったことだ。

「なあ。何で、魔術も精霊術も使わなかったんだ？
独力するのはスゴイと思うけど……」

キールは自分が思うままに問いかけた。

引つかかっている部分を口に出せば、益々不思議でならない。

まるで夢物語のような技術を持っていただけに、魔術も精霊術もい
らなかったのだろうか？

魔術に頼らないことが大事だったのだろうか？

募る疑問に思考の海へと沈むキールに、リゼはよくぞ気付いてくれ
たとばかりにニヤリと笑った。

「それはな、その時代には魔術も精霊術も使えなかったからさ。」

「えつつ??? 使えなかったって……」

「ああ。」

リゼは深く頷き次いで、

「正確に言えば、その時代には“魔力の源”^{マナ}もなければ、“精霊”
もいなかったから、魔術も精霊術も存在しなかった。というわけだ。」

というわけだと言われても……

あんまりに馬鹿げたことで、開いた口が塞がらない。

魔術も精霊も存在しないなんて。全くもって、信じられない。
思わず疑いの目を向けてしまう。

「まあ、信じられないのも分からなくもない。」

リゼは、顔面に信じられませんか！とデカデカと書かれているキールを晒うでもなく、鷹揚に頷く。そして、強い視線をキールに向けた。

「なぜ、魔力の源がなかったのか？なぜ、精霊マナが存在しなかったのか？

これから、じっくりと教えてやる。だから、聞き漏らすなよ。

今夜話すことは、もう二度と語ることがない話だからな。」

キールに念を押し、リゼは語る。

神々が崩壊させた旧世界の話を。

そして、新しい世界の誕生を。

15話、**真実の創世神話** 〱朽ちた神と創世神〱 (後書き)

真実の創世神話は次回へ続きます。

思いの外、長くなってしまいました(汗)
次回は世界の破滅と再生について。。。
たぶん、そんな感じになるかと思えます。

16話、**真実の創世神話**（創世神と邪神）（前書き）

この小説に出てくる神話は、創作上の作り話です。現存の神話や宗教とは何ら関わり合いはございませんのでご了承ください。

16話、真実の創世神話　く創世神と邪神く

何億年という長きにわたって進化を続けた生物。

そのヒエラルキーの頂点に君臨したのは、強靱な肉体を持つわけもなく、異常な繁殖力を持つでもなく、長命でもない、“人”という種族だった。

この種族の特徴的なところは、弱いことを自覚して徒党を組むことではなく、

常に思考を続け、言葉による統率を成し得たことかもしれない。

そんな種族である“人”は、不思議な考えを巡らすことも多々あった。

その中の一つが、神がその姿を現わさなくとも、神に祈りを捧げる思想を誕生させたことだ。

この思想が、聖人とも称された超人の手によって、宗教として世界に広まり、信仰されるようになるのは、神々からすれば瞬きの間のことだった。

この宗教の恐ろしいところは、神を信じないものも宗教は信じ、宗教を縁よすがにするようになるという現象が生まれたことだろうか。そうして、神を信仰の対象として広まる宗教の敵対者として、必然的に“悪魔”や“邪神”、“魔神”という概念も出てきた。実際のところ“神”は存在しても、“悪魔”も“邪神”も“魔神”も存在しないというのだ。

創世神と、6柱の神々はこうした思考を持つ種族を、ただ見守っていた。

否。

見守ることもしていなかった。という方が正しい。

世界の生命は熟し、手を出すこともなくなった。と判断したのは、進化の果てに誕生した“人”という種族が生まれる以前のことで、手出しすることも、見守ることもなくなった末に誕生した“人”が、どんな思考や概念を持ったところで神々には何ら関係ないことだった。

神々が望んだ、ただ一つのこと。

『グリオールの地が生命を循環させ続けること。』
これが正常に機能している限り、全ては神々の手を離れて回っていたのだ。

それ自体は悪いことではなかった。

そう、決して悪いことではなかったはずだ。

しかし、神々は全てを視続けるべきだった。

そして、思考を続け、その思考を言葉によって次の世代にも繋ぐ、“人”という種族をもつと監視すべきだった。

何もしない。というある種寛容な処置が齎もたらしたのは、世界を破滅へと追いやる種を見逃したのだから。

嚴重に封印されていた13番目の繭の中では、禍々しい呪詛と何物にも染まらない神力が反発しながら、その均衡を長い間保っていた。もはや、その均衡が破られることはない、創世神に思わせるほど。しかし、それは“人”という種族の胎動によりあっけなく崩れ去った。

そのきつかけは、人が生み出した宗教だった。

人は、神を崇める傍らで、敵対する者を邪神信仰をしている“悪魔”だと声高に叫んだ。

同じように神を信奉する者をだ。

自分の崇める神が絶対神であり、その他の神は神に非^あず。

仮に神だというのなら、“邪神”か“魔神”であり、そのような怪しげなモノを崇めている者たちは、人ではなく“悪魔”なのだ。叫んだ。

建前論を掲げ、聖戦と称した権力闘争は人の間で幾百幾千と繰り返され、戦争をするための道具として使い始めた、神の敵対者である“邪神”や、“魔神”、“悪魔”は世を浸透し、魔女狩りという虐殺までも行い始めた。

このような神と、神の敵対者である“悪魔”や“邪神”という概念は、驚くべきことに世界中に散らばる人という種族全体に広まっていた。

そうして繰り返された聖戦、虐殺、邪神信仰の弾圧から生じた怨嗟の呪詛^{おそ}は、強い力を持っていた。

その強い呪詛^{おそ}が同じような呪詛^{おそ}に引き寄せられたのは、必然だったのかもしれない。

現に、何億年と均衡を保ってきた2つの力は、あつという間に崩れ去り、呪詛^{おそ}が神力を呑み込むという事態を引き起こしたのだから。

それは、いなかったはずの悪魔、概念上の邪神が鼓動を始めたに等しかった。

しかし、そのことに己の中で封印していた創世神は気付くことができなかった。

それは、まさしく“人”が、概念上生みだした、狡猾なる 邪神の成せる妙技とも言えた。

静かに鼓動を始めた13番目の繭は、呪詛の塊でありそれ以外のものではなかったが、“人”から流れ込んだ呪詛に触発されたのか、意思が芽生えていた。

これは、繭の中の呪詛の塊にとっても驚愕のことであった。なぜなら、繭とは力の塊でしかなく、そこには形もなければ指向性もなく、どのような形になるか、どのような役割を持つか、全ては創世神の呼びかけにより決まる。世界の胎動の際に、呼びかけに応えないという現象が起こったが、これも創世神が意図したことであった。

一度に孵り過ぎれば、グリオールが壊れてしまうのだから。

だからこそ、当然のことではあるが、繭には意志が生まれるような奇跡は起きるはずがなかった。

しかし、その起きないはずの、最低最悪の“奇跡”が起きてしまった。

この奇跡が邪神を生みだし、それを齎した“人”を。生物を。生きとし生きる総ての生命を。

この世界、グリオールを。

崩壊へと追いやった事実^{こと}は、皮肉としか言いようがない。

「13番目の繭の中で成長した呪詛^{それ}は、自らに破壊と呪詛の邪神>という名を付け、自分にかけられた封印を秘密裏に解き、徐々に創世神を侵し始めた。」

キールはいつの間にか疑問も差し挟むこともないぐらい、吟遊詩人も斯くやというほどのリゼの語りに身を乗り出して聴きこんでいた。その様子は、小さい子が英雄譚に目を輝かせて、次の語りを待つ仕草と変わらなかつた。

「創世神を侵した領域が10分の1を占めた時、初めて創世神は自神が何者かに侵食されていることに気づいた。

だが、だ……それは、遅すぎたと言わざるを得ない。

侵食された10分の1は、すでに邪神の領域になっ**て**いて手出しができないし、それは神力を10分の1も削がれたということだ**っ**たからだ。

これが意味することが分かるか？」

唐突の質問に、キールは頭を振ることで答えた。
すなわち、分からないと。

「神の力は絶大だ。

何千分の1の力だろうと、その神力を奮えば、大陸の半分は簡単に吹き飛ぶ。」

その言葉にゾツとした。

そんな凄まじい力で何千分の1？

それじゃ、創世神の10分の1の力を持ったとしたら…

「邪神が世界を破壊し、死滅させることは容易たやすかつたということだ。その名、＜破壊と呪詛の邪神＞が示す通りに。」

「だから、旧世界は壊れたのか」

したり顔で言ったキールに、しかしリゼは間髪いれずに否定した。

「いや、そうじゃない。

邪神はグリオールを破滅へと追いやる種になっただけで、破壊したわけではない。」

「はあ？」

意味がわからん。

邪神以外には考えられないじゃないか。

キールは怪訝な顔でリゼを見つめる。

「邪神の目的は、たった一つしかなかった。」

リゼの応えはいつも遠回りだが、今回ばかりは違う

「即ち、追放された楽園 エンディアナ に復讐することだった。

グリオールを破壊することや、死滅させることなんかには、ほんの一欠けらも興味はなかったのさ。

寧ろ、余分な労力を使って、折角奪った神力を揮うことが嫌だったらしい。

それよりも、どんどん全ての神々から神力を奪って、完全なる1柱となることを目指していた。」

かと思つたが、結局性急に答えを得ることはできず、しかも話を挿げ替えられた。

「はあ？」

随分な感じだけど…、完全なる1柱って何？」

そして、それに気付かずキールは新たななる疑問にすぐに捕われた。

「一の御姿。」

つまり、全てを統合して、名も無き神に戻ることだよ。」

「そんなことが！！！！」

できるわけがない。という声は出さなかったが、言いたいことはリゼに確りと届いた。

その上で、昂ぶるでもない平然とした口調でリゼは続ける。

「できる。って踏んだんだろうな。」

まあ、神々が身に宿す神力自体、元々は名も無き神から削いだのだからな。

できなくもないだろう。」

「そんなもんなのか？」

「神だからな。」

その一言で済ませるのもどうかと思うのだが、確かに神様なら不可能ではないかもしれない。

と、あまりにリゼが事も無げにいうので、キールはあっさりと黙る。

実は、邪神だからなんだが…

まあ、これから話すからいっかど、リゼは黙って聞く態勢に戻ったキールを生温かく見てから、うおっほん！とワザとらしい咳払いをした。

「話しを進めるが…」

邪神に10分の1の神力を奪われた創世神は、侵食された部分を

切り落としてしまおうとした。神力を削がれることは惜しいが、切り落としてしまえば、それ以上侵されることはないからな。

しかし……だ。邪神はそれをさせなかった。」

創世神と邪神の攻防は、激しい陣取り合戦の様相を呈していた。

本来なら、その神体を支配している創世神が圧倒的有利に運べるはずだった。

なぜなら、10分の1を支配されたといっても、まだほとんどの神力は創世神の支配下にあつたし、神体に宿る神力の本質を十全に知り尽くしていたからだ。

しかし、切り落とすという判断を下せば、容易にその通りになるはずのことができなかった。

邪神の呪詛ちからは、創世神の予想を遥かに上回り、それ以上に邪神の在り方が創世神と違いすぎたからだ。

神力は、すべから須く全なる力。

始めから、一にして全なる存在として在る。この在り方こそが“神”だ。

創世神もまた、全なる存在であり、自神以外には成りえない。

つまり、一度分かれた神は、二度と元に戻ることはできないのだ。既に神として在るのだから。」

(「えっ！さっき言ってたことと違ってっけどー!!」)

(「まあ、黙って聞け!!」)

しかし、破壊と呪詛の邪神は違った。生まれからして、人の呪詛と交わったことで発芽し、創世神の神力を喰らうことで成長してきたのが邪神だったからだ。それは、全なる神の在り方ではなかった。だからこそ、それは邪神だつたのかもしれない。

邪神は交わり、取り込み、支配することで己を確固たる存在としてきた。

まるで、グリオールに生きる“人”と同じ。“人”が、聖戦を仕掛け、敵国を蹂躪し、支配の上で統合するのと何ら変わりがなかった。“人”の怨嗟の呪詛と交わって鼓動を始めた邪神には、寧ろ当然だつたかもしれない。

だからだろうか。

本来なら容易なことが、創世神は出来なかった。

邪神の支配の仕方が、あまりにも神らしくなく、“人”と同じだったから。

“人”と接したことがない創世神には、闘い方が分からず。

また、神であるというのに、文字通り“侵食”する邪神を相手に、どう対処すれば良いのか手を拱こまいた。

邪神の侵攻を止めるために、邪神に侵略された場所を囲ったり、邪神と仮想的に戦闘の場を設けることで、撃退しようとしたりと、あらゆる手段を講じて闘った。

しかしそれは、場当たりのな対処の仕方であり、邪神を一時的に留まらせることはできたが、単なる時間稼ぎにしかならなかった。

グリオールの地での戦いなら、生物同士の闘いならそれでもよかった。時間さえ稼げば逃げることはできるのだから。

しかし、創世神の闘いは、自神の内部での闘いだ。どこにも逃げ場はなく、成すべきことは邪神の殲滅、あるいは乖離しかない。それ

以外は創世神に取って、何ら意味を成さない。

そして、最悪なことに。

創世神は、その何ら意味を成さない闘いに終始してしまった。

これが世界を破滅に導く、創世神の大きな過ちであり、大いなる決別の発端であった。

16話、**真実の創世神話**（創世神と邪神）（後書き）

次回に続きます・・・

17話、真実の創生神話　〜狂神〜

創世神と邪神の攻防は、創世神の神力が3分の1まで邪神に侵食され奪われるところまでできていた。

それは、邪神にとっては喜ばしく、創世神にとっては悪夢に等しい事態だった。

まだ創世神の神力が勝っているといっても、その差が逆転するのは時間の問題であり、最早創世神には邪神の殲滅どころか乖離すらできないという事実が、明確な真実としてそこに横たわっていた。

それは、創世神の心を底のない暗い絶望の深淵へと叩きつける事実だった。

その深すぎる絶望は耐えがた苦しみを齎し、その苦しみが6柱の神々も、邪神も、そして創世神にさえも予測もつかない事態を招くことになる

「つまり

狂ったのだ。」

軽々と言ってはいけないことを、リゼは努めて軽薄な調子で言い放った。

誰が　　とは言わない。

だが、その答えはもうキールにも分かった。

創世神が。

ということなのだろう。

はつきりと口にしなかったのは、そういう風に言うことで詳しいことを語りたくないのだと言っているようにも感じた。

だから、キールはただその言葉に目を瞞っただけで、声は洩らさなかつた。

何となく、無遠慮な疑問　わかつている答えを態々（わざわざ）確認するための、それを差し挟んではいけない。という自制がそうさせた。

その様子に、リゼは助かるとでもいうように苦笑った。

「誕生してから、感情という感情を表したことがなかったからというのもあるだろうが、心を塗り潰すような絶望は、創世神には重すぎたのだろうな……」

創世神は、もともと良心から生まれているってのは、最初にも言つたよな？」

それは疑問ではなく、確認。

キールはただコクリと頷いた。

「良心つてのは……弱い。」

続けてぼそりと吐き捨てるように言ったりリゼの声は、低く小さかつた。

「悪しき心がないから、さらに弱かつた。」

××××××××××

絶望の淵から吐き出された苦しみの吐息が、あるとき小さな笑い声になり、それはいつしか大気を揺るがす哄笑へ変わった。

その変貌に、一番ギョツとしたのは邪神だったのかもしれない。

それを証明するかのように、意気揚々と侵食していた邪神の侵食はピタリと止まった。

その心の内には、侵食しだしてから一度たりとて抱いたことがない、危機的な焦りが湧いた。

その焦りが何なのか？

それを吟味するような、悠長な時を邪神はかけなかった。

逃げなければ！

焦りから弾き出された結論に、すぐさま邪神は従った。

それは、創世神からすれば僥倖だったはずだ。

邪神を自らの中から離れさせようと必至だったのだから……

だからこそ、邪神はそれがすぐに叶うと思った。

叶わないはずがないと確信していた。

しかし

邪神の思惑はものの見事に外れた。

創世神はあろうことか、離れようとした邪神を己の奥深くに捕らえて離さなかったのだ。

それこそが、真に狂った神の狂った所業。

人が種をまき、邪神が引き起こした、偉大なる神の“狂乱の饗宴”の始まりだった。

「グリオールの地は、その時まさに栄華を極めようとしていた。

さつきも話した通り、空も自在に飛べるキカイって技術で、

“人”は繁栄を約束されたかの如く華やいでいたしな。まあ、あんまり自分たちばかり繁栄しすぎてたのが、ちよつとばかり問題ではあったが。

概ね、グリオールの地は問題なく“生きていた”んだ。」

リゼの声音は創世神が狂った行くだりから、平坦だ。

あまりにも、平坦に過ぎる。

いつも通りの話し方をしよう。軽く言おうと意識して話すことごとくを失敗しているような。

そんな話し方だからか、ひどく落ち着かない。

「そんな世界が、ある日突然崩れ去った。」

想像できるか？そう口にしたリゼの目がすつと細くなった。

「はじめはなんだったか……」

激しい地震が各地で起こり、ある砂漠には、降るはずのない豪雨に引切り無しの雷。

南の大陸は雪に閉ざされ、反対に北の大陸は日照りが続いて天候は定まらず、山は轟音を立てて次々と噴火し、海の亀裂からも炎が噴きあがって、海が煮えたぎった。」

リゼの口から飛び出す言葉に、キールは啞然とするしかない。

そんな天変地異なんか起きたら……

「これで、生き残ったら奇跡だな。

何一つ残りはしなかったが……」

それはそうだろう。

キールが思わず見上げた空は、静寂に包まれている。

それは平穏な証拠だ。

かつて、そんなことが起こったなんて信じられないぐらいの平穏。

それがそこにあるということが、何となく嬉しくて、ものすごく不思議だ。

「大方の生命はすぐさま死に絶えた。奇跡的にしがみつくように生き延びた生命も、次々と襲いくる災害に」

そこまで言って、リゼは災害なんかじゃなかったなと首を振り、

「これは、“狂宴”の災厄とでも言うべきか……。

神の“狂乱”が起こす災厄に生き残る隙間なぞ、針の先ほども残されちゃいなかった。」

全滅。

脳裏に浮かんだ答えは、悲しいことに間違っていないだろう。

キールの額には冷たい汗が浮かんでいた。

「しかし、生きとし生きるモノたちがいなくなるのが、“狂乱の饗宴”は終わらなかった。

むしろ」

更に、先へ先へと話しを進めようとしていたリゼの口が、唐突に止まった。

あまりに不自然な態勢で固まったりゼに、キールは訝しげな目を向

け声をかけよとしたが、

「いない?」

平坦な口調を驚きに一変させたりぜの声に止められた。変わりに出たのは間抜けな

「え?」

という疑問。それには頓着せずに、リゼは大声で

「いない!」

只一言叫んだ。

血相を変えて叫ぶリゼの目を追えば、

「え!?」

そこには柔らかい落ち葉の固まりだけがあった。

その落ち葉の上には、ただ窪みだけが寂しげに残されていた。

あるべき者の姿を消失させて。

18話、少女失踪（前書き）

のらりくらりと話し込んでいるうちにいなくなった少女は一体！！

残酷な描写が少々入っております。苦手な方はご注意ください。

18話、少女失踪

深夜。夜行性の魔獣の目が爛々と輝く以外、どの生き物を息を潜めている時間。

森の中はより一層、闇さを深めていた。

その闇い森に、チラチラと白いモノが揺らめいて、流れていく。

獣の目を持ってすれば、それが人であり、尚且つ襲うに容易いモノだと判るに違いない。

そこには、白髪を乱れるに任せた少女が生氣のない目で森を歩んでいた。

辺りは星明かりも届かず、“夜”とは暗い闇なのだと言信させるような夜道。

しかも足場も不確かな森の中を少女は歩いていた。

その足取りには一切の躊躇がない。

まるで、暗闇に支配されているその足場に、確かな道があると知っているかのように。

しかし、時折少女の体が木の根に、石に、絡まった草に取られて沈み込む様を見れば、そこには道がないことは容易に判り、道無き森に無謀にもただ黙々と足を進めているに過ぎないことが見て取れる。散々転ぶ度に、少女の身体に貼りついている襤褸は、益々ただの布切れになり下がり、もはや服としての機能を放棄している。そのせいで、少女の肌には血が滲み、至る所に傷ができていた。中には、深い裂傷もあるようで、少女の後ろには点々と血の跡が続いている。

普通に考えれば、自殺行為に等しい危険な状態にあると、幼い少女にも理解できるはずだ。

夜は整備された街道でも魔獣が姿を見せ、隙あらば血肉を貪るごとく虎視眈々と狙っている。

況や森の中など、魔獣だけでなく猛獣にとってもだろう。

案の定、少女の血の匂いに惹かれた獣がその瞳を爛々とさせていた。

甘い血の匂いに鼻をひくつかせたのは、一頭だけではなかった。

何頭もの獣が、甘い肉に引き寄せられるように頭を低くして獲物を狙っていたが、一頭の魔獣がその存在を露わにすると、有象無象の弱者共は尻尾を翻して逃げ出した。

残っている何頭かもいたが、その魔獣が敵意を示せば、ここは諦めるしかないかとその場を後にした。

偏にその魔獣がこの場では最も強く、標的たる獲物が小さすぎたためだ。

傲然とその場に一人残った魔獣の先には、そんな獣達のやり取りも知らずに何とも無防備に歩いている獲物がある。ろくに抵抗できずにもない矮小な獲物だと、魔獣は人知れず口角を上げた。

小さすぎるし、骨っぽすぎて食べ応えが無さそうだと、体格の大きすぎる魔獣は皺を寄せたが、それでもあの甘い匂いには抗うことができそうにない。

ペろりと美味しく腹に収めて、また狩りに出るしかないなと思うと面倒にもなるが、あの甘い血をゴクリと飲めば、あの匂いのせいで乾ききった喉が潤されるだろう。

そう思えばもう涎が止まらない。

実に旨そうだ。

そして、非常に甘美な匂いだった。

目の前で、ゆらりと獲物が地面に倒れ、またむくりと起き上がり先へと進む。

幽鬼のようなその奇妙さに、人なら違和感を抱いたかもしれないが、魔獣はそんなことには頓着しない。

考えるのは、如何に効率的に仕留めて、その血を余さず啜るかということだけだ。

クンツと鼻をひくつかせるまでもなく、新しい甘い匂いがした。

せっかくの獲物は、また傷を負ったのだろう。そのせいで甘い匂いが強くなっている。

もったいない。

その魔獣は本気で残念がった。

今流れている、あの血もさぞ旨かるうに。そもそも、あれは自分が飲むモノだというのに。と……

だから

さっさと、食べてしまおう。

魔獣は甘い血の一滴も無駄にたくはないと、ただその一心で獲物へと向かった。

犬歯をむき出し、涎を垂らし、華麗なる跳躍でもって少女の柔肌へとその牙を光らせ

獲物となる少女の命は、すでに尽きたな。

魔獣の口角が笑っているかの如く、凶悪に上がった

キールとリゼは、すぐさま行動を起こした。悠長に荷物をまとめている場合でもないので、荷物はそのまま、火だけ乱暴に始末した。

リゼの結界が効いている限り、荷物の心配がないから出来ることだ。

「心配は？」

「奥に続いている！」

短い応答だけで、二人が駆け出せば足元の草がさつと揺れた。

「『我、風に任せ、風を纏って進まん。』」

簡易の術で追い風と風の防護をつくると、キールの前を飛翔するリゼを追う。

リゼは、すでに遙か先に飛んでいる。

微かに位置が分かるのは、リゼが青白く発光しているからにすぎない。

キールのことを一切考慮しないかのような速さで、グングンと先を目指しているリゼには術を使わなければ付いていくこともできない。常にはいりゼの慌て方に、キールは逆に冷静になっていった。

二人して慌てふためいてもどうしようもないということと、冷静にならなければ本気のリゼを追うことができないという現実から。

発光する点と化したリゼに視線を投げながら、キールは地面にも注意も向ける。

飛翔して先を行くりゼとは違い、キールは風に押されて走っているにすぎない。

風の防護をかけているとはいえ、足元を疎かにすればすぐにとんで

もない大怪我にも繋がりがねない。

怪我を負えば、怪我自体はすぐに癒せるが、その時間が致命的な口スとなってしまうのは想像に難くない。

そのロスが、少女を危機的な状況においやってしまったかもしれない。特に、今のようリゼが慌てているような状況では益々ありえる。

リゼはほぼ万能な精霊だ。

リゼさえいれば、大抵のことは上手くいく。

しかし、キールがいなくては出来ないこともある。

こと治療に関して言えば、精霊であるリゼよりも精霊と契っているキールの方が適切な処置ができる。

これは、精霊と人との性質の違いがそうさせる。

精霊は精神体のようなものだから、癒すという事象に加減が効かないのだ。

癒すとなれば全力で癒してしまう。

それはとても良いことのようにも思えるが、過ぎる治療ほどやっかないものはない。

リゼほどの精霊が全力を出してしまうと、脆弱な人間の器のほうはその力に耐えきれなくて壊れてしまうのだ。

これは、身体機能が活性化しすぎて、人体に負荷がかかる結果だ。だからこそ、キールは冷静にリゼを追う。

リゼが取り返しの付かない事態を引き起こさないように。

そうしてキールが走ることを暫し、リゼが降り立った地へと更なる加速を持って急行した。

リゼが次なる動作をする前にとキールは焦る。

近づくにつれ、嫌な匂いが鼻についてきたからだ。

嗅ぎ慣れたくもないが、既に馴染んでしまった匂い。

それは、まぎれもない

血の臭い!!

嫌な予感に冷や汗が背中を伝う。

脳裏には、見たくないと思う光景がちらりと過った。

やがて視界にリゼの姿がはっきりと判る距離に近づいたとき、

「つつな、なんだ?? これ!」

キールの目の前には、異様な光景が広がっていた。

辺り一面、恐ろしいほどの血溜まり広がっているが、それは予想していたものではなかった。

検分するように、その光景を見つめるリゼ。

その発光している体は、あまりにも異様な光景を易々と浮かび上がらせている。

その浮かび上がった草木の血溜まりの色は

紫色

明らかに人の血ではなく、

魔獣の血だった。

19話、疾走

危険生物上級指定

『風属性魔獣：ベロウィングウルフ』

主な生息域は森や山間部で、体長は成体で3メートル以上。

極めて獰猛な上、風術を駆使する最速の魔獣として知られる。

体表は灰色の毛皮で覆われ、その毛皮の厚さとその下にある頑強な肉体により衝撃を吸収。

鋭い犬歯は、岩をも砕く威力を備えている。

討伐するには1個小隊相応の戦力が必須。相応の犠牲を伴うため人的被害　人里などに下りてこない限りは討伐の対象の限りではない。

キールの頭に巡ったのは、世間一般では上記のように伝えられている、この上もなく厄介な魔獣のことだった。

危険生物の上級に指定されている、極めて討伐困難なベロウィングウルフにキールも遭遇したことはあつたが、討伐したことはない。

わざわざ倒す必要がなかったし、倒そうとするとかなりの消耗戦を覚悟しなくてはならなかったからだ。

だから……

眼前の情景は異様過ぎた。

周囲の木々は常のように悠然とし、踏みしめられた草には荒れた様

子がない。

至って普通な状態がそこにある。

ただ、獰猛で知られるベロウイングウルフの屍があることを除けば。

そのベロウイングウルフの屍は、頭部から腹部までが顎から裂け、その内部を晒け出した状態で絶命していた。

灰色の毛皮は完全に肋骨や背骨に沿って捲れ上がり、大量の紫色の血溜まりの中に沈んでいる。

滅多に拝めないだろうベロウイングウルフの内臓が血溜まりの中で鮮烈な朱色を覗かせ、肋骨に引つかかるように残っている心臓からは、魔獣の魔力の源とも考えられている緑色の魔石が晒されていた。しかも、鋼以上に強度がある魔石が、何故かボコツと抉れていた。

……しかし、さっき見た通り草木は荒れてはいない。

「……ばかな」

一撃でヤラれたとでも？

キールの背筋に寒気が走った。

一撃で殺された何て、そんなバカみたいなことがあってたまるかと思っ感情を、きもち 真実を見ると嘔く理性が現実を、その事実を叩き付けて来る。

周囲はベロウイングウルフと応戦した痕跡が何一つ無いのは明白。何しろベロウイングウルフの得意とする鎌鼬かまいたちの爪跡はおるか、対峙したなら残るだろう草を踏みしめた跡さえないのだから。

血溜まりに横倒しになり絶命しているベロウイングウルフは、間違

いなく何の抵抗も出来ずに倒されている。
これこそが真実であり、それ以外には説明できない事象だった。

じゃー、こんな風に殺ったのは？

「 近い!! 」

思考に沈みそうになっていたキールを、リゼの声が止めた。
リゼはフワリと飛翔体勢に入ると一直線に闇い森くらの中突っ込み、
先と同じ速度で駆け始めた。
その様子に一瞬キールは呆気に取られ、慌てて

「『我、風に任せ、風を纏いて進まん』」

と術をかけて跡を追う。

その目元は羞恥と苦さに少しばかり赤くなっていた。

俺、馬鹿じゃないか！

リゼの検分はキールのように魔獣の屍ではなく、きちんと少女を探
索するためだったことは今となっては簡単に察することが出来る。

俺って奴は！ 何やってんだよ!!

キールは探すべき対象のことをすっかり失念していたことに、自分
自身に対して憤っていた。

考えれば考えるほど、その憤りは膨らむ。

凜猛なベルウイングウルフを、異様な屍に変えるほどの“何か”が

この森には潜んでいるのだ。
そんな危険な“何か”が、何の力も持たない少女の前に現れたら？
答えは簡単。

間違いなく、魔獣よりも華奢で脆弱な少女の命は朝露のように消える……

キールは頭を振って、簡単に弾き出されたその不吉な考えを振り払い、眼前のリゼをひたすら追うことのみに専念する。

「『更なる風を』」

限界速度を突破した追い風を身に纏い、キールはリゼに肉薄するスピードを自身に課した。

体のあちこちが痛むが、足で疾走するというよりも、風に完全に乗り、足はその補助をするという駆け方に変えて何とかその痛みを最小限に抑える。

これで、リゼと並走できるだけのスピードを得たキールは、器用に枝葉を避けながら、あるいは風の防護で蹴散らしながら進んだ。その甲斐あってか、リゼの姿がはつきりと見えるすぐそばまで詰めることができた。

そうして肉薄したキールに、一瞬だけ目をやったりリゼだが、すぐに目的地へと視線を直した。

リゼの感覚では、後少して探索の終着点へと到着すると告げている。そこには、探索対象の少女がいることが既にわかっている。それと同時に、その少女の傍らに厄介な存在が在ることも判っていた。その存在にリゼは皺を寄せた。

嫌な予感ばかりあたる！！

苛立つように思うのは、少女から感じた違和感。
意識が不自然に感じられない、その異様さから至った一つの予感が、
今確かなものとなってリゼに伝えられていた。

その気配は、リゼにはあまりにも馴染み深い。

あの少女は、まだ間に合うだろうか？

焦燥感がリゼの胸を騒がせる。

過去にあいつらから助け出せた者は、かなり少ない。

白髪の少女が助かるのか？それとも、どうなるのか……

正直、リゼにもわからなかった。

だからこそ、早く確かめなければという思うが翼へと伝わり、尚更
スピードが増した。

そのスピードに、キールが後方へと一端下がり、また近くへと迫っ
てきた。

かなり、無茶な力の使い方をしているらしい。

いつもなら、キールにそんな無茶なことをさせないようにさせると
ころだが、今夜だけはと目を瞑った。

自身の契約主は大事だが、自分の存在理由そのものには劣る

終着点。

少女の傍らにある存在。

「我が滅すべきモノよ。覚悟するが良い。」

密やかなりゼの唸りはキールには届くことなく、風に巻かれて上空へと飛ばされた。

20話、少女とソイツと黒紫炎

「…つつつつ」

風に押され、満足に呼吸ができない苦しきで、キールは苦しげに顔を歪めた。

乱れる呼吸は苦しくなる一方で、身体のあるところが痛む。

それでも風を弱めようとはしなかった。

正直、すでに限界を超えている。

それでも、

待ってるよ！

いなくなった少女のことを考えれば、今ここで自分可愛さにスピードを落とすなんて、そんな馬鹿な真似が出来るわけがなかった。

まだ、イける！

いや、イケないわけがないだろう！

と何だかわけのわからないマインドコントロールを自分自身にかけてながら、前を行くりぜに必死に食らいつくようにひた走った。

そんなキールの眼前が、不意にパーと光に包まれた。

そこは、ばかりと地面が剥き出しになっている拓けた空間だった。光に包まれたと感じたのは、そこに天高く輝く月明かりが差し込ん

でいたからだ。

普段ならこれでも「暗い」と感じるぐらいの光量なのだが、闇に包まれた森の中を走っていたせいで、月明かりが何の抵抗も無く差し込んでいる空間が一際明るく見えたようだった。

そこに、

「よかった。」

キールは安堵でその場でへたりそうになった。

その拓けた空間に、月光を受けて佇む影があった。

ぼさぼさの白髪に、小柄な肢体。

探していた少女がその場所にいた。

「まったく、心配かけさせやがって」

口元を歪ませて憮然とした様でキールは呟くが、その目元は嬉しそうに細められていた。

ぼんやりと立っている少女は、そんなキールを無視するように無反応だが、キールはそんなことには不本意だが慣れてしまったので気にしない。

ただただ少女が無事だったことにほっと息を付き、自然と体を前に

「近寄るな!」

少女に歩み寄ろうと宙に浮かした一步を、鋭い一喝で止められた。

「はあ?」

呆気に取られてリゼを見れば、

「おい、どうしたんだ？」

雰囲気ガラリと変わっていた。

さっきまでは、常に無いぐらいの慌て様で、カーツと熱くなっていたというのに……

少女を見る目は冷厳とし、リゼを中心に冷気が漂っていた。

思わずキールの背筋がぶるつと震えた。

それは畏怖のせいか、単純な恐怖心のせいか…

「それで隠れたつもりか？」

茶番に付き合うほど、我は寛容ではないぞ」

静かに発せられる冷淡な声に、キールは自分が言われたわけでもないのに一歩後ずさってしまった。

「さっさと出て来い。」

リゼが何を言っているのか？

キールには全く分からなかった。

ただ、頭に鳴り響く警鐘に従ってまた一歩下がる。

「それとも、引きづり出されたいか？」

気づけば、並んでいたはずのリゼの顔が見えない位置、リゼの後ろ姿が悠々と見える場所まで下がっていた。

リゼは、ただ正面を見据えている。

その視線の先を初めて追ったキールは、そこに佇む少女を認めた。

あの子に言っているのか？何故？どうして？

彼女が何かしたのだろうか？

隠れるって誰が？

キールの頭は混乱し、ぐるぐると思考が空回りする。

少女以外にそこには、誰もいない。

気配ぐらいはキールだって探れるが、リゼが向ける先には少女の他には獣すらいない。

殺気立ったりゼの気配に促されたかのように、少女はわけが分からないとでも言いたげにリゼを見つめ、る……？

「えっ！」

リゼを見つめる少女に、キールはぼかんと口を開けた。

少女の瞳は、銀色 をしている。

そう、きれいな色だと思ったから、キールもしっかりと覚えいている。

今は、人形のように嵌め込まれた瞳はキールを映してはくれないが、いつの日か、その銀色の瞳をきらきらと輝かせてくれたらと願っていたから。

だから、間違えるはずがない！

確かに、銀色の瞳をしていたはずだ。

その瞳が

「^{あか}赫い！！」

今、真っ赤に染まっていた。

灼熱の業火でさえもまだ足りない、全てを燃やし尽せと轟々と燃え盛る炎。

黒煙をも感じさせる闇い炎が、少女の両目を彩っていた。

その瞳がリゼを映し、灼眼にいつそう闇を溶かしこんで仄暗い赭へと変わった。

「……そんな……ウソだろ？」

キールは無言でリゼを見つめる少女に慄然とした。

アレは、少女ではない。

瞬時の判断は決して間違いではないだろう。

証拠とか、証明とかそんなものは必要ではなかった。

一目で知れる。

アレは誰だ？あの子はどうしたのだろう？

リゼを見て、リゼの宣告を受けて真正面から対峙する、その灼眼。その灼眼が細められ、ニタリと唇が歪む。

キールには何が起こっているのか皆目見当がつかなかった。ただ判ったのは、そこにいるのが小さな少女ではないこと。そこにいるのは、妖艶で邪悪なモノ。

月光に照らされた、不吉な存在がそこにいる。ということだけだった。

ソイツの唇がさらに歪む。

ニタニタとしたその顔、その醜悪さにキールは顔を顰めた。

キールが少女に出会ったのは5日前。

たかが数日で少女の何かを知った気ではないが、それでもその歪んだ嗤いが少女に全く似つかわしくないということは判る。数日間、能面のように表情を動かさなかった少女が、出会った最初に不思議そうにキールとリゼを見ていたことを知っているから。

その顔に浮かんでいたのは無垢な表情^{かお}。

決して、あんな醜悪な顔をするわけがないとキールは断言できた。そして、思う。

アレは、何なんだ？

リゼを正面から見下ろし、居丈高にクツクツと喉を震わせ嗤うソイツ。

「コノ子八、ダメ。

コノコ八、吾ノ大事ナ子。」

口ではクツクツと嗤いながら、どこからか無機質なのに絡み付くような気持ち悪い声が頭に響いてきた。

「我は出て来いと言っている。」

「ダメダメダメダメ。

コノ子八、モウ吾ノモノ。コノ子ガ大事。」

リゼとソレの言葉は会話になっていない。

しかし、哄笑が続くうちに、『チツチツ』という音が『ジジジジツ』と濁り、『ガガツガツ』と不穏な音へと変わるころには、その異音に何事かと辺りを警戒するに至った。音の発生源を探ろうと耳を澄ませている中、大気が擦れる異音が、いよいよ哄笑と遜色ないぐらいの大音声になった瞬間、

「永遠二吾ガ、守ルノダ！」

『ゴツ！！！！！』

不意に大喝したソイツの周りに、異音が爆発し何も無い空間が轟音を立てて炎を上げた。

そんな！！

炎の勢いは凄まじく、キールの目には少女が一瞬で巨大な炎に喰い尽され、舐めまわされているように映った。

少女が炎上したことに焦って、キールは前に駆け出ようとしたが、意思に反して体が強張って動けなかった。

それは、突如発生した巨大な炎に身が竦んだから。というのもあるかもしれないが、それ以上に炎の禍々しさに恐怖で身体が縛られた為だった。

突然発生した炎は、赤でも橙色でもなかった。

その炎の色は、闇を纏った紫色。

自然界には在り得ないその炎。

そのあまりにも邪悪な黒紫炎が空気を焦がしていた。

21話、吹き荒れる暴力

燃え盛る黒紫炎が大気を焦がし、焦がされた大気から黒煙が立ち昇る。

その轟々と燃え盛る大音声に、轟音に負けない哄笑が被さる。

その異様さにキールは目眩を感じた。

少女の顔をした、少女とは遥かにかげ離れた存在。

ソイツの身体は、激しく燃え盛る黒紫炎を平気な顔で纏わせ、虫を追い払うような仕草で軽く腕を揮う。それはほんの微かな動き。

その瞬間、拳大の黒紫炎の飛礫が何十個とキールたちへと殺到した。

「忌々しい！」

だが、それはリゼが舌打ち一つで展開した水の結界に当たり、白い水蒸気となって無力化された。

視界いっぱい広がった水蒸気は、瞬きする間もなくリゼの風で払われる。

そのついでとばかりに、リゼはソイツの黒紫炎をこっそりと削ぐが、一瞬のうちになんかそんなことは意味がないとでも言いたげに、せせら笑いながらソイツは黒紫炎を噴き上げ、また飛礫を叩き付ける。

その数は先程の数を軽く越え、キールの視界は黒紫炎の飛礫で塞がれた。

「無駄なことを」

呆れた声を出したりリゼは、今度は結界で受け止めるのではなく、炎の飛礫をソイツ以上の水の弾丸で撃墜した。

黒紫炎の飛礫は、水の弾丸と衝突した瞬間に膨張し、閃光を放って爆発する。

その爆発が、決して遠くない両者の間で何百と立て続けに起こり、真昼の太陽を直視するような、暴力的な閃光がキールの目に突き刺さった。それに加えて、体を揺さぶる轟音が叩きつけられ、キールは咄嗟に目を押さえるべきか、耳を塞ぐべきか……と迷ったが、結局どっちもせずに、ただ目を細めて意識を集中した。

光が治まれば、ソイツに殺到していた水の弾丸が黒紫炎の壁に阻まれて、蒸発しているところだったが、

「甘いな」

フツと鼻で笑ったりゼに従うように、蒸気がソイツの黒紫炎の周りを包み込むように広がると、勢いをつけて蒸気の膜が、ぐるぐると黒紫炎を巻き取るように高速回転を始めた。

キールから見ると、黒紫炎の竜巻がこっちに迫ってくるような気がして、その凶悪さに恐れを抱かずにはいらなかった。しかし、それがリゼの力である限り、キールへと迫ることはなく、

「……………!!」

竜巻の中で、ソイツの気配が驚きに染まり、耳障りな哄笑が途絶えた。だが

「まあ、無理か。」

ぼそりとリゼが呟くと同時に、

『ボンツツツ!!……!!』

と竜巻が爆発し、辺り一面に暴風が吹き荒れた後、ソイツが平然と姿を現わした。

「アタリマエダ」

相変わらずの無機質な声を、どこからともなくソイツが発した。少女の顔を見ると、口は完全に閉ざされ、醜い笑いの形に歪まず、人形の表情へと変わっていた。それを見て、リゼは馬鹿にしたように笑う。

「それなりに驚いてはいたようだがなあ。」

「ナゼダ？」

「虚勢を張ることもないだろう？」

その少女こを操ることも忘れてるっていうのに。」

「……ナニヲ……!!」

意地悪く茶化すりゼに、ソイツは少女の口元をリゼの言葉を否定しようとする、纏う黒紫炎を天高く膨張させたかと思うと、一気に収束。その手には少女の身長を悠に越す、鋭利な一振りの巨大な長剣が握りしめられていた。

それは、黒紫炎を凝縮した禍々しい長剣で、少女が振るえるとは到底思えない代物だ。

だが、長剣を掲げた次の瞬間には、ソイツは神速の刺突を繰り返す

『ヒュツツツ』

風切り音をその場に残し、長剣の先が一瞬のうちにリゼへと迫る。しかし、その長剣がリゼを突き刺すことはなく、リゼに軽くあしらわれていた。

それから先は、はっきり言って何が起きているのか情けないことに、キールの理解の範疇外もいいところ。視認の限界値を完全に越えていた。

力と力が衝突しては、離れ、また衝突する。それは、ビリビリとした圧力から察することができるが、リゼの攻撃がソイツに当たった瞬間も、ソイツが長剣を奮う姿も見えなかった。

今、どんな攻防をして、何が起きているのか？
俄には察することも出来ない。

一体どれほどの力を応酬しているのか……？

両者の力は、ぶつかり遭っては四方八方に飛び散り、周囲の木々はその力に巻き込まれ、傾き、なぎ倒され、真っ赤に燃えたかと思えば、水浸しになり、爆発した次の瞬間には、風にさらわれどこぞへと飛ばされ

更地の空間を確実に広げていることだけは確かで、キールにはそれしか分からない。

否、もう一つ確かなこと。

解りすぎるほど解ることがある。

キールの周囲。

そこは、草木が繁り、駆けつけた時のままの情景を留めている。この不自然さ。

幾ら何でも気付く。

「……結界」

キールの周囲には完璧な結界が敷かれ、黒紫炎の熱波も、火の粉も、突風も、水滴さえもキールには届かない。

キールが気付かぬうちに、リゼがかけた防護結界だった。強度と持続力の高い結界の中、その惨状を見せつけられ、キールは拳を握りしめることしか出来なかった。

何が起こっているのか？

何故、こんなことになったのか？

あの子はどうなったのか？

アイツは何なのか？

何一つわからない歯がゆさと、守られ何も出来ない自分。

キールは、強く強く、手のひらに爪を食い込むのも構わず、ひたすら強く拳を握り締めた。

あらゆる凶悪な攻撃から身を守る結界の地面。

そこには、ポタポタとキールの血が滴っていた。

22話、苛立つ両者の行方

蹴り出した勢い以上の加速に身を任せ、躊躇いなく長剣を突き出す。流され、かわされた瞬間、突き出していた長剣を慣性を無視した動きで大上段から切りつける。

しかし、それさえもあっさりと流された。

では。と長剣を振り回し、黒紫炎を鞭に変え勢いよく振るう。

しなやかな鞭は、相手を締め付けるように体躯に巻き付こうとするが……

突風ひとつで払われ、あまつさえ長く伸ばした鞭の先から消滅されそうになり、慌てて先を切り離し元の長剣へと戻す。

ついで、間髪入れずに次の斬撃を繰り出すが、またもや軽々と避けられ、逆に長剣が風に巻き取られそうになり咄嗟に距離を取った。

強すぎる!!

間を置かずに繰り出す攻撃の悉くが意味を成さず、徒労に終わる。明らかに自分より遙かに強い相手に対し、どう対処するか？

さて？ どうする？

自問自答をするが解決策はなかなか出てこない。

何の解決策も浮かばない中、ただ無言で攻撃を繰り出すしかないのが、無性に苛立たしい。

その焦りは確実に切っ先を鈍らせていた。

しかし、例え鋭い一撃を繰り出しても、掠り傷さえも与えることができないという事実は変わらないだろうと頭のどこかでは理解していた。

そう、解ってしまうこともまた腹立たしいことではあった……

さて……

一方、相手の斬撃を流し、刺突をいなして絡め取り、と余裕綽綽で相対しているリゼは、正直かなり悩んでいた。

向こうの攻撃を受け流すのは簡単。

接近さえすれば武器さえ絡め取ってしまうこともできる。

禍々しい黒紫炎を削ぐことも問題ない。

ただ……

こっちから攻撃できないのが、痛いな。。。

そう、リゼは相対している相手からの攻撃に対処するばかりで、絶对的な余裕を持っているくせに一度たりとも自分からは攻撃していなかった。

それは、ひとえに相手があの子だからだ。

まだ、完全ではない？

いや、ほとんどあの子か……??

避けることも、いなすことも、受けることもできる攻撃を最小限の労力で流す。

リゼの関心はそんな最小限の労力でもなんとかなる攻撃にも、その攻撃を仕掛けている相手にもない。

リゼの思考を占め、リゼを悩ませているのは目の前のソイツではなく、少女自身に向けられていた。

あの子に自覚は……？

ないのか？

眠ったままということか？
いや、閉じこもったままか……

思い出すのはここ数日の彼女の様子だ。

森に入った当初はまだ反応があった彼女だが、昨日、いや一昨日あたりから様子がおかしかった　　ような気がする……

明らかに当初より頑なになり、リゼの声にすら反応が遅れてきていたし、無反応になってきていた。

今日などは、強要　しなければ起きることも、食べることも、休むことすらしなかった。

もっと、早く動けばっ……

殻に閉じこもり、肉体の主導権を奪われている少女に齒噛みするが、もう遅い。

後1日、いや2日早く対処してさえいれば、そう思って視界に納めるのは少女ではなく、拳を握り締めて必死に状況を理解しようとする。努めている自分の契約者。

自分で自分を傷つけていることさえも気付いていない、大切な青年の姿だ。

あいつに……こんな想いをさせたくなかった。

リゼにとって少女は、興味は引くがそれだけの存在でしかない。

リゼが想うのは、少女を想う青年の意思。

あいつが助けたいと願っていたから、リゼも少女を気にかけるのだ。

けれど、今の状況はどうだ！

少女の変貌を見過ごした自分がリゼは何より許せない。

しかし、幸いなこともある。

まだ、間に合う。

じつくりと少女の内を探っていたリゼは、確信を持って更に少女を探る。

リゼは精霊だ。

精霊の視点は幾つもの真実を映す。

今リゼの目に映るものは、現在 と ありのまま の少女の姿。その目に、少女の中が変わっていないという事実を確かめることができた。

だからこそ、リゼは手を拱こまねいている。

少女が完全に乗っ取られていたら、後悔はするがもうどうすることも出来ない自体に陥っているということで、契約主に何と非難されようと、リゼ本来の使命として目の前の 奴 を殲滅する。

それこそ、後腐れがないよう一片の躊躇もなく、塵さえ残さず消滅してやるうとも思う。

けれど、現状そうすることは賢明ではなかった。

なぜなら、少女は少女として生きているから。

しかも、何の奇跡なんだ？ と首を傾げたくなる程、 奴 に侵食されていけないのだ。

これで殲滅などという選択ができるはずもなく、また、少女としての本質を損なっていないのなら、滅多やたらに少女に怪我を負わせることもできない。

あゝ、本当にどうしたらいい？

頭を抱えたくもなるうと言うものだ。

ひよいひよいと剣戟を避け、やけになったのか、過剰なまでに力が注がれた長剣から零れた黒紫炎が、剣戟の合間に四方八方に飛び散る。

全く面倒なことをしてくれるものだ、リゼは風でいとも簡単に黒紫炎の残り火を空へと放り、そのまま空で握りつぶす。

力任せかの攻撃がすぐに追撃してくるが、こんな突きはリゼに関心すら抱かせず、さらりと流すに留めながら、リゼの思考はぐるぐると回っていた。

どうする？

どうしたらいい？

明確な答えが出てこない苛立ちに、ついつい反撃しそうになりながら、傷つけてはいけなさと必死に自重する。

自重するために廻らせた思考は、とりとめのないこと。様々などうでもいいことに傾倒しながら、

……そういえば、あの子の名前をまだ知らないな？

ということをチラリと思った。

なまえ……？

その時、思考にかかる霧が急激に払われ、リゼの思考はスッキリと晴れ渡った。

「そうか！！　名前だ！！」

天啓のようにリゼの思考を貫いたのは、絶対にどうにか出来ると保

証はない考えであり、最善の方法とも言えないかもしれないが……。

チラリと見るのは、地面に血を流す契約主。

少なくとも彼の心を晴らすことは出来るだろう。

そして、少女の心にとっても、もしかすると……。

もはや、道は決まった。とりぜはこれからの準備に思考を割くことへ没頭していく。

そこには、一片の躊躇もなく、澄んだ眼光は静かな力を湛え、ただ少女の中へと視線を注ぐ。

それに身じろいだのは、少女の身体を奪ったソイツか？

それとも、意識のない少女か？

『……………』

あまりにも小さな詠唱は誰の耳にも届かず、ただ

「あつ！」

驚きの声を出したのはキールだった。

今まで、残像すら見えるか見えないかという両者の動きが唐突に止んだかと思っただら、糸が切れたように少女の身体がパタリと前のめりに倒れていた。

23話、 優奪者（イフェルノ）

「殺したのか!!」

ガスガスと足音荒く少女に駆け寄ったキールは、リゼを鋭い眼光で睨みつけた。

その冷たく、鋭すぎる視線に、リゼは悠然とした態度でゆっくりと頭を振った。

「眠ってるだけだよ。」

うつぶせに倒れている少女を仰向けて首元に手を当てていたキールは、少女の温かさと確かな鼓動に、そしてゆっくりとしたリゼの声に安堵する。

「よかった。」

ほつつと吐いた安堵の吐息に、少女の前髪が揺れた。

ざっと見た限りでは外傷もなく、少女の顔も多少青白く見える程度だ。

これは出会ったときの蒼白で血の気のなかった頃から考えれば、むしろ顔色はまだ良いと言えるような状態だった。

つまり 見た限りでは全く問題ない。

けれど、キールはもう一度、今度は丹念に少女を診ていく。

「……大丈夫なのか？」

身体に異常がないことは、“診眼の法”で診たキール自身納得せざるを得ないが、だからといっておいそれと安心はできない。さっきまでの異常な事態を見ているだけに。

「今は大丈夫だ。」

ただ、眠っているだけだからな。」

「……、いまは……？」

ととととキールに近づきながら鷹揚に言ったりゼの言葉に、それでは時間が経てば何かが起こるといふことか？と、キールは眼差しだけで問う。

「ああ、今はなんともない……が、明日、明後日にはどうなるかわからん。」

「……！！」

素っ気無く返ってきた答えに、キールはカツとなって何か言おうと口を開いたが、頭に血が上りすぎた為に、パクパクと動かすだけで声にはならなかった。ただ、咄嗟に握り締めた拳がぎちぎちと軋み、地面に一滴の血がポタリと落ちた。

そんなキールをじつと見つめたまま、リゼは静かに声を重ねる。

「この子に今、何が起こっているのか？」

「……何を？」

言っているのかという声は続かず、リゼの空を凝縮した眼をキールはただ見つめた。

「知りたくはないか？」

「……」

知りたい、と切望している。

知らなくてはならない。とも思っている。

けれど、なぜだろうか？

素直に知りたいとは言えない。

「知りたいだろう？」

「……ああ。」

重ねて聞かれて、やっとキールは苦しげに頷く。
どうして、すぐに頷けなかったのか？

胸の中に湧く訳のわからない思いに、キールは一先ず蓋を閉めた。
今、キールがすべきことは知ること。

そして、何が出来るかを考えることであって、自分の気持ちを明確
にすることではない。

自分の中でそう一応の結論をつけたキールは、改めてリゼを見る。
その数瞬の変化を受け、リゼは口を開いた。

「結論から言えば、この子は イフェルノ 侵奪者 に身体を操られていた。」

「いふえるの??」

「そう、 イフェルノ 侵奪者 。

“墜ちた精霊”、“邪神の僕”しもへとも言われているものだ。
人間たちに知られている名は、“邪黒”ダイナといったか。」

「
邪黒^{ダーナ} ……」

それは、世界を蝕むモノ。
闇を纏った異形の怪物。
神から見捨てられた破滅の化け物。

キールはリゼから視線をずらして、腕の中の少女を見る。

「 ……ほんとうに？ 邪黒^{ダーナ} ??
操られていたって、そんなことが??？」

邪黒^{ダーナ} という存在は、広く知られている。

それこそ幼児でも知っている。何しろ、小さな子のための存在として知られているような存在なのだから。

それは、「悪いことしたら ダーナ が来るよ!」と親が子どもに言う類いのものとして、子どもが悪さをしないように脅すために使われているに過ぎないからだ。

実際に見たという情報はなく、知っているが知らない怪物。
言うなれば正体不明のバケモノで、空想上のモノとして扱われている。

そう言われているものが ……??
いるかどうかも分からないモノに、操られているって??

「嘘を言っでどうする。」

そつりぜに言われても、俄かには信じ難いというのがキールの率直な感想だった。

「 ……まあ、取り合えず進めるぞ。」

訝しそうに顔を曇らせるキールに、リゼは淡々と話し始めた。

「^{イフェルノ}侵奪者、お前たちが言うところの^{ダーナ}邪黒は確かに存在する。そして、この子は^{イフェルノ}侵奪者の媒体として操られていた。さつきまでの動きが人間の、ましてこんな少女に出来るようなものではないだろ？」

「ああ。」

正直なところ、キールはリゼが言っているイフェルノという存在を疑っている。

しかし動きに関しては、途中から視認できない闘いが繰り広げられていて……、

あんな動きは帝国や聖王国の精霊部隊のトップクラス、いやそれさえも凌駕している攻撃だったのは確かだ。

あんな動きを少女自身が出来るとは考えられない。

腕に少女の華奢な肢体を抱えているからこそ、余計にできないと思えた。

少女の華奢すぎる肢体では、長剣を振り回すことも、視認できないほど速く動くことも不可能だ。

そんな暴力的な力に耐えられる身体ではない。

精霊の力を借りれば、信じられないほど速く動けることは確かだが、速く動くためにはそれ相応の身体がないと意味がない。

人の身体は脆く繊細だ。

人以上の力を得るためには、それに耐えられるだけの肉体と精神がなければならぬ。

それを、腕の中の少女は持っている気配は無論、微塵もない。

そう考えると^{ダーナ}邪黒、いやリゼの言う^{イフェルノ}侵奪者というモノは納

得できていないが、何者かに乗っ取られてるといっつのは領ける。

「今はこの子を操っていた 侵奪者^{イフエル} を眠らせて、活動を制限している。」

「この子の中で眠らせている間は何もできないはずだ。我々にも、この子にも……。」

「……でも、それじゃ」

「ああ。何の解決にもならん。」

強烈な 眠り を施したが、 侵奪者^{イフエル} がいつまでも我の 眠りに縛られたままではないだろうからな。

それに、 侵奪者^{イフエル} はこの子の心を支配し、全てを奪うモノだ。今は、眠らせているから何も出来はしないだろうが」

そこまで言ったりゼは、不意に視線をキールから逸らし、少女へと移す。

その視線に、キールの心が不安でざわめいた。

「目醒めれば、またこの少女^こを操り、今よりも悪い状況になるだろう。」

完全に支配されれば、この少女^こは 許されざる者 になる。そうなれば、我はこの少女^こを抹消せざるを得ない。」

リゼの断言に、キールの心は掻き毟られた。

こんなことを聞きたかったわけじゃない！

どうして「知りたくはないか？」と言われたとき、躊躇い、領けなかったのか。

リゼの言葉を受けて、判ってしまった。

無意識のうちに、リゼが少女を殺すかもしれない可能性に気づいていたから。

そして、それをリゼの口からハッキリと聞かされたくはなかったからだ。

だから、すぐに頷けなかったのだ。

けれど　　どこかで、その可能性に気づいていたとしても、事実を述べるだけで、感情を挟まないリゼの言い様は、キールの目から見ると冷た過ぎて、

「それじゃ、どうするんだ!」

キュツと少女の細い身体を抱きしめたキールは、思わずリゼに叫んでいた。

その目には、苛立ち、不安、悲しみに怒りと様々な感情が入り混じっていた。

それはキールが、たかだか数日間の、しかも会話も碌にできなかった少女へ心を砕いている証拠だ。

その様子を見て、リゼは心中で笑った。

これなら、きっと……

「この子を、助けたいか?」

答えなんぞ判り切っているが、それでもリゼはキールに問う。
キールは間髪入れずに、

「当たり前だろ!」

そう答えていた。

その言葉に、今度は満足そうな笑みをリゼは浮かべた。

きつと、この子は助かる。

いや、この子はこいつに救われるはずだ。

楽観的にすぎるかもしれない。

しかし、リゼは挑むように鋭い眼差しを向けるキールに、確かな希望の光を見たと感じていた。

……だから、頼む。

リゼはキールが灯す希望の光が、少女の心に届くように。

少女の心が、キールのこの想いを受け入れてくれるように。

キールの腕の中で眠る少女に静かに祈った。

23話、 侵奪者（イフェルノ） （後書き）

久しぶりに魔術が出たので、解説をしています！

（興味がない方は飛ばして下さい。）

（ちよこつと魔術の解説）

“診眼の法”

身体に異常な箇所がないかを確かめるための術。

使えると適切な処置ができるので、間違った処方せず済むのでとっても便利。

医者・教会関係者は習得すべき術とされている中位の術。

医者に関して言うと、この術が出来ない者は医者として国から認められないので、術が使えない医者はもぐりである。町医者などはこれに当たる場合が多い。

薬師に関して言えば、習得する必要がないので覚える者は少ない。

24話、目指すは光の先

おーい、大丈夫か？

頭に直接響く声に、

「ああ、問題ない。」

キールは暗闇の中、一点の光を目指して進みながら応えた。
キールの目指す場所は遙か遠く、目指すべき場所の光はあまりに小さい。

横は見るなよ。引き込まれたらお終いだからな

小さな光から目を外しそうになった瞬間に降りかかった言葉に、キールは苦笑を零した。
バツが悪くて、ついつい口を尖らせ

「わかってるよ。」

目的地以外には近づかないから。」

と言えば、

それを忘れるなよ

そこは、お前が知らない、お姫の世界なんだからな
と静かな声で念を押された。

「わかってる」

硬い声で応じたキールは、一步一步光へと向かう。その足元は不確かで、泥の中を進んでいるようでもあり、雲の上を歩いているようでもある。

現実ではありえないその不確かさは、まるで夢の中。

いや、あながち間違いじゃないな。

小さな光を目指して歩きながら、キールはふにゃふにゃしたと思えば、急に固くなったり、沈みそうになったりする道に気を取られながら思う。

ここは、あの子の中だからな

キールは今、少女の心象世界、心の中へと入り込んでいた。

『助けたいか?』

そうキールに問いかけたリゼに、キールは間髪いれずに「助けたい!」と応えた。
しかし、どうしたら訳の分からないモノ、イラエルノ 侵奪者 から腕の中にいる少女を助けることができるのかが、キールには全くわからない。だからこそ、真摯な眼差しでリゼを一心に見つめていた。

「その子を助けたいなら、それ相応の覚悟があるが……
それでも良いのか?」

「ああ。」

「命の保障がなくても？」

「ああ。」

「
になっても？」

「ああ。」

ちよつとの躊躇いもなくキールは頷いた。
それは、自分がどうなってもいいからという、自己犠牲的なもので
も、自棄になつてゐるわけでもない。

「勿体振らずに、さつさと話せ！」

イライラと髪をかいてリゼを見る目は剣呑だったが、その剣呑な目
の奥に瞬く強い光に、リゼは知らず笑みを深くし、

「仰せのままに。我が契りし者よ。」

大仰に大きな翼を広げた。

「まさか、こうなるとは思わなかつたけどな……」

闇の中でキールがぼそりと呟けば、

何か言ったか？

即座にリゼの声降ってきた。

すぐに返ってきた声は、いつもより早くて少し調子が狂いそうだ。

「別に。大したことじゃないよ。

他人の心に入れるとは思わなかったって、思ったただだよ。」

ああ。まあ、ヒトはあんまりしないからな。

「しないんじゃないか、出来ないんじゃないか？」

それにその言い方じゃ、精霊が頻繁にしてるみたいじゃないか。」

そんなことは聞いたことがないからなとキールは呆れた声で言うが、リゼの返事は鈍い。

……うっっん、……結構してる ような ……？

語尾を可愛らしく言われたところで、その返答は笑えない。

「おい！どづいつことだ？」

訊く声が掠れていたとしてもしょうがない。

あゝ……まあ、気にするな。

我は、お前に干渉してないし、他のにもさせてないから安心しろ。

「それって……余計気になるだろうが!!」

自分がされていないから、じゃー安心だな。なんて言える訳がないとキールは憤慨するが、リゼは気にするなとしか言わず、それ以上の追及を拒んだ。

それよりもだ。そっちの様子はどうなんだ？

キールは、リゼに話の矛先を変えられて不機嫌さを露わにするが、そうしたところでリゼには見えないので全く持って意味がない。

変化はないか？

「変わらないよ。光が少し大きく見えるぐらいだ。」

態度で不機嫌さが伝わらないならせめて声で伝えようと、ぶっきらぼうに答えるキールだが、

そうか

リゼはそんなキールの機嫌など構おうとは一切しない。

それが、余計キールを不機嫌にさせるが、淡々と返されてしまうと、自分の態度が子供じみたものに思えてきて……

胸中で、さっきの話はいつか必ず聞きだしてやると呟き、キールは「はあ〜」と深く息を吐いて平常心を取り戻す。

そろそろ覚悟しておけ

その変化を感じ取ったかのように、リゼも真面目な調子に戻った。

見つけてくるのは、1つ。
それが見つかったら、すぐに呼べ。

リゼの真剣な声に、キールはただ頷いた。

迅速に見つけ出せ。長居をすれば、それだけリスクが増す。

リゼの声が鋭くキールへと注がれる。

もし、呑み込まれそうになったら……

そのときは、この子を

「わかってる。」

キールはリゼの言葉を、その先を聞きたくないとはかりに遮った。

「わかってる。」

すぐに見つけて、すぐ帰ってくるぞ。」

それで問題ないだろう？ と努めて明るい声で返す。

その表情は、怖いぐらいに真剣そのもので、キールの固い決意が見えるようだった。

……気をつけるよ。

キールの顔なぞ見えないはずなのに、リゼの声はキールの決意を見守り、それを支えようとしているかのように温かった。

その声の温かさにキールは小さく笑みを零し、光に向かう。

光は小さな小さな点から、拳大の大きさにまでなっていた。

キールは気を引き締めて、その光に向かう。
まだまだ目的地までは遠いが、気を抜くことはできないと不確かな
道なき道を進む足を大きく前へ動かし、

「 つなに!! 」

動かした足が眩い光に囚われ、眼前が真っ白になる。

目を逸らしていなかったはずなのに!!

とキールは、突然の事態に狼狽した。

暗闇を歩き続けていた目は、突然の明るさに痛みを覚え、進み続け
ていた足がその歩みを止めた。

目の痛みに呻くキールが、やっとのことで目を開けると…

「 …………… え〜つと??? 」

そこは木漏れ日が差す、青々とした森の中だった。

25話、森の中の一軒家

「進めば良いのか？」

燦々と輝く太陽の恵みを、その全身を伸ばして享受している森の木々に挟まれ、キールは呆然と立ち尽くしていたが、とりあえず歩くかと足を進める。

さつきまで暗闇の中、不確かな足元に苦労していただけに、しっかりとした地面の硬さはキールを安堵させた。

突然、暗闇から燦々と輝く明るい場所に出たことに奇妙な感じがしたが、キールはそのことについては考えないことにした。きつと、考えたところでどうしようもないのだ。

今は他人の心の中に入り込んでいるのだし、自分の心の中ですらどうなっているものかわかりはしないのだから。

キールは歩き慣れた感触を確かめつつ、木々の間にある細い道を見つけて歩き出した。

その道は獣道ではなく、細くはあるが毎日人が通っている気配があり、歩きやすいように整えられていた。

キールの目には、そこだけが白く浮かび、掃き清められた美しい道に見えた。

ここを進めばいいはずだ。

何の根拠もないが、妙な確信を得てキールは歩き出した。

しばらくすると、森の木立が切れ、大きな光がキールを包んだ。

その眩しさに目を瞑ったキールが目を開けると、眼前には実に穏やかな風景が広がっていた。

森の中にある、小さな一軒家。

その一軒家の周りは、実に気持ちの良い空気に包まれていた。キールが裏へまわれば、一家が暮らすには申し分のない畑があり、家畜は自由気ままに闊歩していた。

畑の実りは豊かで、これから収穫を迎える野菜が瑞々しい輝きを放っている。

絵に描いたような、暖かな平穏がそこにはあった。

いいところだな。

キールはほうと感嘆の声をあげ、その情景の中へと入り込む。すると、人の声らしきものが聞こえてきた。

どこから？とキールが探すと、すぐにわかった。

実り豊かな畑の側の大樹に、2人の男女と、キャツキャと笑い声を元気に上げる子どもの姿が見えた。

子どもが笑えば、2人も顔に優しい微笑を浮かべ、美味しそうに食事をしている。

それは親子3人の慎ましやかな幸福の図だった。

キールはそこで、どうしようかと立ち止まったが、

『お前は過去へと行くことになるが、お前自身がそこにいるわけではない。ただ、記憶を垣間見るだけだ。』

ここに来る前、リゼがそんなことを言っていたなと思い出し、気付かれないかとそのまま近づいていくことにした。

ただし、念のため極力姿は見せないようにと、気配を殺して近づく。そんな自分の慎重さに、うんざりすると思いながら。

近づくにつれて、3人の会話は明瞭になり、その顔立ちもハッキリ

してきた。

男はブラウンの髪で、顔立ちはまあまあ良いかなという程度だ。しかし、女の方は息を飲む美しさだった。

陽光に煌めく青銀色の髪は艶やかで、白磁の肌は滑らか。華奢な肢体は折れてしまいそうな、儂げな印象を抱かせるものなのに、彼女を取り巻く清らかな風と、明るい光を宿す銀色の瞳が、凜とした強さと包み込むような包容力を感じさせる。

その強烈な存在感は、キールの目を一瞬で引きつけた。

しばらく呆然とバカみたいに女を見ていたキールは、

「それじゃ、またがんばりますか。」

と男が伸びをして立ち上がったところで我に返った。

「ふふつ。×××ちゃん。今日は、×××ちゃんが大好きな、ナチの実をパパがた×××さん収穫してくれるって！」

「ほんと??？」

「うん。だから、パパにがんばって〜てここで、二人で応援しようね。」

「おいおい、俺一人でさせる気がよ?」

「パパが、た×××さん、がんばってくれたら、カツコイイよね?」

「うん! パパ、がんばって」

「まかせとけ!!--」

キールが見つめる中、交わされる3人の会話。

肝心な部分には、ノイズがかかりキールには聞こえない。

それに舌打ちしそうになるが、会話に耳を澄まして何とか聞けないかと息を詰める。

「×××、そこでママと一緒にパパの頑張りをみててな!!」

しかし、やはり知りたい部分はわからなかった。

顔を顰めるキールの前では、子どもの声援に気を良くした男が満面の笑みを向け、くしゃくしゃと、その子の髪を撫でまわし、それが嬉しかったのか、その子はまたキャツキャと声をあげ、まんまと男にだけ仕事を押し付けた女は、楽しげな笑みを浮かべていた。

その男女と子どもが家族なのは一目瞭然で、理想を絵に描いたような仲睦まじさで……

キールは顰めていた顔に笑みを浮かべたが、同時に切なくて胸が痛くなった。

あんなに幸せそうなのに……何故……

キールは、女の膝に乗り上げて男へと手を振る幼い女の子を見つめた。

3才ぐらいの女の子は、元気いっぱい、青銀色の髪と銀色の瞳を持っている。

それは女の持つ神秘的な色と同じで、ひと目で親子とわかる色をしているのだが、キールはその女の子の持つ色を素直に受け入れられなかった。

白髪、銀目。人形の表情を持つ、やせ細った子ども。

キールが知る少女の特徴はこれ。

元気に笑う女の子の健康的な姿や、活動的な目の輝き。キラキラと陽光を弾く青銀色の髪は別人すぎて……キールを困惑させ、訳のわからない焦りを起こす。

何があっただんだ？

この幸せをぶち壊し、少女を墮としたのは何なのか？

キールは幸福的一幕をじっと見つめ、耳を澄ます。

『この少女は、自分の名を忘れている。』

我がこの子の名を探れぬのは、そのせいだと思う。』

『だから、お前にこの子の名を見つけてもらいたい。』

キールはリゼの言葉を反芻する。

『この子には、“名”がある。“祝福された名”がな。』

リゼの言葉を思い返し、キールは畑仕事を始めた父親と、それに声援を送る母娘おやこの温かな様子に頷く。

『我がお前を送れるのは、この子が“祝福された名”を呼ばれた場。』

ノイズが走る箇所こそが、それだとキールは益々耳を澄ませる。

『そして、“最後”に呼ばれた場にしか送れない。』

温かで、柔らかなぬくもりで満たされた空気。

これが、最後？

幸福の日差しの中の親子を前にすると、これが最後の日だとは思えない。

明日も、明後日も、一カ月後も一年後も続きそうな風景。

これが???

キールは、リゼの言葉を反芻するが、到底“最後”の場所だとは思えなかった。

“最後の場”なんかじゃないんじゃないか？

心の中なんだから、リゼも間違うこともあるのでは？と浮かんだ考えに落ち着く。

とにかく、名前だ、なまえ。

キールは居心地の良い空気の中、肩の力を抜いて会話に集中する。相変わらず名前を呼んでいると思われる箇所は風が遮るようにノイズが走り、掴むことができない。それでも、根気強く聴けば小やかながらノイズが薄れた。

あと少し

あと少しでノイズが剥がれそうになったその時、

ズンツ！！！！

強い振動が大気を震わせ、親子を襲う。

実り豊かな畑は一瞬で無残な姿になり、そこで作業をしていたはずの男の姿はない。

ぐしゃっ！！

何かが落ちた音の方へと首を動かせば、地面に叩きつけられた、裂傷だらけの男が離れた場所にある家の近くで倒れていた。

呻く声が聞こえることで、生きていることはわかるが、それだけ。

深い裂傷から、赤い血がだらだらと流れ、男の周りの草は緑から赤へと変わるうっとしていた。

26話、荒廃

さっきまでの長閑な空気は一変し、殺伐とした気配が辺りを支配する。

倒れ臥した男に縋りつく女の背後には、甲冑で身を固めた男たちがズラリと並んでいた。

「……なんだこれ？」

キールは呆然と見ていた。

男を背後に庇った女に向け、甲冑たちは引っ切り無しに攻撃を仕掛けていく。

ある者は槍を手に、またある者は剣を手に女へと切りかかるが、全ての刃は女へは届かなかった。

いつの間にも術を紡いでいたのか、とキールは目を見張る。

女の眼前には、背後の男を庇うように大きく半円を描く、虹色の魔術障壁が張られていた。

全ての凶刃を魔術障壁で受け止めた女へ、今度は攻撃魔術が次々と浴びせられた。

ギリリと金属が陽光を弾き、炎が舞い上がり、風が砂塵を起こす。

障壁に槍や剣がめり込み、人が吹き飛ばされ宙を舞う。

耳障りな金属の擦れる音と、重たい何かが叩きつけられる音が鈍く耳朶を叩く。

途切れることのない、凶刃と攻勢魔術。

さっきまでの平穏が嘘だったかのような、泡沫の夢であったかのような。

それは魔女と甲冑との戦でしかなかった。

豊かな実りなぞ、どこにあったのだろうか？

踏み荒らされ、蹴散らされた畑は既に畑ではなかった。

ただの地面。

更地でしかない。

庭を闊歩していた家畜は、いつの間に肉塊に成り果てたのだろうか？
家畜の臓物が撒き散らされた地面は、真っ赤になった途端に土砂を
被って家畜がいた形跡すら残してはいない。

女の叫びも、甲冑の怒号も激しい攻防に遮られ、キールには何がな
んだかわからない。

突然のことに付いていけないというのもあるが、何故かさっきまで
明瞭だった視界が徐々に暗くなってきたためでもある。

先程までの色鮮やかな光景が、急速に色を失っている。

比喻ではなく、キールの目にはそう見えた。

舞い上がる土、剣のキラリとした鈍い光も色を失い、ひどく見えづ
らい。

唸る風音や、破砕音、衝撃音も遠い。

現実感のない夢の中の出来事のような。

ひどく曖昧な感じがして、キールは頭を振る。

色を失いつつある世界はひどく遠く感じられ、キールは自分が追い
出されつつあるような感覚に陥った。

それは半ば正解であったのかもしれない。

『最後の瞬間』

不意に、リゼの声が聞こえた気がした。

「……最後」

キールの眩きは轟音に掻き消され、キールの耳にさえ届かない。呆然と立ち尽くすキールの視界は、益々色を失いつつあり……

「……？」

いや、一点だけが鮮やかに色を持っていた。青銀色の煌きが、突風に煽られ靡いている。ぶるぶると身体を小刻みに揺らし、涙を零す幼子。

何故さつきまで目を離していたのか？

暴虐の風に煽られ、熱波に侵された大地の端に、1人幼女が涙を流して泣いていた。

幼児の癩癩を起こしたような涙ではなく、しゃくりあげもせず泣く姿があまりにも哀れだった。

恐怖に身を竦ませ、目を瞑ることもできずにその子は泣いていた。

「……ママ、ばば」

舌足らずな子どものか細い声が風に乗る。

あまりにも、あまりにも小さな囁き。

こんな怒号と轟音の中、聞こえるはずのない声がキールの耳に届き

……

その囁きは

「「！」「」

女が我に返ったように振り向き、甲冑集団のリーダーらしき者も吃驚して振り向いた。

二人が同じように振り向き、二人は正反対の表情を浮かべる。女は蒼白、男は愉悦に顔を歪めた。

男の右手が掲げられる。

その振り下ろされる先には、

「\$#&mp;:;!?!?!」

女の絶叫が空気を裂く。

幼女に迫る真つ赤な炎。

塵も残さぬ苛烈な炎が、あつという間に幼女を呑み込もうとその顎^{あぎと}を開く。

ヤメロ!!?!?!

咄嗟に叫んで駆け出したキールだが、

「なっ?!?!」

近づくことは出来なかった。

「そんな……」

イラついて足元を見れば、キールの足元が闇に呑み込まれ、それ以上近づくことも離れることも出来ないように、その場に縫いとめていた。

力を入れたところでその足は動くことはなく、手が泳いでバランス

を崩して倒れそうになってしまふ。
崩れた態勢を、背筋で何とか立て直したキールは、そのまま硬直してしまった。

長い青銀色の髪が地面に広がっている。

陶然として見惚れた顔は地を舐め、神秘的な瞳は伏せられて見えな
い。

そこに倒れ臥すのは、さっきまで男を背後に守っていた女。

甲冑たちに一步も引かずに立ちほだかっていた女。

幼女からキールよりも遥かに離れた場所にいた女が、何故か幼女の
側にいた。

そして、倒れていた。

「……まま？」

何がなんだか分からない、といった顔で幼女が女の手に縋る。

女が呼びかけに応えて微かに目を開き、起き上がるうとするが、そ
の身体は起き上がることはなかった。

ただ、幼女へと顔を向け、静かに口が開く。

「
」

吐息に乗せた呟きが、確かにキールの耳へと届けられ

次の瞬間、キールは真っ暗闇へと引きずり込まれ、

意識を失った。

27話、その名を呼ばない理由

横たわる少女の手を握りしめ、目を瞑っているキール。

微動だにせずに少女の横で、ただじつと少女の手を自分の両手で包み込んでいる。

端から見れば、一心に祈りを捧げているかに見えるが

……そうではない。ということを知っている。

キールが祈りを捧げるように少女の手を握りしめているのには、当然訳がある。

人が他人の心の中に入るのは、それほど容易なことではない。

それなりの手順と、それなりのことをしなければならぬ。

だからこそこの態勢だ。この態勢が一番無理なく他人の中に入るポーズなのだ。

自分ならこんな疲れるポーズで、ジツツツとしていなくちゃならぬなんてことは、全くないんだけどな。とりぜは見てるだけで疲れるといった感じて溜息をついた。

そんな疲れたようにリゼが見やるのは、淡い燐光を放つ円陣。

それは少女を中心に広がっており、キールもまたその燐光の中心部にいた。

これも他人の心に入る為の手順の一つだ。

それは少女の眠りを守り、少女の中へと精神を飛ばしたキールを守る結果。

ただし、完璧に、絶対的に守ってくれるわけではない。

円陣の結界の外側は強度はあるが、外側から強い衝撃、それこそ戦略級攻勢魔術ぐらいの衝撃でも与えれば破られるし、内側からならちよつと衝撃を与えるだけで壊れてしまう。

どれくだいの衝撃かというと、それこそ今まさに、ぐらぐらっとキールの上体が揺れ、

バタン！

と、キールが倒れただけで、燐光が点滅して 消え て……………？

「おい、どうした！」

静かに見守っていたリゼは、燐光放つ円陣に慌てて近寄った。

結界は、内側からの衝撃に弱い。だからこそ、それを前提に強制的に掛かる術式を編み込んでいる。

それは態勢を維持するための術式で、結界を張っている間はその態勢を強制的に取らせ続ける、ある意味とっても便利で、とっても嫌な機能が付いていた。

それなのに、だ。

結界の燐光は瞬く間に消え失せ、そこにはキールが少女の隣でパタリと倒れていた。

結界に問題があったか？ と一瞬掠めた考えに、リゼは首を横に振る。

結界に問題があるなどということがあるはずがない。と断言できた。だったら…………とキールを覗き込むと、蒼褪めた顔がそこにあっただ。

「しっかりしろー!!」

取り繕うように声をかけても、キールはびくりとも反応しない。

代りに、少女の気配がつつすらと変わった。

黒紫の気配がゆらりと少女の内側から出ようとしている。

咄嗟に、

夜の帳に眠れ

と眠りを強制させたが……

これがいつまで持つかと、不安は隠せない。

もし……

とその先のことを考えそうになって、リゼはピタリと思考を止めた。
今はそんなことよりも、主のことが先決だ。

自分の主が、契約主が意識を手放し、震えている。

これを先に何とかせねば拙い。

恐らく、“弾かれた”のではないかと思う。

少女にか、^{イラエル}侵奪者か。異質なモノを吐き出すように、異質なモノを拒絶するように。

主は弾かれたのではないか、と判断するしかなかった。

そうでなければ、行きと同様、帰りもリゼが誘導する手筈になっていたのだ！！

こうなってしまうては、リゼに出来ることは、一つしかなかった。

如何に万能な精霊であるリゼであろうとも、今はこれしかできない。

リゼは、必死に意識のないキールの内部へと、ひたすらに呼びかけた。

主の名を。

偽りのない、彼の名を呼ぶ。

“キール”などという名ではなく、彼の名を。
正しい名を呼ぶ。

主は捨てたと、これからは使つことがない名だと……もう二度と使

わないから呼ぶなと言ったけれど。
過去も現在も、これから先の未来も、リゼはその名でしか主を呼ばない。

否、その名でしか呼べない。

だから、普段は主を呼べない。

それが、少し不便で、切ないと思う。だが、彼が己の名を許せる日までは呼ぶまいとも思っていた。

けれど……

今は許してもらおう。

リゼは、久方ぶりに呼ぶ名を必死に主へと送る。

その声に、心配と共に久方ぶりに呼べたことへの喜びを含ませて。

28話、呼び声

落ちていく

落ちていく

オチ　　テ　　イ

深い闇に引き込まれ、キールは上も下もわからず、ただ落ちていた。どこまでも続く奈落に意識を保てない。

微かな意識はあるものの、朦朧とした思考では何も考えることはできず、ただ闇の奥深くへと墮ちようとしていた。

……　　ゼル　　……

そこに、何かが耳を掠めた。

懐かしい風の気配に、朦朧としていた意識がほんの少し浮上する。

レイ　　…

耳に届く声が、遠い。

誰かに呼ばれている。

けれど、それは誰のことを呼んでいるのか。

レイル　　……

だが、確かに聞こえる声に、

「　　んっっ　　」

キールは微かに呻き、やつと曖昧な意識を取り戻した。
そこに、

レイゼ !!!!!

妙に切迫した声が届いた。

普段のアイツらしくないなど、闇に堕ちていきながら笑ってしまった。

その気配に気づいたのか、

『早く、呼べ!』

彼の怒鳴り声が耳に痛い。

わかったよと呟いた声は聞こえただろうか？

天空を駆ける孤高なる者（リジューリア・エル・ノルセスカ）

何も考えることができない中、自然と誓約の名が吐息から零れ落ちた。
それに応えたのは、背中から突き揚げる強烈な風と小さな溜息だった。

レイゼはじつとキールの顔を見つめていた。

その顔は蒼白で、血の気がない。

呼びかけに、内で応じたキールだが、現実ではまだピクリとも動き

はしていなかった。

完全に意識を失っているキールを、リゼはただ心配そうに見つめていた。

早く目を覚ませ、と焦れたようにもう一度呼ぼうとした
その時、

「何で？」

顔面蒼白で倒れていたキールの唇が、微かに動いた。

「どろした？」

ピクピクと瞼を痙攣させ、ゆっくりと目を開けるキールを見つめながら、リゼは安堵しつつも気遣わし気に聞くが、

「……何で、そんなに頭が硬いんだ？」

開口一番、青白い顔で心底不思議そうに聞いてくるキールに、リゼはキョトンと目を瞬かせた。

はあ？ と語尾を上げて聞き返したのは、むしろ当然だろう。息を吐くのもやっとの人間の、意味不明な言動。

まだ目が覚めてないんだろうか？ それとも、目を開けて寝言をほざいているんだろうかと思うのは、むしろ良心的だったと思う。

「いや、だから〜」

どうして、リゼはそんなに頭が硬いのかなって思ったただけだけど……」

繰り返し言われ、益々訳が分からないとリゼは困惑を顔に滲ませた。

「キール って呼べばいいのに。
突然呼ばれたってわかんないよ。」

……………もうずっと呼ばれてないんだから。」

キールはぼんやりした目をしたまま、そう続けた。

「久し振りすぎて、誰が呼ばれてるのかわかんなかったんだから。」

呂律が回り切っていない状態でキールは滔々と言う。

そのセリフに何と答えて言いやら

リゼはもう、はぁ〜と溜息をつくことしかできなかった。

自分がこんなにも必死に呼びかけていたというのに！

こんなに心配していたというのに！

開口一番に言うセリフがそれか！！！！

と怒鳴りつけたい気もした。もう何だかバカバカしくなってしまうのだ。

「昔っから、リゼは固すぎるんだよ。」

深い溜息を付いているリゼに、キールはまたも言う。

もうそれには、

「お前ほど固くはない。」

無然と返して、何言ってるんだ、お前に言われたくないよと反論するキールに、

「そんなことより、“名”は？」

と問いたただすことで、不毛な会話を打ち切った。

それにキールは、口元をへの字にしてふてくされた後、ゆっくりと体を起こした。

その顔はまだ青白いが、さっきよりは赤味がさしていた。

そのことに、内心でリゼは安堵するが、同時にキールの顔に浮かんだ苦しげな顔が気になった。

「ばつちり、掴んだよ。」

そう口にしたキールの表情は、暗く。すぐに顔を俯けた。

「どうかしたか？」

その様子に、リゼはキールの体調が思いのほか良くないのかと慌てたのだが、一瞬泣きそうな眼をしたキールは、傍らの少女へと視線を向けた。

「この子……幸せそうだったよ」

唐突に話し始めたキールに、うん？ とリゼは首を傾げた。

「ほんとに、楽しそうだった。」

優しくそうな父親がいて、すっごい美人の母親がいて……温かかった。」

そっと伸びたキールの手が、少女の頬を撫で、優しく髪を梳く。

「……………何で、あんな」

続きを言おうとして声を詰まらせるキールに、リゼは「ああ」と吐

息を零した。

きっと“何か”があつたのだろう。

そして、その“何か”は悲惨なものだったのだろう。とわかったからだ。

キールが言っているように、幸せな場所が崩れ去るような“何か”があつたのだろう。

聞かなくても、キールの顔を見れば判る。

気遣わし気に少女に触れるキールに、好きなようにさせたいとも思うが

「“名”を呼べ」

リゼは新たな円陣、今度は守りの結界ではなく、ただ呼び戻すことを強めるための術を組み、キールを促す。

その呼びかけに、キールはこくりと頷き、呼ぶ。

頬を撫で、守ってあげたいと願いながら呼びかける。

痛ましさや慈愛を込めて、帰っておいでと彼女の名を。

彼女が忘れてしまった名を、ゆっくりと紡いだ。

29話、闇と少女とやさしい腕と

深い、深い闇の中、少女はゆっくりと目を覚まして身体を揺らした。目覚めたくなかったのにと、知らず少女は溜息を零した。

優しく、甘く、耳元に囁かれる声。

外を一切感じさせず、全てを遮断してくれる闇に抱かれて微睡むのは、少女にとってとても心地良かった。

誰にも邪魔をされず、一人になれるから。

誰も私の視界に入らないから。

怖いことは何もないから。

恐いモノが、2本足で歩く“人”が見えない闇。

その闇は、少女をひどく安心させていたのに……

闇が薄くなっていた。

いつの間にか甘く囁いてくれていた闇が、優しい声が少女には聞こえなくなっていた。

安堵させてくれた声が、聴こえない。

包んでいた闇が、常にじわじわと迫り、真綿を包むように身体を拘束していた闇が、薄れていく。

そして、少女はその光景を目にした。

どこだろう？

明るい光が注ぐ木陰。

目に飛び込んできた緑は、生き生きとしている。

畑に実っているあれは……何だろう？

アレは、甘くておいしくて……知らないのに、どうしてそんな風に

思っただろう？

少女がぼんやりしていると、温かい腕が回された。知らない誰かに、腕を回されている。

恐いはずなのに………何故だろう？

とっても嬉しい。

とっても安心する。

ここが一番好きで、ここが一番嬉しい場所だと知っている。

どうして？

少女はぼんやりとしたまま、その腕を振り払うこともできずに受け入れていた。

その温かさは、ただ懐かしく、奇妙な気持ちにさせた。

誰？

これは、誰？

知っているような気がする。けれど………わからない。

少女には、その人が誰なのか分からなかった。

でも、それでもいい。その腕に、その人に、自分の全てをあずけてもいい。そう思ってしまった。

それは、少女にとって驚くべきことだった。

どれぐらいだったのだろうか？

少女の体が、寒さにぶるりと震えた。

さっきまで柔らかい腕の中に抱かれていたのに。

いつの間にか、その腕は少女から離れていた。

安心しきっていた少女は、胸がキュッと詰まるような息苦しさを感

じた。

それが寂しさからくる心細さだとは分からずに、戸惑いが顔に覗く。そんな少女の様子に、目の前に立っているその人は、切ない瞳を向け、

『ごめんね』

柔らかい声音が少女に向けられた。その優しい声を、

知らない？

違う、知ってる？

少女は困惑してその人を見つめた。

『ごめんね 愛しい子』

美しい瞳から、真珠のような涙が零れている。

『一人にして ごめんね』

綺麗な人だと思った。

『これからは あの人たちが いてくれるわ』

儂い人だと思った。

『あの人たちなら あなたを一人にはしないわ』

でも、強い人なのだとも思った。

『 さあ、お行きなさい 愛おしい子 』

笑みを向けるその人は、少女に光の道を示していた。
その人が指差す方向には、一筋の光と一陣の清涼な風が心地よく吹いていた。

『 』

その風の中から、声が聴こえる。

力強い、男の人の声。

優しさ、労わりを含んだ声。

その声を、少女は知っていた。

あのひとの声だ。

『 さあ、お行きなさい 』

その人は、早く行きなさいと再度促した。

その声は、さっきの声よりもよっぽど力強くて、なぜか逆らえずに足が一步光の道へと向かってしまう。

それに、少女は泣きそうに顔を歪めた。

『 泣き虫さんね 』

苦笑するその人に、少女はどうしてこんなに胸が苦しくなるのか、
どうして離れたくないと思うのかも分からず、ますます顔を歪めた。

『 大丈夫よ 安心してお行きなさい 』

行きたくない！

そう、思っているのに、どうして??

光の道に踏み出した足は、少女の意志とは関係なくその人との距離を隔てていく。

光の道の先からは、力強い声が響いていた。

その声に取りられると、その人との距離が更に隔たってしまった。

いや!!

声を張り上げたが、その人はただ微笑むばかりで応えてはくれなかった。

少女の傍に来て、その優しい腕で抱きしめてはくれなかった。

行かないで!!

離れていくのは少女の方だというのに、少女はその人こそが離れていくのだと思った。

置いていかないでほしい。

傍にいて笑ってほしい。

笑って腕に抱きしめてほしい。

行かないで……置いていかないで……

震える声で少女は願ったが、その人は動いてはくれなかった。あるいは動けなかったのか。

『ユリ……』

光の道からはさつきよりも大きな声がする。
その声が、音になって少女の耳へと届けられた。
しかし、少女の意識はまだ音がする方へと向けられず、その音が何を示しているのか判らなかった。

『 もう ここにいては いけないわ
あなたは 行かなくては だめなの 』

もう、その人の顔は見えなかった。
距離があり過ぎて、もう分からない。
ただ、ちよつと怒った顔で、でも笑顔を向けてくれているような気がした。

『 そして 哀れな子に あの歌を 唄ってあげて 』

『 『 ユリア 』 』

その人の優しい声と、光の道から聴こえてくる温かい声が重なり、

清涼な風が、少女の体を持ち上げ、
少女の体は、意図も容易く風にさらわれ、一気に光の道のその先へと連れ去られてしまった。

その光景に、その人は微笑み、静かに涙を流した。

『 さようなら ユリア 』

青銀色の髪がゆっくりと闇に溶け込み、

『 どうか 幸せになって 』

ゆっくりとその姿は薄れ、

『 どうか 幸せに 』

その姿は、完全に消えてしまった。

29話 闇と少女とやさしい腕と（後書き）

やっと名前が出せました!!!

長かった.....

30話、立ち昇る黒紫煙と影と少女

「ユリア」

「ユリア。戻っておいで。」

白髪の少女、ユリアの手を握り締めて呼びかけ続けていたキールの手に、微かな振動が伝わった。

ユリアの指先が微かに動き、キールの手にとつと触れた。

それに気づき、キールは尚一層少女の名前をそつと、優しく呼びかけた。

その呼び声に応えるようにひくひくつとユリアが瞼を痙攣させ……

「っ離れる!!!」

切羽詰ったリゼの声に驚いて手を離すと、ユリアから黒紫煙がゆらりと立ち上った。

慌てて後ろに跳び退ったキールの眼前で、ユリアから上がる黒紫煙が、瞬く間にユリアを包み込み完全に覆い尽くしてく。

「ユリア!!!」

先ほどまであった温かな思いが一瞬で消し去られていく。

焦燥感から少女の名を繰り返すキールの声を嫌がるように、黒紫煙が蠢く。

それはまるで、キールの言葉を遮ろうとしているかのようだった。

「くそっ!!!」

ギョツと拳を握りしめ、キールはどうすればいいのかと唸った。離れた小さな手のぬくもりを失いたくない。すぐにでもこの手で包んであげたい。

そう思うが、リゼの風に抑制されて動くことはできなかった。

黒紫煙はユリアの体に纏わりつきながら、徐々に肥大していく。

魔法陣の外で固唾をのんで見守るしかないキールの前で、ソレは肥大を続け、ついには魔法陣の中がソレで充満してしまった。

ユリアの姿はその片鱗すら見えない。しかし、

「……………うう……………」

声？

微かな、風に攫われそうな微かな声が聞こえた気がした。そして、

「……………!」

黒紫煙が急速に濃縮されていく。

それは、つい先刻リゼがイフエル侵奪者と呼んだアイツが、大剣を振りかざす前に見た現象そのものだった。

それを見てとり、キールの顔が歪む。

痛みを堪え、それでも尚痛む胸の内が顔に現われていた。

「もう……………ダメなのか？」

絶望的な呟きがキールの唇からこぼれた。

しかし、

「……………」

その絶望の眩きをリゼは聴こえていないかのように、じつと魔法陣の中を見つめていた。
そして、

「…………… やったぞ！」

興奮した眩きがりゼの口から発せられた。
その後が続けて、「まさかこんなことが」とブツブツと独り語散るリゼに、キールは何事かと目を向けた。
驚いたようにリゼは魔法陣をじつと見ている。
その様子にキールは訝しい眼差しを送る。

なぜ？

どうしてそんな風に見ているのか？
リゼは、明らかに喜んでいた。

その意味が分からずに、キールは舌打ちを一つしてリゼと同じ場所へと目を向けた。
そこには、やはり先ほどと同じように濃縮した黒紫煙がユリアの手元に……

「えっ！！」

えええっ！！！

どういふこと???

何だあれ？と眩きながら、キールは驚きで目を丸くした。

そこには黒紫煙が、人型と思わしき影で佇んでいた。ぼんやりとした輪郭に黒紫を纏った、まさしく影としか言えないモノがそこにいた。

ソイツはユリアの隣でゆらゆらと揺れ、今まさにその手にユリアを掴もうと薄っぺらな手を伸ばした。

「『風よ、唸れ』……！」

ハツと目を睜ったキールは咄嗟に術を紡ぎ、放たれた風の衝撃波が一直線に影へと迫る。

風の衝撃波は瞬きの間に影へと到達するが、簡略化した弊害で威力が弱い。

「弱すぎたか」と直後にキールは焦ったが……ドントという鈍い音がしたかと思ったら、影が魔法陣の端へところどころと転がっていくのが目に映った。

その様子にキールは目を丸くし、リゼは口角が上げた。

ごろごろと転がり魔法陣にぶつかって止まったソイツは、むくりと立ち上がる。

衝撃で飛ばされたものの、その身体には何の痛手も負ってはいないようだ。

ユリアと離れたことには安堵するが、やはり弱かったかとキールは自分の方へと意識を向けてきたソイツと対峙する。

そこで、違和感を感じた。

リゼと闘っていたときと雰囲気の違いが違くないか？

覇気がないとも言えいいのだろうか。

ゆらゆらと揺れる影は意志のない人形のように、不気味なだけだっ

た。

ソイツの変容はキールに戸惑いを抱かせたが、キールは頭を振って戸惑いを捨てた。

弱っているならそれで構わない、寧ろ好都合というものだ。

瞬時に頭を切り替えたキールは、気合を新たに身構えるのだった。

一方、リゼは素早く魔法陣の中へと滑りこんだ。

今の敵の様子からキールに任せる判断を下し、自身はユリアの元へと一直線に向かう。

偏ひとへにユリアの中を覗きこむためだ。

未だ目覚めていないユリアを確かめ、一呼吸の内に慎重に、しかし素早くユリアの内部を見つめた。

「 なんとということだ……………」

凄^ひい！！と思わず呟いた自身の声を耳にして、笑ってしまう。

無い。

“ ない ” のだ。

あれほどまでに少女を蝕んでいたモノが、全く “ ない ” 。
侵奪者イフェルノの痕跡が見事なまでに、なくなっていた。

「 あれが、あんな風になるとは……………」

そして転じる目に映る光景にまたも笑ってしまった。

これまで侵奪者イフェルノには数多く遭遇し、討伐してきた。

それこそ悠久の時の流れの中、幾度も殲滅してきた。

動物や魔獣、人や植物に寄生して世界へ “ 狂気 ” と “ 呪い ” を振り

まく、^{イフエルノ}侵奪者を。

その何れもを思い出し、こんなことがあったらどうかと自問してみた。

その結果は容易。

答えは、『否』。

そもそも^{イフエルノ}侵奪者に侵された瞬間に寄生された肉体は奪われ、宿主の精神は侵される。

既に奪われた肉体を取り戻す術はなく、精神もまた然り。

故に「^{イフエルノ}侵奪者に寄生された」という事実の発覚と共に討伐対象になり、そのまま葬られてきたのだ。これまでは、全て

それが、どうだ？

目の前には^{イフエルノ}侵奪者がキールと睨み合っている。

ゆらゆらと揺れる影として。

こんなことがあっていいのか、神々よ。

リゼは確かな鼓動を打ち、^{イフエルノ}侵奪者から解放された少女を信じられぬ
い者を見るように見て、笑った。

温かな慈愛をその瞳に湛え、喜びの笑みを浮かべて。

31話、炎と風と目覚めの時

風だ。

肌に強い風が当たっている。

何を言っているの？

風に紛れて聞き取り難い声。

何を言っているのか、唸る声の意図が掴めず、ただ思っただけが風に乗って届いている。

ねえ、何？

悲しい声。

哀しい叫び。

何を言っているのかはわからない。けれど、

胸？ それとも心？

キュツと絞められて、「痛い」と思った。
その痛みに驚き、

「
ねえ？」

リゼはキールと影の攻防を追いかけていた。
黒紫煙の影は、ひよろひよろとしていながら見た目よりは貧弱ではなかった。

キールが放つ魔術に体を撃たれてはいるが、傷を負っているようには見えない。

「『風よ、我が手に集いて、我が希のぞみのままに在れ』」

キールの服の裾が強風にはためき、不可視の刃がその手に握られる。術式の二重詠唱を呼吸するように成したキールは、一瞬で影へと迫り胸へと切りかかるが、その不可視の刃は影の体にのめり込むと、急速に力を失った。

そして、影は徐おもむろに腕を揮う。

「ブンツ」と空気を振動させ、振るわれた黒紫炎を纏った腕の直線状にはキールの頭があった。

キールは大きく後ろへと飛んで避けたが、それでも距離が足りない。黒紫炎は地面をガリガリと抉って、キールへと殺到する。

「『水よ、加護を』！』」

咄嗟に両手を掲げ、眼前に水の盾を形成。

術式を簡略化した水の盾は、黒紫炎が掠っただけで蒸発したが、その一瞬がキールに回避の時間を稼がせ、横にずらした体には傷を負うことはなかった。

しかし、続けざまに影はぶんぶんと腕を揮った。その動きは力強くも、鋭くも無いにも関わらず、その一振り一振りから放たれる黒紫炎の塊は岩ほども大きく、容赦なくキールへと襲いかかるうとしていた。

ヤバイな

と背筋にツーンと冷たい汗が垂れるが、

……………でも、無理じゃない！！

迫りくる岩石の塊のような炎の飛礫は、幸い眼で追えないほどの速さではなかった。

これならつと新たに風の刃を構えて、切り伏せ、切り払い、あるいは回避してキールは飛礫攻撃を払い続け、攻撃のタイミングを図った。

それらをの攻防を、リゼはじりじりとした思いで見守っていた。自分が相手をすれば早く片が付くだろうと思う。だが……

これでは、手が回らない。

如何に万能な精霊といえども、多くのことを一遍にできるわけではなかった。

リゼは今、3つの術を同時に発動している。

1つは、森とこの場とを切り離すための結界。

影に逃げられては堪らないし、（散々暴れて森を破壊している感は

否めないが）これ以上の森林破壊を招かないようにと張ったものだ。更地となった地面を囲うことにより、影をこの場に拘束し、森への被害も止められる。

これは、リゼの意思……というよりは森からの要請（リゼに対する苦情とも言つ）を受けたからだ。

森の要請という名の苦情を受けたりゼは、「私のせいではない！」と抗議したが……結局はリゼが折れて今に至る。

まあ、それはいい。リゼからすれば些細な術で、それほど苦勞するというものでもないのだから。

問題は残りの2つの術だ。

残り2つは、^{イフェルノ}侵奪者の侵入を阻止するための結界をキールとユリアにかけていた。

そのため、リゼは少女を背中に庇う以外、キールに加勢することもできなかつたのだ。

何故二人にも結界をかけたのか？

これは、^{イフェルノ}侵奪者の状態がひどく不安定だからだ。

不安定な状態だからこそ、上手く力が使えていないとリゼは推測し、だからこそ何が起るかわからないと術をかけた。

そうでなければ……影が十全に力を使えるのなら、今頃キールを問答無用で森の外へと飛ばして、勝手にケリをつけている。

その結果、救えそうな命を。小さな少女を犠牲にしようとも関係なく。

しかし、事態はリゼが思うよりもおかしな方向へと進んでいる。

^{イフェルノ}侵奪者は影として表出し、その代償のように不安定を余儀なくされ、その不安定さを補う為にユリアに再び侵入しようとするのか、それともキールへと標的を変えるのかが分からない。

それを防ぐために結界を二人に張ったのだが、

思った以上に難しい……

侵奪者イラエルの存在を内部から弾くことも、外部から侵入されないように守ることも未だかつて行つたことはない。

内部から弾くことは何とかなつたが、外部から守ることは不可能ではないと思うだけで、守り切れるかどうかは分からず、だからこそより強固に、侵入する隙間がないほどに頑強に結界を張っている。その結界の維持が何気に大変で、それが仇になつてリゼは身動きが取れなくなつてしまつたのだ。

そして、リゼはキールと影の動きに集中する。

緩慢な動きで飛礫を放ち、ガリガリと地面を黒紫炎で焦がす影に、キールは隙を見つけては懐に入り込み切りかかる。

ブンブンと飛礫が放たれる風切り音と、炎が弾け、地面に叩きつけられる激しい音、キールの詠唱と烈迫の気合がびりびりと空気を震わせる。

だから、リゼは気付けなかつた。

「
ねえ？」

か細い声が空気をほんの微かに揺らす。

音と音が重なり震動し、轟音となつて襲ってくる音の連なりの合間。囁かれた音は優しく空気に溶け、気配に敏いはずの精霊は、そのか細い吐息を逃してしまつた。

吐息を零したユリアは、ゆっくりと目を開け、音もなく身を起こした。

その瞳は何かを探すように彷徨い、やがて

ああ、そこにいたのね。

探し当てた一点を透きとおった銀色の瞳に映したのだった。

32話、天上の調べ

少女は長い白髪を乱れるに任せ、白髪の間から見える光景を銀色の瞳に映していた。

白髪に隠された瞳は、どこまでも見透かすように神秘的な輝きを放ち、前を見据える。

ユリアはゆらりと前へと進む。

目指すところを銀の瞳に映して。

「ねえ、」

うつすらと唇が開き、細い声が漏れる。

その声は誰にも届かず、空気を翳る轟音の中に消えた。

「何を、苦しんでいるの？」

また一歩ゆらりと進みユリアは問いかけるが、それもまた音の合間に沈んだ。

「泣かないで。」

何故、そんなことを自分が話しかけているのか？

何故、慰めの言葉をかけているのか？

ユリアは何も分からないまま、ただ吸い寄せられるように足を進める。

泣いている、それ。

嘆いている、それ。

悲しみ、疲れ、苦しみ、狂った、それ。

居場所を求めて彷徨う、それ。

届かぬ嘆きに身を震わせる、それ。

砕いてくれ、終わりにしてくれと叫ぶ、それ。

ユリアは荒波のように寄せてくる感情に、ただ悲しげにその顔を曇らせ、

「泣かないで」

透きとおった銀色の瞳でそれらを見つめた。

泣かないで。

さあ、あの子のために。

苦しまないで。

あなたの声を届けましょう。

わかっているから。

あなたの想いを伝えましょう。

泣かないで。

さあ。救いましょう。

思いと想いの挟間。

熱に浮かされているかのように霞む思考の合間。

耳元で囁かれているのか？ それとも遠くから声をかけられているのか？

さあ、行きましょう。

近くて遠い声がユリアを促す。

ユリアは細い呼吸を繰り返し、呼吸を徐々に深くする。

大きく、緩やかに。

口から、肺へ。深く深く繰り返す。

肺から、腹へ。腹から、血へ。血から、細胞へ。

身体の隅々まで、深く深く繰り返す。

もう、これ以上深く出来ないというところまで、深く、大きく、緩やかに。

血が激しく脈打ち、細胞という細胞が熱く滾る。

熱い。熱い。熱い。熱い。熱い。熱い。熱い。熱い。熱い。

熱い。熱い……………

……………熱くて我慢できない。

さあ。わたしの詩^{うた}を。あなたの歌^{こえ}を。

はい。とユリアは小さく頷き、身体を震わせ、喉を、肺を、腹を、血を、細胞を。熱く滾った自分の全てを一気に解き放つべく、大きく息を吸い込んだ。

無造作に放たれる黒紫炎の飛礫が、熱波と共にキールに殺到する。右手に握った風刃で叩き切り、左手に纏った水籠手で叩き潰し、炎弾を掻い潜るように近づき、すれ違い様に一閃。

影は風刃に一瞬動きを止めるが、また力を充填させ炎弾を揮う。

それを二度、三度と言わず、何十回と繰り返しているが、影の動きは変わらない。

単調な作業のように炎弾はキールに放たれ続ける。

避けられないわけでも、切り抜けられないわけでもない。

しかし、一向に攻撃の速度も質も変わらないのでは、ジリ貧だ。

額からつーつと流れてくる汗が、熱さからくるものではないことをキールは自覚していた。

このままじゃあ……………ヤバい!!

影の攻撃が止む気配は全くない。

幾ら切りつけても影は変わらず、消耗しているのかさえも判別がつかなかった。

ちよつと手を抜こうものなら即効、殺される。

殺されないためには、動き続けるしかなく、動き続ける限り“死”は避けられる。

けれど、それもいつまで持つのか……

動きまわれれば生きられるが、起死回生の一手があるわけでもない。

疲れて鈍るだけでお先真つ暗。

どんだけ、ハードなんだよとキールは胸中で呟き、乱れそうになる息をなんとか整え風刃を握り直してまた影へと突進する。その時、

『ああ 愛しい子よ さあ 行きましよう 彼の地へ』

天から歌が降ってきた。

黒紫炎の飛礫がキールに切られ、叩き潰され、地面に爆ぜる轟音の中。

その音を掻い潜るように鮮明な声がキールの耳朵を打った。

星が煌めく音を聞くことができるなら、こんな音なのではないかと思っような。

囁くように密やかに。

けれど聞き逃すことが出来ないぐらい、きらきらと煌めく声。

『ああ 悲しき子よ さあ 戻りましょう 此の地へ』

そのあまりにも美しい声。あまりにも優しい旋律に、キールは思わず頭上を仰いだ。

天上から響く声を探すように、キールは星空を見上げる。どこまでも深い夜空を。

それは、闘いの最中にはならない、恐ろしいまでの愚行だ。

完全なる無防備を晒し、自ら死に行くような行為に他ならない。

その愚行は、一瞬の合間のことだったが、単調な攻撃を続ける影との闘いにおいては生死を分けるに十分な一瞬（時間）。

何やってんだ！

胸中で自分自身を罵倒し、死へのカウントダウンに慌てて臨戦態勢を取り戻し、生への活路を見出すべく最善の方法を模索しようと、したのだが……………

「えっ？」

影が……………

「泣いてる？」

影の目がどこにあるかなんて、わかるわけがないのに。

それが涙を零していることだけは、ハッキリとわかってしまった。振り上げていた腕をパタリと下ろし、噴き出す黒紫炎はしゅんと勢いをなくして、はらはらと涙を流す。

静かに、ただ静かに泣いていた。

流れるそれが、ぼたぼたと地面に零れジツジツと地面を焦がす。

その地面の焦げる音だけを歌の中に潜ませて、影は一切の動きを止めた。

これは何の冗談なのかとキールは影を凝視したが、どんなに見つめても何が起こっているのかなんてわかるわけがなかった。ただ、

『ああ 嘆きの地 最果ての地の絶望よ』

影の攻撃の一切がなくなったために、合間を縫うように天井から降ってきた声。

柔らかく、繊細な。羽のように軽やかで、のびやかな歌がどこから奏でられているのかだけが分かった。

天上から降ってきたと思った声は、キールとリゼの中間。

そこに檻褸を纏い、白髪を揺らして声高らかに歌う少女がいた。

「ユリア？」

いつ目覚めたのか？ いつから気づいていたのか？

いや、それよりも彼女は何故歌っている？
それに、これは何だ？

柔らかい旋律が、小さな彼女の口から、喉から次々と溢れていく。
小さな彼女の喉と言わず、肺と言わず、器官という器官を震わせ、
彼女全体から紡がれ、大気が彼女の声一色に染め抜かれていく。
優しい光が天上から普く注がれるように、天上から麗しい旋律がキラキラと降りてくる。

「何なんだ、これは？」

呆然とキールが見つめる先には、星の瞬きのように煌めく粒子がどこからともなく現れ、さらさらと舞う。

旋律に合わせて、煌めきが周囲一体に粉雪のように舞い降りる。

労わるように。

慰めるように。

祝福と許し。

嘆く者たちへの慰め。

堕ちた者たちへの救済。

絶望に駆られた者たちへの終焉。

全ての苦しみから、解放を願う優しい歌に、慈愛に満ちた柔らかい声に、天上の美しき旋律に導かれるように舞い続ける。

「これは、一体？ 何なんだ？」

呆然と発した独り言に、

「何が、起こっているんだ？」

リゼの呆気に取りられたような声が続く。

思った以上に近い声に驚いてリゼを探せば、キールの横でポカンと口を開けていた。

その姿に、キールは少しの安堵を感じリゼをからかいたい気もしたが、何も言えず身動きすることも躊躇われ、結局二人してボケっと前を見ることしかできなかった。

それもこれも、ユリアが奏でる旋律が美しすぎて、言いようも無い陶酔の渦に引き込むからだ。

そして旋律以上に、ユリアの声があまりに神秘的で、神がかり的な麗しさだったから。

そして

「これは、……………奇跡、なのか？」

リゼもキールも目を疑う情景に、最早何を思えばいいのかさえわからない。

煌めく粒子はぐるぐると影を廻り、影を光の中へと隠すと柔らかい光を瞬かせ始めた。

絹の光沢のような柔らかい光は、淡い点滅を旋律に導かれるように繰り返す。

少女の声は高く、高く、天へと駆け上がり、その声に、その歌に合わせて強く、弱く輝く影は光に包まれた。

駆け上がるユリアの声は、緩急をつけ、強弱をつけて、星々へと吸い込まれ、その音を夜の中へと収束させていく。

ユリアの声に導かれた煌めきもまた、緩急をつけ、強弱をつけると、その光を天へと走らせ、夜の中へと吸い込まれていった。

後に残ったのは、

「お帰りなさい。」

ユリアは銀色の瞳を細めて、徐に手を差し出した。
そこには、

「……………？」

柔らかい炎を纏った獣と、乾いた砂塵の匂いをさせた獣が行儀よく座っていた。

ぼかんと口を開けたキールの横で、

「……………精霊？ そんなばかな……………」

信じられないと口を開けたりゼガ呟いたのだった。

33話、夜明け（前書き）

10,000ユニークありがとうございます。

皆様に読んで頂けること、大変感謝しております。

これからも楽しんで頂けるようがんばりたいと思いますので、よろしく願います。

33話、夜明け

『あなたは、華炎を纏う者 緋き守護、フレア』

神聖な気配を漂わせ、ユリアの小さな唇が動く。
すると、曖昧な獣の姿が、美しい緋炎を纏った狐の姿に変じた。

『あなたは、大地を駆ける者 翠黄の疾駆、ルード』

次いで紡がれた音に、緋炎の狐の横にいた獣が、翠色の目をした砂色の狼へと変じた。

その二体の精霊の変化に満足したかのようにユリアは微笑みを浮かべ……

ぱたり。

前のめりになって倒れてた。

後に残されたのは、あまりの事態についていけなかったキールとリゼ、そして自分の変化に戸惑ったように動けずにいる緋炎の狐と砂塵色の狼だった。

気を失ったユリアに、焦って駆け寄り脈拍を取って、一通り調べた結果……命に別条はなかった眠っているだけだと判明してキールは安堵の息を付いて、今現在。ユリアを抱えて、夜半に荷物を放り出

してきた野営場所へと2体の精霊を引きつれて戻ってきたわけなのだが、

「そっちは、火の高位か？」

緋炎の狐にリゼが問えば、

「……………そうなんですか？」

と問い返され、

「それで、そっちは…………土と風、混じっているが？」

困惑気味にリゼが砂塵色の狼に問えば、

「……………えっ!!」

と、言われて初めて気付いたとばかりに、固まった。

「一体、これは……………どうなってるんだ？」

片や呆然とし、片や驚きで固まった精霊たちを前に、途方にくれてリゼは頭上を仰ぐ。

その姿に、リゼの隣にいたキールは何が起こったんだろう？と首を傾げてみたが、

「……………」

リゼも、当事者たる2体の精霊すらも把握できていないことを、人間のキールが分かるわけがなかった。

そして、

「「「……………」」」

リゼの問いかけの後、長い沈黙が続いている。

3体の精霊が無言で沈思している今、ハッキリ言っでとっつっても重苦しい。

誰か、この沈黙を破ってくれ〜と居た堪れない空気の中、思念を送っていたキールの想いを感じ取ったのか、

「……………ほうとうに、わたしは高位に？」

どこか釈然としない、如何にも不思議そうに緋炎の狐が呟いた。

その少し高くて、柔らかい声は女性的で暖かい。

その声の主にリゼは無然とした顔で、

「見ればわかる。」

とふんつと鼻を鳴らした。

しかし、相手は訝しそくに、「……………ほんとうですか？」と繰り返すので、キールはヒツと息を呑んだ。

横にいるリゼの気配が冷たい。

冷たいっていうか、凍りそう。

「当たり前だ。我が見誤まるはずもない。そなたは火の高位だろう。」

「

「しかし……わたしは……」

冷たく刺々しいリゼの声に、緋炎の狐が縋るような視線が向け、口を開いたが途中で口を噤んだ。

それに苛々した口調で、

「何だ？何か言いたいことがあるのなら、言え」

と命令口調でリゼは言い放った。

その威圧的な気配に当てられたのか、緋炎の狐が息を呑んで数秒固まり、

「……わたしは、中位のはずなのです。

なのに……どうして？なぜ、位階が上がっているのでしょうか？」

「は？」

変なことを言われ、リゼは冷酷オーラもどこへやら目を点にして狐を見やる。

そんなリゼに追い打ちをかけるように、

「あつ、俺は土、のはずなんだけど……どうなってるんです？」

何やら軽い口調で頓狂な質問が降ってきた。

それら、意味不明な質問に、

「はあ……？」

リゼは凡そ名高い精霊らしからぬ声を上げたのだった。

「わたしは今、どうしてこのような姿になっているのでしょうか？」

緋炎の狐が自分の前足を掲げ、矯めつ眇めつ見では頻りに首を捻れば、

「俺も、俺も。どうして姿を保てるんだろう?。」

嬉しいけど、何でだろう?とふさふさの尻尾を盛大に振りながら、砂塵色の狼が興奮している。

「……………」

その精霊たちに返す言葉を、人たるキールが持つはずはなく、

「……………」

啞然とした顔で沈黙してしてるリゼにも、どうやらないらしい。

そして、

「あっ……………」

真っ暗な森の木々の間から、幾筋もの淡い光が差す。

星々の瞬きは薄れ、地面からつつすらと光が昇っていく。

墨を刷いたような真黒な空が薄紫に染まり、雲を桃色に染める。

「……………夜が、明けた。」

キールの呟きに、リゼも「ああ」と光を見やる。

森は朝露に包まれキラキラと光を反射し、風が柔らかく木々を揺らす。

実に美しい、夜明け。

「長い夜だったな。」

「ほんと。長い夜だった。」

キールとリゼは、朝焼けの空を見上げた。

ほんとに長かったし、疲れる夜だった。うっかり死ぬんじゃないかと思っただけで、キールは朝焼けの空を飛ぶ鳥たちを目で追いかける。けながら感慨に耽る。

リゼと イフェル 侵奪者 の神速の闘い、ユリアの中への侵入、影との闘い、それから

ユリアの歌、きれいだったな。

今、思い出しても鳥肌が立つくらい、きれいだった。

息もできないくらいに感動した。涙すら浮かべる余裕もなかったくらいに。

何より神聖な空気に圧倒されっ放しだった。

また、聞けるといいな。

ぼんやりと朝焼けの空が青く染まるのを見ながら、キールは奇跡の歌を心に刻む。

その顔は、柔らかく笑っていた。

キールと同じように空を見上げていたりゼもまた、優しい気配で笑

った。

そんな優しい空気の後ろでは「どうして?」「何で?何で?」「と迫る2体の精霊の存在は、もちろん完全無視。

「美しい朝だ。今日はいいい日になるぞ」とか、「今日はゆっくりするか」と精霊たちに背中を見せ、ひたすら人と精霊の主従は空を見上げる。

現実逃避を決め込むキールとリゼの目の前には、何の変哲もない、いつもの青空が広がっていた。

33話、夜明け（後書き）

長い1日でした。

というよりも、夜だけでこんなにかかっているなんて!!
びっくりです。ほんとに。。。

取りあえず、この話で一旦一区切りです。

次回からは新しい話になる予定です。

次回からは新しい人たちを出したいと思います！

34話、旅人と精霊と騎士と（前書き）

だいぶ過ぎてしまいましたか………

あけましておめでとうございます。

今年も何卒よろしくお願い致します。

さて、今回から新章突入です！！

34話、旅人と精霊と騎士と

「いました!!」

極小さな興奮が木々の間から上がった。

そこにいるのは、3人。

旅装の質素なマントの袷から、ちらちらと見えるのは鎧。

しかも、白銀の輝きを放っている。

「しっ!」

その内の1人が、先に声をあげた1人の口元を押さえて目を細めた。
森に潜むこと3日。

情報通りの場所とは若干異なる場所で見つけた米粒ほどに小さい標
的が、チラリと振り向いた。

「気づかれたか……」

さほど気にした様子も無く、視線を向けられたことに最後の1人が
口の中で言葉を転がし、

「行くぞ!!」

意を決したように2人に言えば、「ハッ!」と小気味良い返事にな
され、3人は森の木々の中へと突入した。

「ユリア、そろそろ休もうか？」

森の中の小道を歩くのは、大鷲が乗っている行李を背負った赤銅色の髪の青年と、彼の服のすそを掴んでちよこちよこ歩く白髪の少女。そのそばに、赤狐と砂色の狼がゆっくりと歩いている。

キールとユリア、そしてリゼ、フレア、ルードの精霊たちだ。

あの日、あの イフェル 侵奪者 と一戦を交え、ユリアの歌で イフェル 侵奪者 の影から精霊が現れてから10日の月日が経過し、一行は森の小道から町に続く街道へと足を延ばしていた。

「あそこに湧水があるから、ちょっと休もう。」

後ろを振り向いて笑顔でキールが言えば、ユリアの首がコクンと動いた。

その仕草に若干ニヤケつつ、それじゃ行こうかとキールは小道から一歩足を踏み出し、コンコンと清水が湧きだしている場所へとゆっくりとユリアを誘導するのだった。

湧水で喉を潤したユリアに、キールは「はい」と乾燥させた果実を渡す。

甘く、食べやすい大きさの乾燥果実に、ユリアが淡く笑みを向けた。その笑みに、キールが感動に打ち震え、頭を撫でようと手を伸ばした瞬間、

「さあ、こちらにお座り下さい。」

「地べたに座るなんて、ダメですよ」

2体の精霊がスツとユリアを攫っていった。

狐と狼はチラツとキールを見やると、ふふんつと鼻を鳴らして舌を突き出した。

そして、キールが何か言おうとする前に、ユリアの足もとに寄り添うように身体を丸くした。

ここは我等の場所だとそれとなく、主張することも怠らずに。

その様子に、キールは深々と溜息をついて水筒に水を組む作業へと移行した。

あの夜が明け、ユリアが目を覚めたのは昼も過ぎ太陽が傾きだした頃だった。

ユリアが起きるまでの間、キャンキャンとリゼに事情を、説明を……と言い募っていたフレアとルードに僻々していたものだが、ユリアが起き、これで事情を聴けるとほっと一息をついた。

しかし、

「……………??？」

キールを見て、リゼを見て、フレアとルードをと順繰りに見ていたユリアは、繁々と狐と狼を何度も見ていたかと思うと、キョトンとした表情でキールとリゼを見るや、

「だれ？」

一言小さく呟いたのだった。

その一言に唾然としたのは、キールとリゼよりもフレアとルード。

夜明け前に影から現出した2体の精霊たちだった。

ユリアにわからないか？と訊けば、首を振られ、夜のことを覚えてるかと問えば、キョトンとされ、それじゃあ、あの歌のことはどうか、覚えていないかと言うと、不思議そうな顔をされた。

詰まる所、ユリアは全く、これっぽちも覚えていなかったのだ。

自分がどうなったのか。そして、どんな奇跡を起こしたのかさえ覚えておらず、2体の精霊に 名 を付けたことすら分ていなかった。

きよんとしているユリアの前で、固まる一団だったが、いち早く復活したのはキールだった。きつと精霊たちよりも受ける衝撃が少なかったのだろう。ただ、

「……………。ああ〜とりあえず、お腹すいてないか？」

何の脈絡もなくこう言ったあたり、キールも動揺から完全復活を果たしたわけではなかったが……
それでも、その問いに躊躇いがちにユリアが小さくコクリと頷いたことで、固まっていた精霊たちの時間も動き出したのだった。

結局、あいつらはユリアにべつた〜り、懐いちゃったんだよな〜

忘れられたとはいえ 名 を付けられたからなのか、フレアとルードは 契約 を結んでいるわけでもないのにユリアの側から離れることなく、まるで飼い犬のように尻尾を嬉しげに揺らして傍らに侍るようになった。

そのあまりのべつたりぶりに、キールの頬が何度となく引く付いている今日この頃だったりする。

でも……………

キールは、2体の精霊がパタパタ尻尾を振りながら話しかけているユリアを見やる。

ほんの10日前までは見るのが叶わなかった表情が、そこにはあった。

しかも、フレアとルードが関心を買いたいがために必死に声をかけているからなのか、はたまたそれとは関係ないのかは判断がつかないが、ユリアは確実に明るくなり、また声を発してくれるようになった。

それだけで、キールは温かい気持ちでいられた。

そんな温もりの只中、ユリアの微かな笑顔を堪能していたキールに、

「やっと、来たぞ」

側で羽を繕っていたリゼが顔を上げた。

その声に、「何が」とはキールは聞かなかつた。

ただ、面倒な奴らが来たなと顔を顰め、でも俺には関係ない……………と、いいなと遠い眼差しで明後日の方向を向いた。

そんな現実逃避気味なキールの横で、リゼもまた遠い目をして青空に流れる白い雲を目で追っていた。

それからしばらくして、

「御前、失礼致します。」

小道からではなく、草を掻き分けてやってきたその人は、いきなり片膝について恭しく頭を下げた。

その人の後ろにいる2人の人も、同じように片膝をついている。それに相對するのは、

.....???

誰に言ってるんだろう？

突然現われた3人に、岩に腰かけていたユリアの思考がぴたりと止まった。

ユリアは現われた3人を順繰りに見た。

3人の恰好はどれも似たような恰好で、フードがついたこげ茶色のマントを羽織っている以外は良く分からなかったが、

「フードぐらい取ったらどうだ。」

リゼの傲然とした口調に、「これは失礼しました」と言ってパサリとフードを落としたので、その下に隠れていたものを目にする事ができた。

先頭の人は黒髪の男の人で、その後ろにいる人は赤茶の髪の男と、茶色の髪をした女の人だった。

その3人が誰なのか。

ユリアにはわからなかったが、どうやらキールとリゼの知り合いではあるらしいとはわかった。

そして.....

ユリアは両脇に侍っているフレアとルードの首もとに手を伸ばし、その体をギョツと抱きしめ、2体の間にその小さな体を潜ませた。

“人”が怖いだけの存在ではないことは、10日前、不思議な……
……とつても温かくて優しい、けれど切なくて胸がキュツとした、
女の人の夢を見た後から頭では理解できるようにはなった。
いつも優しい目を向けてくれるキールに触れ、“人”に慣れてきた
のだとぼんやりと思っていたのだが、

コワイ

それは違ったようだ。

離れた場所にいるというのに、ユリアに視線の一つもかけていない
というのに、ユリアはそこに“人”がいるだけで怖ろしかった。
ユリアの体は2体の狭間で小刻みに震えていた。

そんなユリアの怯えなど関係ないかのように、

「そろそろ、お戻り下さい。守護様」

黒髪の男がゆつくりと顔をあげ、灰色の瞳をリゼへと向け、それを
合図にしたのか赤茶の髪に琥珀色をした男も、茶髪に抜けるような
青目をした女も顔を上げた。そして、

「そうですよ。もう3年も離れているんですから、そろそろ戻って
下さいよ。」

「守護様。どうぞお願い申し上げます。」

赤茶髪の男と茶髪の女が真摯な瞳をリゼへと向けた。
それに対するリゼはというと、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ツーンとそっぽを向いていた。

「お願い致します。」

「国では、お帰りをお待ちしてるんっすよ。」

「一度だけでもお戻りくださっても、よろしいではないですか。」

とそっぽを向いているリゼに必死に言葉を重ねるが、その^{くち}尽くを無視された。

それに業を煮やしたのか、

「殿下からもお願いしますよ〜」

傍観を決め込んでいたキールに、赤茶の男が突如話しを振った。それにキールは、

「誰に話しかけてんの？」

殿下って誰のこと？どこにいんの？ と薄ら寒くなるようなイイ笑顔で返した。

その笑顔に先頭の男はピクツと肩を動かし、余計なことは言うまいと口を閉じたが、赤茶の男は何をトチ狂ったか、笑いながら口を開き、

「またまた〜。殿下も人が悪いっすね〜」

殿下っていったら、レイゼツツツ ぶふおああ！！！！！！」

キールの無詠唱の風の突風に、どこぞへと吹き飛ばされ、その余波を食らったのか、その場に残された2人のマントが盛大に捲くれ上がった。

その下にあったのは、陽光を弾く銀色の鎧。

その胸には大国として名高い、ハルシユタイト帝国精霊部隊の紋様が刻まれていた。

「いてててて……」と草をガザゴソと掻き分けて、草まみれになって戻ってきた赤茶の男も、2人と同じ鎧に身を包んでいた。

35話、精霊部隊隊長とままならぬ部下

この世界、グリオールには中央にある大きな大陸（ユラ大陸）と、その大陸の4分の1程の大きさの大陸が南北に1つずつ（北にノウズ大陸、南にカルバシア大陸）、そしてその他の島々で成り立っている。

数百、大小の国々が隆盛しては衰退しており、1000年以上の歴史を築くに至った国がどれほどあるのか。

長大な歴史を築くまで繁栄を謳歌した国家は、極少ない。

その極少ない国家の中でも、突出している国家がある。

その1つがハルシユタイン帝国だ。

その歴史は古く、1000年を越え、その栄華は今尚続いている。大国中の大国として、どんな辺境にいようと聞いたことがないという者はいないだろう。

歪な楕円形をしているユラ大陸の北西を統べる彼の大国は、広大な領土を占め、周辺諸国を屈服させている巨大帝国であり、優秀な軍を有している軍事帝国だ。

ユラ大陸最大にして、グリオールでも1、2を争う巨大帝国に敵は多い。

しかし、周辺諸国が逆らうことはない。

否、逆らう気概など持つこともできない。

そう思わざるを得ない、圧倒的な軍事力があるからだ。

その軍事力を支えているのは、周辺諸国には恐怖の目で、自国民には尊崇の目で見られる、誉れ高き精霊部隊が連綿と帝国を支えているからに他ならない。

その巨大帝国のエリート中の超エリート。

生粋のエリートであり、国では上級貴族、いや、皇族でさえもその圧倒的な力に畏怖する精霊部隊第四小队隊長グレイアは、

「……………（ああっ）」

その精悍な顔に、滅多にないことに冷や汗を浮かべていた。

その表情は常にないぐらいに青褪めており、まるで普段グレイアの冷徹な視線の先、睨んだ相手が向けている表情かおを自分自身で体現しているかのようだった。

それというのも……

（げしっばしっ……!）

「つつ痛つつ……! 殿下……ひどいっすよ……」

「うん？」

変な声をするなりリゼ、これは何の声かな？」

（げしげし）

「いたい〜痛いつすよ〜」

「さあなり気のせいではないか？それとも、馬鹿な獣の鳴き声ではないかな？」

（げしげし、げしげし）

「あっ！うげっ！痛！」

「ああ、そうかもね。毎度毎度、学習力の片鱗さえ見えない、バカの声か」

（げしげし、げしげし、げしげし）

「ひい〜、許してください〜、痛い痛い痛い〜」

「……………あの」

（げしげし、げしげし）

「やめっ、やめてくださ〜い〜」

「……………そろそろ、ご容赦ください。」

「そんなものでも、一応私の部下ですので。」

失言しまくりの部下が、思いつきり足蹴にされ、ガキ大将にいじめられる貧弱な小僧のようにボコられているからだ。

抵抗さえできていないその姿が、憐れを通り越して滑稽と言いたいところではあるが、隊長としてのグレイアはチラッともしも思うことはできなかった。

ただ、「お前は本当に誉れ高き帝国精霊部隊か？」と真剣に部下に問いたい。

隊長であるグレイアは強くそう思った。

「部下の賤ぐらい、しっかりしとけよ。」

「その通り、このように物覚えが悪ければ背中なんぞ預けられんぞ。」

「いかにこんな部下を持ってお前も苦勞するよな〜という、有難くも無い同情的な視線付でキールとリゼが言ってきたときには、賤のなっていない部下こと、帝国精霊部隊第四小队所属のフェアロイは地面と仲良しこよしになっていた。」

その部下の情けなさに、お前は中位の火の精霊と契ってる帝国屈指の騎士だよな？とグレイアは悲しみを瞳に浮かべて心の中で問いか

けていた。
そして、口では

「部下の躑がなっておらず、申し訳ありません。」

深々と頭を下げたのだった。

その殊勝な態度にキールとリゼは、満足気に頷いたが、その足元に転がっているフェアロイの背中からキールの足が下ろされることはなかった。

それに、グレイアは何か言おうと口を開け、

「それで、何とお呼びすればよろしいですか？」

凜とした女性らしい声にうん？と首を傾げたキールとリゼに、フェアロイの為に開けた口は他の為に使われることになった。

「先ごろ精霊部隊第四小隊に配属されました、ネイザです。」

グレイアの紹介に、ネイザと呼ばれた女はリゼに対して深々と頭を下げた。

そんなネイザの頭をキールは唇の端を僅かに上げ、リゼは冷ややかな視線で見ている。

その視線に、グレイアは嗚呼と呻きたい気持ちを何とか押さえつけ、静かな表を必死で取り繕ったが、内心

ネイザ、お前もか。お前も馬鹿なのか……

胃が痛いと部下の失態に一人苦しむのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6170g/>

放浪王子と異端の聖女

2010年10月8日23時50分発行